衝撃注意47P

When Wriggle Cry?

混乱と混沌の協奏曲。いつかどこかで見たような見たことないようなリグル満載！

パロディ特集

読切り作品

SS：社 蛍夜/夏樹 真/くろと/越冬
漫画：Step/怒羅悪/言示弄/くらげん/長閑/キッカ

好評連載陣

SS：如月翔/壁々/銅おりは
漫画：ひどぅん/草加あおい/羅外/東/HOUSE/草葉/preludenano

あの人とみなさんのおかげです　第2弾
まさかの月刊誌内月刊誌……

月刊POMDEBUG

提供：（株）リグル製菓

リグると! 涼冷(すずひや)チルノちゃんの憂鬱

ひどぅん

月刊ナイトバグ　2010年2月号

目次 (3p)

Cover design　小崎

蠢々魔法図書館

作:Step

※紙魚＝紙を食べる虫

そこでリグルさんに紙魚を外へ連れ出して頂きたいのです
そんな勝手な
追い出された蟲はどうすればいいんだ
稗田の所にでも行って頂戴

……
勝手すぎない？
嫌なら殺虫剤

うう、みんな、逃げ出すよ、この館は怖い所だ
蠢符
リトルバグストーム！

ギョッ
えっ……
そんなに？
うじゃ

うじゃうじゃ
こ、怖あい……
こわっ

うーん
寒いせいかまだ半分ぐらいだなぁ
よし、もう一回

ええっ!?

蟲符

ナイトバグストームっ!

ザッ

ッ!

こっ、怖ぁっ、こぁーっ!!!

※紅魔館

こあっ、こあぁーっ!

ドドドド

――へぇ

※水符「ジェリーフィッシュプリンセス」

ドカーーン!!
ボカーーン
あの子蟲が苦手だったんだ
錯乱してる
へぇじゃないッ!!
――って蟲がどうこうどころの騒ぎじゃないよッ!!
とにかく止めないと蟲も館もめちゃくちゃだ
こ、こあーっ!
うじゃ〜〜
ナイトバグトルネード!
カチッ
司書さん止めるんだ
ドーン
こあーっ
出てけ!
こわっ!?
ピクッ

『 無題 』　亜斗

パロディ特集ということで年末から息巻いて漫画を描いていたはずが、気付いたら全く関係のないイラストになっていました。どうしてこうなった…(^o^;)

『 チョコとリグル 』　豆板醤

バレンタインにちなんでチョコとリグルが描きたかったが、チョコが全くわからなかった結果がこちら

地位向上を目指して －紅と花－

著者：如月翔

「何これ、殺虫剤？」
「前咲夜さんに虫が出るって言ったら・・・」
「それでこれを？」
「みたいですね、忙しいのにわざわざ買ってきてくれて嬉しいですけど」
「駄目ねこれじゃあ害虫どころか益虫、それに肝心の花にまで影響与えるでしょう？」
「うーん？　使ったことないですから判りませんね」
「そんなものに頼ったら花が台無しよ」
「そうですか・・どうしましょうか」
「何処かに閉まって置けば？」
「そうしておきますか」
「何かに使う機会があるかもしれないしね」
「使う機会があるといいですけどね」

「あのーすいません」
「・・・・・」
「あのーちょっといいですかー」
「・・・・・」
「すいません！」
「・・・はい？」
「用があるので、入ってもいいですか？」
「えーっと、お客さん？うーんでも今日は咲夜さんもお嬢様も留守ですけど」
「招待されてないけど、お客でいいのかな？」
「招待されてないのなら入っては駄目です！」

「え？　それは困ります」
まさか話を聞かれないどころか、門前払いされるとは思わなかった。
でも、ここで素直にそうですかと大人しく引き下がるわけにもいかない。
「ふむ、私は侵入者を入れるわけにはいかない、けど貴方は侵入したい、お互いに譲れない立場って事ですね」
「いやいやちょっと待って、用はあるけど侵入したいわけじゃないです」
「意見を違えた者は闘わなければ・・・って用がある？」
「用があるから入ってもいいですか？　と聞きましたけど」
「用があるならいいですよ、では外で話すのも何ですし用件は中で聞きましょう」
少し話がずれていたけど、何とか門を通り過ぎることが出来た。
それにしても・・・相変わらず広い、こんなに広い庭を持っていたら管理するのも大変だろう。
「綺麗な花が咲いていますね」
「・・・でしょう！　いやあ結構頑張って管理しているのに皆さんあんまり興味ないみたいで反応してくれる人がいないのよ」
子供みたいに嬉しそうな笑顔で話す、まるでルーミアみたいだ。
これだけの広い庭を一人で管理しているのだろうか？
理解者も少ないのか、門番も大変なんだ

な。
「あんなに綺麗なのに紅魔館の人も興味が？」
「うーん、咲夜さんとフランドール様はたまに手伝ってくださったりしますけど、お嬢様やパチュリー様はあまり興味がないみたいですね」
「フランドール？」
「ああ、フランドール様はお嬢様の妹さんです。外出は勿論パーティにも出られないのでご存知ないですね」
「ロケットの時にもいませんでしたよね？」
「・・・少し事情がありましてね、どうぞこちらです」
　事情って何だろう？吸血鬼は強い分弱点も多いって聞くけど何か関係あるのかな？
　姉と違って一度も会ったこと、どんな人なんだろう。
「どうかしたの美鈴？　休憩？」
「フランドール様こそ、まだお昼ですけどどうされました？」
「何となく起きただけだからどうもしないわよ、ところでそれ誰？」
「お客様ですよ、紅茶なら私が淹れますからお待ちください」
「またアイツの？」
　扉を開けるとそこには妹が居た、羽が姉と違って特徴的で綺麗だ。
　・・・姉のことをアイツ呼ばわりするのは少し驚いたけど。
「アイツと言っては駄目ですよフランドール様、こちらの方はお嬢様のお客様ではありません」
「そうこれから気をつけるわ美鈴、初めましてフランドール・スカーレットよ貴女の名前は？」
「リグル・ナイトバグです・・・初めまして」
「リグルね覚えておくわ、自己紹介も終わったし早速遊びましょうか。あ、私のことはフランでいいから」
「フランドール様、リグルさんお待たせしました。それと室内で暴れられると怒られてしまうので夜まで我慢してください」
「夜になったらお姉さまがうるさいじゃない」
「今日は咲夜さんとお出かけになられているので大丈夫ですよ」
「会わないと思ったら居なかったのね、じゃあリグル夜に遊びましょうか」
「うん、いいよ」
　・・・あれ？いつのまに吸血鬼と弾幕ごっこする羽目に？
　つい返事をしちゃったけどどうしよう。
「ところで、リグルはどうして来たの？」
「聞くのを忘れていましたね、ごめんなさい」
「あはは・・・」
　私も忘れていたということは黙っておこう。
　殺虫剤を手に入れるために、私は紅魔館に来たのだ。
「えっと、では紅魔館に来た理由を聞かせて貰いましょうか」
「殺虫剤を譲ってほしくて来ました」
「殺虫剤？　そんなものここにあるの？」
「香霖堂の店主さんが紅魔館の方に売ったと言っていましたけど」
「殺虫剤は確かにあります、ただ譲るのはちょっと・・・」
「勿論買われた物なので、お金なら払います」
「うーん」
「売ればいいじゃない、どうせ使ってないでしょ？」
「確かに使っていませんけど、せっかく咲夜さんが私の為に買ってきてくれたのに」
「美鈴虫に困っているの？」
『虫に困っている』フラン本人は何気なく言った言葉だろうけど。
　私にはとって鋭く冷たい言葉だった、確かに殺虫剤を買うということは殺したいと思う程迷惑をかけているのだろう。
　私の知らないところで仲間が迷惑をかけているなら、私はどうにかしなければならない。
　でも・・・どうすればいいのだろう、私にはどうすればいいのか判らない。
「庭の植物を荒らされるので、困ってはいますけどほんのちょっとですよ？」
「それで咲夜に殺虫剤を頼んだの？」
「自然の流れですし殺すつもりはなかったので、頼んではいないのですが・・・買ってき

ちゃいましたね」
「じゃあ迷惑じゃないの？」
「虫には虫の生活がありますし、中には益虫もいますからね。ただ全体を少しずつ食べられるのは困りますが」
「虫にここなら食べていいって、指示できればいいのにね」
「それは大変魅力的ですね、ですが気長に付き合っていくしかないですね」
「あの」
「はい、どうされました？」
「虫に指示することならできますけど・・・」
「え？」
　私は自分の能力を二人に説明した。
　美鈴さんからはそんな能力があればと羨ましがられ。
　フランからは自分以外の生きてる物を操るなんて凄いと言われた。
　そんなこと言われるのは初めてだから嬉しい。
「これなら殺虫剤いらないわね美鈴」
「そうですね・・・まさかそんな能力を持つ妖怪が居るとは思いませんでした」
　嬉しさと気恥ずかしさで顔に熱が集まる、そして顔が赤くなっているのが判る。
　このままでは恥ずかしくて顔を上げることができない。
「さて、紅茶美味しかったわ美鈴、じゃあ私は夜まで寝てくるから」
「はい、お休みなさいませフランドール様」
「おやすみフラン」
「おやすみ美鈴、リグル」
「リグルさんはどうします？」
「・・・どうしましょう」
「図書館にでもご案内しましょうか？」
「私、本を読んだことがほとんどありません」
「多くの本がありますし、読んだことなくてもきっと気に入ると思いますよ？」
「行ってみようかな」
「判りました、それでは着いて来てください」
　紅魔館の図書館、これだけ広い屋敷の中にあるのだからきっととてつもなく大きいのだろう。
　面白い本があるといいけど、もしなくても探すだけで楽しそうだ。
　しばらく歩くと他の扉よりも大きな扉が見えた、そしてその扉を美鈴さんが開ける。
「パチュリー様、お邪魔します」
「美鈴さんどうされました？　パチュリー様は今お休みになられたところですが」
　広い・・・予想以上に広い。
　窓がないのか暗く、暗くて先が見えない。
　でもあまりの広さに違和感を抱く、いくら広いといってもこれだけの広さを用意出来るとは思えない。
「また夜通し本を読まれていましたか」
「ええ、結局昼過ぎまでお読みになられて、そのまま寝てしまわれたので今寝室にお連れしたところです。そちらはお客様ですか？」
「はいお客様です、フランドール様と遊ぶ約束をされたので、夜まで待つことになりましてね」
「・・・あの、美鈴さんちょっといいですか」
「え、すいませんリグルさん少々お待ちください」
　美鈴さんと誰かは奥へと進んでいく、勝手に動くとまた迷子になるだろうから待つのはいいけど少し退屈だ。
　それに、あの悪魔？の人が私を驚きながら見た気がするのは気のせいだろうか。
「どうかしたの？」
「あの失礼ですけど、あの子とフランドール様を弾幕ごっこさせるなんて正気ですか？」
「危なそうだったら、私が手助けしますから」
「手助けになる前に何かあったら・・・」
「大丈夫ですってフランドール様はルールを守れる方ですから、巫女や魔法使いの時も大丈夫でしたしね」
「美鈴さんがそう言うなら大丈夫でしょうけど、気を付けてくださいね？」
「判っていますって、私とフランドール様を信じてください」
「お待たせしました、私はこの図書館で司書をやっている小悪魔です」
「初めまして、リグル・ナイトバグです。小悪魔さんですか？」
「そうですよ、でも名前と言うより種族です

けどね、それでどんな本をお探しですか？」
「あまり本を読んだことがないみたいなので、漫画がいいと思います」
「漫画って何ですか？」
「漫画というのは外の世界で最近作られたのにも関わらず、一番多く出回っている本のことですね」
「絵と文章がまとめられていて読みやすくてお勧めですよ、面白いですし」
　普段は天狗が持ってくる新聞を読む位だけど、少し興味が出てきた。
　外の世界は凄いな、読みやすくて面白い本なんて。
「漫画読んでみたいです」
「はい、ではご案内します」

「ようこそフランドール様」
「ねぇ小悪魔、美鈴とリグルはここに居るかしら？」
「はい、お二人とも漫画を読んでいらっしゃいますよ」
「そう、ここにいたのねよかったわ。邪魔するわね」
「どうぞ（そういえば夜に遊ぶ約束したって言っていましたね、それに美鈴さんは門に行かなくていいのかな？）」

「美鈴！　リグル！　ここにいたのね探したわよ」
　・・・漫画が面白くて気付かなかったけど寝ていたフランが起きている。
　何時の間にか夜になっていたらしい。
　約束をすっぽかして漫画に夢中になってしまっていた。
「おはようございますフランドール様」
「おはよう美鈴、リグル。待たせたわね」
「おはようフラン、ごめんね？」
「どうして謝るの？」
「え、漫画に夢中になってて・・・」
「そんなこと気にしなくていいわ、待たせたのは私だしね」
「さて、予想通りお嬢様も帰ってきていませんし外に出ましょうか」
「その変わりにお釣りを渡したくなる位楽しませてあげるわ！」

　気付いたらベッドに寝かされていた。
　美鈴さんの提案で私と美鈴さんの二人対フラン一人で弾幕ごっこをしたのを覚えているけど、その後何があったか思いだせない。
　美鈴さんとフランに聞いてみると謝られるし、小悪魔さんに聞いてみても無事で良かったですとしか言わない。
　・・・何ともないから思いださなくてもいいのかな？

（続く）

〈作者コメント〉
　美鈴、フラン、小悪魔を書きたかったので、咲夜さん、レミリア、パチュリーには退場してもらいました。それに出さない方が今回は上手く進められそうだったので・・・さて次回の話が二転三転してるけどどうしよう・・・

蛍を呼ぶ甘露の罠・後編

著者：銅おりは

「――――っ!?」

　ぴぃん、と触覚を跳ねさせ、突然『気を付け』をするように背筋を伸ばしたリグルを、ヤマメが心配げに見つめる。

「どうかしたの?」

「え、あ、……その、なんだか猛烈に嫌な予感が」

　このところすっかり不幸センサーと化したリグルの触覚だが、往々にしてそれが不幸を察知した時には手遅れという、実に役に立たない代物だ。今回も同様、リグルが言葉を終える前に、周囲の森に唐突に変化が訪れていた。

　これまでは休むことなく聞こえていた小鳥の囀りや蟲の声。そうしたものが一斉に消え失せ、痛いほどの静寂があたりに満ちる。

　次の瞬間、まるで突風が吹きつけるように木々が唸りをあげた。

　ざん、と巨人が荒々しく森をかき分けるように――あるいは、幾百の樹齢を重ねる木々がおのずから支配者たる『彼女』に道を譲るように。重なる梢が、枝が、うねりざわめき、左右に押し開かれてゆく。

　大気すら震わせる威圧感を伴って、彼女はそこに居た。

　鮮やかな赤いチェックのスカートに、袖がまぶしい白いブラウス。その上には同じ格子模様のベスト。リグルと同じ緑の髪。

　拡げた薄いピンクの傘の下、ずたぼろのチルノを引きずりながらの微笑がいっそ清々しいくらいの威圧感を伴っている。

(ぁあああああ!?　やっぱりぃい!?)

　――四季のフラワーマスター、風見幽香。

　通り名こそさりげなくミスティアに似てはいるものの、その危険度、能力、全てがけた外れの妖怪であった。

(な、なんでこんなところにっ!?)

　嫌な予感がものの見事に的中したことに焦るリグルの背中を、冷や汗が滝のように流れ落ちてゆく。けして後ろめたいことなど何もないはずなのだが、ヤマメを背中にしているだけでリグルはなぜだか猛烈な後ろめたさを覚えてしまっていた。

　ちらり、と視線を脇に向ければ、そこには残機を減らした友人たちが、死屍累々と無残な姿で転がっている。

(――ひぃいいい……!?)

　喉奥に湧き上がる必死に悲鳴を飲み込みながら、リグルは恐る恐る幽香に声をかけた。

「ゆ、幽香さんっ?」

「ずいぶん楽しそうね?」

　動かないチルノを皆の上に放り捨てた幽香の視線は日傘の下に隠れてよく見えない。けれどその赤い唇が、にぃ、と三日月のように弧を描く。

　表情こそ笑ってはいるが、笑みの要素なんて一ミクロンも含まない笑顔に、リグルの背中に怖気が走る。

(お、怒ってるっ。ものすっっっっごい怒ってるよアレ!?)

「……ねえ?　そこの子、新しいお友達?　私にも紹介してくれるかしら?」

「リグル、こいつ誰?」

　しかし、こともあろうにそんな状態の幽香を前に、空気を読んでか読まずでか、ヤマメははっきりと不快感をあらわにしていた。

「や、ヤマメっ!?」

「大した用事じゃないならあとにしてよ。ひ

とがお話ししてる時に、礼儀がなってないんじゃないかねえ？」
「あら。変ね？　その子があなたと楽しくお喋りしてたようには見えなかったけれど？」
「っ……」
　幽香の言葉に歯を軋ませ、ヤマメは視線を険しくする。
『あんた』じゃない。黒谷ヤマメ。地底の妖怪よ」
「ああ、そうなの。あの鬱陶しい地底の、ね」
「……そうか、あんたが風見幽香ね？　聞いたことあるよ。有名ないじめっ子だってね。あのさ、今日はお呼びじゃないから、普段どおり花畑に篭もっててくれない？」
「ふうん……」
　ヤマメと幽香。リグルを挟んで相対する二人の間で、火花を散らすような鋭い視線がぶつかり合う。
（な、なにこれ、なにこの異空間っ！？　私置いてきぼりじゃないっ。虫だけに蚊帳の外ってこと？　……あ、今私上手いこと言ったかも。ってそうじゃなくて！？）
　リグルは先程までとはまた別の混乱の最中にあった。いや、あくまでも彼女が事態の中心であるのは確かなのだが。
　……というか。
（同じ１ＢＯＳＳなのになんでよりにもよって張り合おうとしてるのかなこの子はっ！？）
　異変の表舞台に立つことこそ少ないが、風見幽香の強さは誰もが認めるところだろう。『花を咲かせる程度の能力』という一見些細なものに聞こえるチカラで、疎密や境界というものを支配する大妖怪と十二分に渡り合うのだ。
　しかもその能力すら、彼女生来のものではなく、ただの戯れで操っている、余興のようなものに過ぎないという。
　そんな四季のフラワーマスターと真っ向睨み合っているヤマメに、リグルは気が気ではない。
「で、もっかい聞くけど何か用なの？　いま取り込み中なんだけど」
「ええ、あなたじゃなくてその子のほうにね。『いつもみたい』に『ふたりだけ』でお話をしようかと思ったのよ」
　殊更に。
　一部を強調した言葉に、感情を逆撫でされたヤマメの表情が強張る。
「ああ。別に私は『夜でも』構わないわよ。『この前みたい』にね」
　余裕をたっぷり覗かせる口調で、幽香は小さく、ぺろりと唇を舐め、
「ああ。それと――。『あの時』汚した服、ちゃんと取りに来てね？」
「…………！」
（うぇあああ！？）
　明らかに空気を変える一言に、リグルは震え上がる。
　いや、弁解させてもらえば確かに服が汚れたのはそのとおりなのだが、あれは断じてそのような一般的に言われるところのやましいことがあったわけではなく、頼まれて運んでいった蜜の瓶が割れてしまって、その、それがあれでああして結果的にいろいろともう言葉を尽くせないようなひどい事になってしまったからで――
　リグルが答えに窮しているうち、ずかずかと近寄ってきた幽香は、有無を言わせずにリグルの身体を引き寄せ、後ろから抱きかかえる。
　す、と傘の下に覆われて暗くなった小さな日陰から、赤い口元が細く開き、ぞろりと生え揃った牙が、ヤマメを威嚇した。
「解ったかしら。この子とは私が先約なのよ」
「ゆ、幽香さんっ！？　……むぐっ！？」
　無理やり抱き寄せられたリグルの膝からプレゼントの包み滑り落ち、叫ぼうとした唇には甘やかに香る幽香の白い指が突っ込まれる。
　花の蜜か、花粉か――頭をくらくらさせるほどの甘さに、リグルの意識がくらりと揺れた。
「ちょ、ちょっと、あんたねえっ」
「病気だらけの蜘蛛なんか食べても美味しくないし。見逃してあげるわ」
　そう言ってヤマメを無視し、幽香はリグルの胸元に指を伸ばして、ブラウスのボタンをぴん、ぴんと爪で弾いてゆく。
「ふあっ……！？」

肌をあらわにされる羞恥に、たまらず身をよじるリグルだが、幽香は抵抗を許さない。さらに、力強い指が容赦なくリグルの柔肌をまさぐってゆく。
「や……だめっ……」
服の内側にひやりと外気を感じ、リグルは顔を赤くさせ、もがくが——幽香の腕を跳ねのけることはかなわない。暴れる彼女を抑えつけた幽香の靴が、ぐしゃ、とプレゼントの包みを踏みつけた。
「ゆ、幽香さんっ、やめてっ……」
「あら？　恥ずかしいの？　なぁに、この前はあんなに可愛い声聞かせてくれたのに」
「ち、違！？」
まるで見せつけるように押し開かれたリグルのブラウスの隙間から、ほんのりと色づいた胸の先端の突起が覗く。そこで幽香はちらり、とヤマメのほうを見やった。
「ねえ、あなたも聞きたいかしら？」
嗜虐心を露わにした、風見幽香の笑み。
それに対しヤマメは、真剣な表情で——
「…………………………………。
………………。
…………。
……。
……そ、そんなことないわよっ！」
「いや即答しようよそこはさ」
たっぷり３０秒くらい迷ってからようやく返事するヤマメに、思わず自分の状況も忘れて突っ込むリグル。
「と、とにかく！　やめなさいっ、リグルが嫌がってるじゃないっ」
「違うわ。この子は、こういう風にされるのが好きなのよ。そうじゃなかったらこうされるのがわかってて、私のところに来るわけないじゃない。ねえ？」
朝顔の弦のようにしなやかな手指はリグルの頬に触れ、ついと伸びた薬指が濡れた唇をなぞる。
花の蜜を湿らせた指先は、柔らかな唇を滑って、強引に押し開け、そのままその奥の白い歯をこつりと叩いた。
「んぅっ……」
「ほら。ね？」
声も出せずもがくリグルの耳元で、艶っぽく囁く幽香。
「ど、どう見たっていじめてるじゃないっ」
「ふふ。そんなことないわ」
「ッ、やめろって、言ってんでしょぉぉ！」
とうとう辛抱の限界を迎え、ヤマメは本性を露にしてがぁっと牙を剥いた。鋭い蜘蛛の爪を覗かせ、複眼を開いてぎん、とまっすぐ幽香を睨む。
「やっぱあんたのこと、すっっごく気に入らないわっ！　すぐにリグルから離れて！　はやくっ！」
「嫌よ。この子は私のだもの」
意地悪な表情で素っ気なく答える幽香に、ヤマメはさらに怒りを募らせた。
「……っ、さっきから、聞いててすっごい腹が立つんだけど！　たとえリグルの気持ちが本当にそうなんだとしても、リグルの名前もちゃんと呼んであげないような奴に、そんなこと言う資格ないわっ！」
「……へえ」
激昂のままにヤマメが叫んだその一言は、何やら特別の地雷だったらしい。
特段何か表情を変えた様子もない幽香は、無造作に傘をくるん、と回し、その先端をヤマメに向けた。
同時、傘の端を起点にして閃光のように無数の楔弾が弾け飛ぶ。それは爆音とともに円形に幾重にも重なり、まるで色鮮やかに花開く花弁のように辺りを満たした。
「うひゃぁああ！？」
スペルカード戦の合意すら無視した突如の弾幕が、自分の身体を抱えてへたり込んだ半裸のリグルの周囲に降り注ぐ。風を切り地を穿つ弾幕は、その一発一発がリグルが渾身で撃ち込む弾の威力すら上回っていた。
が、
そんなリグルを、白い糸がふわりと絡め取る。折り重ねられた強靭な糸は、膜を編んで抉り跳ねる土埃を遮断し、リグルを優しく包み込んだ。
その一方で大きく跳ねて距離をとったヤマメは、宙空にぴたりと静止する。
「ようやく本性見せたわね性悪妖怪っ！」
よく見れば、あたりには既に無数の糸が張り巡らされ、森の中の狭い視界を切り取って

いた。糸の上を跳ねるように移動し、ヤマメは両手の爪を覗かせて、幽香の弾幕をかわし、反撃の楔弾幕を撃ち放つ。
「人の恋路を邪魔する奴は――」
　無造作に傘を広げ、それを撃ち落とす幽香にびしりと指を突きつけ、
「馬に蹴られて死んじまえ！」
　ざわり、と舞い揺れる糸を揺らして、ヤマメは叫んだ。

◆
◆
◆

「――いい覚悟ね」
　がちん、と引鉄を叩き落とす擬音と共に撒き散らされる牽制の楔弾、追撃の光弾、風を切る向日葵を模した特殊大型弾。四季のフラワーマスターの弾幕は、瞬時にヤマメの元へとに押し寄せる。
「――っ」
　辛うじてそれをかわし、ヤマメも負けじとスペルカードを構えるが――それよりも早く。幽香の手元で膨大に膨れ上がった魔力の奔流が、恐ろしいほどの滑らかさで解き放たれる。
　閃光の射手（マスタースパーク）。
　いまや白黒の魔法使いの代名詞となったそのスペルの、原型となる純粋魔力の閃光。
　視界を真二つに薙ぐ煌々とした輝きが、爆音を轟かせ土蜘蛛を光の奥に飲み込んだ。
「ヤマメっ！？」
　リグルの悲鳴が、焼け焦げた森の一角に響く。
「ほ、本当に問答無用だねっ！？」
　視界を埋めた閃光が過ぎ去る土埃の中、煤けた頬を拭い、ヤマメは焦げた地面の下から飛び出した。
　……グレイズ失敗、被弾１。直撃寸前で近くに掘り抜いていた地底との連絡孔に避難したのだが、幽香の一撃は地面ごとヤマメのいた場所をえぐり取っていた。
　残機を減らしたヤマメは、なおも繰り出される幽香の弾幕から安全地帯を求めて上空へと逃れる。
　この短時間の攻防の間に、空中での姿勢制御と移動に使っていた蜘蛛の巣の大半は幽香に焼き払われていた。
　羽根をもたないヤマメは、伸ばした糸を風に這わせて宙を浮遊。辛うじて空中での移動手段を確保する。
「まどろっこしいのは嫌いなのよね」
　今度はそれを追うように、大地がうねった。とん、と幽香が閉じた傘先で地面を突くと、土塊を跳ね散らかして異常成長した草木の根が、大蛇のようにヤマメへ襲い掛かる。
「うわ！？」
「これもあげるわ」
　脚を絡めとられてバランスを崩したヤマメめがけ、追い打ちとばかり、撫子にも似た十字の花弁を模した弾幕が放たれる。
「っ、罠符『キャプチャーウェブ』っ」
　緊急回避のスペルカード宣言で放った蜘蛛の糸を繰り、展開する弾幕の外へと逃れるヤマメだが、それでなお完全回避には至らない。
　スペルカード同士ですら正面から威力で押し負かす、それが風見幽香の底知れぬ実力のほんの一端だ。
　息もつかせぬ連続攻撃に重ねて、幽香はここで初めて手札を切る。
「……花符『幻想郷の開花』」
「しょっ、瘴符『フィルドミアズマ』っ！」
　ヤマメは焦りとともに残り少ないスペルカードを対抗宣言した。瞬間、どうっと溢れた紅い瘴気があたりを満たす。
　毒々しい紅の正体は、起死回生の一手を狙ってヤマメが展開した不定形の瘴気を伴う弾幕。
　だがしかし、幽香は高出力の火力弾幕で、押し寄せる瘴気すら無造作に灼き切ってゆく。
　風見幽香の真骨頂は、スペルカードに拠らない強力な高火力の通常弾幕だ。緻密に計算されたものとはまた違う、ただ相手の内懐に力強く一手を打ち込んでゆくだけの単純なもの。だが、その一撃一撃が必殺の威力を備えるため、回避は非常に困難だ。
　撃ち込まれるたび轟音と閃光を撒き散らす重火力は、着実に相手の機動力と残機を奪い

去ってゆく。
　晴れた霧の中、幽香は悠然と変わらぬ姿で立ち、爆風に吹き飛ばされ、ボロボロになって膝をつく倒れ伏すヤマメを見下ろしていた。
　四季のフラワーマスターは嗜虐心をたっぷりと乗せた笑みで、傘の先端をつい、とヤマメの頭に押し当てる。
「それでおしまい？」
「――………」
　俯いたヤマメは答えない。
　最後の一手も不発となり、もはやなすすべなく敗れ去るしかない土蜘蛛の無惨な姿は、運命や未来など読めずとも容易に想像できた。
「幽香さんっ、もうやめて！　やめてあげてってばっ」
　ヤマメの危機を感じ、裂かれた服を掻き寄せてリグルは幽香にしがみつく。が、四季のフラワーマスターはそれを意に介さず、ヤマメの襟に傘の先端を絡め、軽々と宙に吊り上げた。
「あら？　まだまだこれくらいで音を上げてもらっちゃ困るわ。ねえ？」
「う……」
　だらりと手足を垂らして苦しげに呻くヤマメを見下ろし、幽香はくすりとサディスティックに微笑む。
　容赦なし、手加減なし、温情なし。それが風見幽香の弾幕ごっこのルール。
（駄目、っ）
　無抵抗のヤマメに、さらに追撃の弾幕を浴びせようとする幽香のしぐさに、リグルはぎり、と歯を軋ませて叫ぶ。
「幽香さんっ！」
　悲鳴を呑みこんで、リグルが激昂のままスペルカードを宣言しようとした、その時。
「……っ、ごほっ、」
　ふいに、
　幽香は唐突にむせ出し、口を押さえた。
　咳に身体を震わせ、ふらりと傾いた体を支えようとした足がたたらを踏む。
「っ、あ、ぐ、っは、ごほっ……っ？！」
　咳を飲み混もうとしたところにもう一度咳がかさなり、幽香は大きく背中を丸めて傘を取り落とした。
「今だっ」
　幽香の手元が緩んだのを見逃さず、ヤマメはフラワーマスターの腕を払いのけた。先程までのぐったりした様子が嘘のように、土蜘蛛は素早く地面を跳ねて幽香から距離を取る。
「ヤマメ！？　ゆ、幽香さん？！」
　事態から置いてきぼりのリグルは、二人の間で戸惑うばかりだ。
　幽香はなおも続く咳と鼻奥を焼く掻痒感に喘ぎながら、血走った目に涙を滲ませる。
「っ、ごほ、ごふ、げほっ……！」
　霞む視線は、いくら擦ってもまったく収まらない。喉と鼻奥でちりちりと焼けるような鈍い痛みがフラワーマスターを襲っていた。
　咳き込み、えづいて、身体を折るようにして何度も肺の中の息を吐き出し、とうとう涙までこぼして、幽香はようやく目の前の相手の能力に思い至った。
　地上より排斥された、忌み嫌われた妖怪、土蜘蛛。
　彼女が持つのは、『病を操る程度の能力』。
「貴方、まさか――」
　ぎりっ、と奥歯を軋らせてヤマメを睨む幽香の手足に、繰り出された細い蜘蛛糸が絡み付いてゆく。幽香の力に比べれば脆弱な強度でしかないはずのヤマメの糸を、幽香の鈍った四肢は引き千切れない。
「…………っ」
「油断したわね。効きが悪かったから、ちょっと怖かったけど――」
　慎重に距離を測り、ヤマメは幽香を拘束する糸を絞り上げた。１ＢＯＳＳの面前で膝をつくという己の失態に四肢をわななかせて抗おうとする幽香だが、こみあげる苦痛と身体を蝕む熱がそれを許さない。
　幽香の強みは、強大な実力に裏打ちされた圧倒的な火力。視界を埋め尽くす絢爛劫花の弾幕で、相手の回避軌道を残らず焼き尽くす重火力の固定砲台だ。
　反面、弾幕の分厚さ、密集度合いゆえに相殺合戦で撃ち負けることは殆どないと自負しているため、幽香自身は積極的に回避や移動をすることは少ない。それは、フラワーマス

ターが自分から戦場を移すことがないということを意味し、必然、ヤマメが仕組んだ罠の中に留まり続ける結果となった。
それでも、幽香には少々の障害なら踏み潰して蹂躙する自信があったが――
「毒には慣れてたみたいだけど、病気のほうは苦手だったみたいね。
……『枯草熱（hay fever）』って言うの。とっておきよ？　貴方みたいな花の妖怪には最適な、緩慢に死に至る病。言っておくけど、完治の方法はないわ。不治の病だから、これ」
ヤマメは、弾幕ごっこが始まった瞬間から、幽香の周囲に濃い病毒のフィールドを張り巡らせていた。とどめの『フィルドミアズマ』はそのカモフラージュ。
土蜘蛛がありったけの力を注ぎ込んで作り出した瘴気領域の最深部に長時間留まり続けた結果、さしもの風見幽香もついに発症に至ったのだ。
「……っ」
油断無く糸を絞って、幽香の反撃――喚起しようとした植物の異常成長を押さえ込み、ヤマメはさらに続ける。
「あなたがリグルをどう想うかなんて、私が口に出すことじゃないけど。でも、私の思いを邪魔する権利なんて、あなたにはない」
まっすぐに。
最強の妖怪から、目をそらすことなく、ヤマメは言う。
「風見幽香、今すぐここから立ち去りなさい」

◆　◆　◆

花の香りだけを、後に残し。
その姿が小さくなって森の奥に消え、さらには気配さえも途絶えてなお数十秒。ようやく張り詰めていた気を緩め、ヤマメは大きく大きく息を吐いた。
「……し、死ぬかと思った……っ」
その場に、どさりと尻餅をつく。鼓動が跳ね、冷や汗が全身を浸し、冗談のように震え出す手足は、すっかり言うことをきかなくなっていた。
実際、去り際の幽香の殺気は凄まじく、真正面から見つめられるだけで肺が絞り上げられるようなプレッシャーだった。最後はもう震えそうになる脚を支え、絶対的な優位をとったのだと虚勢を張るのだけで精一杯。あのままさらに一手詰めることは絶対に不可能だった。
弾幕ごっこではない、妖怪としての能力で相手を追い詰めたのだ。あそこで幽香がはっきりと不利を悟ってくれるだけの冷静さを残していなければ、あのままヤマメは容易く引き裂かれていたに違いない。
「ヤマメ！？」
「だ、大丈夫。平気。ちょっと気が抜けただけ……」
駆け寄ってくるリグルに頷いてみせて、ヤマメはそっと目元をぬぐう。
枯草熱（こそうねつ）――などと大層な名前が付いてはいるが、アレは感染症でもなんでもない、花粉症の別名だ。
花の妖怪が花による病気なんかに罹るわけがないが、風見幽香の持つ能力、花を咲かせる程度の力が生来のものではないことを逆利用した結果、ヤマメの策はうまく効果を表した。
しかし彼女の本質はそこにはないのだから、幽香が花を咲かせる気まぐれを止めればすぐに回復するだろう。
そのうえで、恥をかかされたと逆上するか、たとえ一時の虚勢でもそれに騙された自分を恥じて口をつぐむかは、最強を自負する彼女の器にかかっている。
できれば後者がいいなぁ、とヤマメは胸中でこっそりとつぶやいた。傍らで涙を浮かべているリグルを見上げ、声をかける。
「大丈夫？」
「ヤマメ……どうして？　なんで、そこまでして……私のために？」
ああ。
さっきの答えはきっとこれだ、と思いながら、ヤマメは地面に落ちたプレゼントの汚れを払い、そっと抱え上げた。
無惨に踏みつけられた包装の下から、燐粉の輝きを彩った布地が覗いている。

中身は、何度も何度も失敗しながらエンゼルヘアーで縫った、黒蝶をモデルにしたナイトドレス。
　それを手に、ヤマメはリグルに微笑む。
「えっと、その、……リグルが――」
　いつの間にか、蜘蛛の巣に掛かっていた。
　治りそうもない病に、罹っていた。
　美しい羽根を夜空に拡げ、軽やかに飛ぶ少女の姿を思い描き、ヤマメはリグルの肩にドレスを掛ける。
「リグルのことが、好きだからじゃ、……理由にならない？」
「……！」
　まるで、花がほころびるように、たおやかに。
　答えてはにかむヤマメに、リグルは言葉を失っていた。
「恋の病は、治らないものだもの」
　いつしか――あたりには虫や小鳥の囀りが戻り。
　他に誰も居なくなった森の中で、どちらからともなく――ふたりはそっと寄り添い、指を深く絡めあっていた。

◆◆◆

　まだ冷え込む春先の夜、里のはずれにぽつんと灯る水銀灯が、ここ最近の八つ目鰻屋の目印だ。
　そのカウンターで、熱燗に自家製ロックアイスを浮かべた夜光杯の縁をくわえ、チルノがぼやく。
「あーあ……。最近リグルってば付き合い悪いよなー」
「しょうがないよチルノちゃん」
「わかってるけどさー」
　酒精でいくらか頬を紅くしつつ、杯を空けて口を尖らせるチルノ。もちろん、チルノだってリグルのことを責めているわけではない。
　ただまあ、なんというか毎日毎日あれだけ見せ付けられていれば愚痴のひとつも言いたくなるというもので、それはおおむね全員が同意見だった。最近の集まりがいつもの広場ではなく、もっぱらミスティアの屋台になってしまったのもそのあたりが理由である。
「ホント春よね。冬なのにねー。……はー、私にもなんかあーいう出会とかないかなぁ」
　こちらもすっかりお腹いっぱい、胃もたれの表情で、割烹着姿で調理台に突っ伏すミスティア。
　そこへルーミアがやや焦げ気味の脂の乗った焼き串をはむはむごくんと飲み込んで、
「……あれ？　いつものお客さんは違うの？」
「ぶっ！？　な、何言い出すのよいきなり！？　あ、あんなの違うに決まってるじゃないっ。あ、あれはその……」
「あーあー。ごちそうさまなのかー」
「違っ！？」
「違うのかー？　じゃあ、……みすちーは食べてもいいの？」
　宵闇の妖怪はにぱぁと笑顔のまま、ミスティアをじっと見つめてじゅる、と涎を啜る。
「いやぁーっ！？」
　もはや定番のやり取り。抵抗空しくカウンターの上から飛び掛かられ、がぶ、と頭にかじりつかれるミスティアの悲鳴が夜闇に響く。
「あーあ。春真っ盛りだなー」
「そうだね……」
　振り仰いだ遠くの夜空、瞬く淡い光の群れとともに、とっておきのナイトドレスに装って夜空の空中散歩をする恋人たちを見上げ。
　おてんば恋娘はしょうがないなあ、とつぶやきつつも、満面の笑顔で、大妖精と掲げた杯を打ち鳴らした。

（了）

【註】
　本作は十一月の大⑨州東方祭にて頒布した『地と星に逢う金蘭の契り』に収録した作品の加筆修正版となります。

〈作者コメント〉
　２号にわたりお付き合いありがとうございました。至らない部分は多々あるかと思いますが、楽しんでいただければ幸いです。

リグルー
来たよー
あけおめ～
・・・
開けろおめ～
ガラッ
・・・寒いし
私冬眠中なんだけど
お雑煮作ってきたから
一緒に食べよ～
今年も
よろしく。
言示弄
gen ji rou

どうかな？
私なりに結構うまく
できたと思うんだけど
うん
おいしいよ
おいしいけどさ

そもそも蛍は
越冬しないわけでさ
寒さに耐性ないのよ
私も寒いの駄目だから
寝正月
プチ冬眠するって
言ってあったよね？

そんなこと
言ってたっけ？
三歩で
忘れるって
やつね
そのマーク何ヶ
ぞうに
chicken head.

ぶっ
どうしたの!?

室温が・・・・下がる・・・・

まぁ要するに
チルノ来訪
リ
Hey!
何さその顔
元気なさすぎ
ミ
冬だからって
無駄に冷気
出しすぎだよ～
ひんや～

とりあえず
駆け付け一杯

おこた‥こたつ。炬燵。火燵。豆炭（他に木炭とか練炭とか路空とか）使用。

寝正月で過ごすつもりだったのに
しばれるのぉ〜
なんでカルタなんて…
「きょうも元気にもうだめだ」
はい！
はい
れ〜ろれ〜ろれ〜ろれ〜ろれ
しかもなんだこの鬱カルタ
いいじゃないせっかく起きたんだし
起こしたのはどこの誰さ
「そんな事も分からないの？バカなの？死ぬの!?」
はいっ
チルノおてつき9回目ね
・・・
そうそうせっかくだし
初日の出見に行こうよ
雲の上まで行くのは・・・
どんしーん
さすがに億劫だねぇ
そーなのかー
外に出たし
初詣に行こうよ
・・・
賽銭は？

屋台の売り上げが
いくらでも詣でっていって!!
ガラン
ガラン
祈願
商売繁盛
妖怪としてはあれかもだけどまぁ普通
祈願
蟲の地位向上
他人の金で尚且つ他力本願
な〜む〜
祈願
世界が闇に包まれますよう
後のラスボスである
わはー〜
・・・
これは今年も賑やかな年になりそうかな
そういえばまだ大切な事を言ってなかったな
橙
ミスティア
チルノ
ルーミア

今年も
よろしく
よろしくお願いします
シクヨロYo!

GOGO大ちゃん　その３　草葉

よし作戦通り行くぞ…
チルノ
君に大切な話があるんだ

僕はリグ次郎なんかじゃない
リグルなんだ
そ　そんなっ…
いいわ予定通りよ
リグルちゃん！

リグ次郎さんが
リグルだったなんて…

でも好き!!!
どうしてこうなった!!

ずっと一緒に　～－１～

著者：壁々

「霊夢、起きろ。」
「……うー……あー……寝ちゃったのか…。」
「風邪をひくぞ？」
「…ん、そうね…で、調べてくれた？頼んだこと。」
「ああ、おおよその量だがな。」
「私はまだねぇ…見つからないのよ。」
「…家探しでもしているのか？」
「証拠探しよ。」

「リグルーリグルぅー」
「…んん…ああ、もう朝か…」
「…昨日もずっと…？」
「うん。もう…もたないんだ。明日までが精一杯だと思う。だから…ね」
「無理しないでよ、妖怪だって体壊すんだよ？　私が変わるから、リグルは寝ててよ。」
「ありがと、ミスティア。」

眠たげな目をこすりながら、外に出ると、ちょうど太陽が顔をだしていた。里に、森に、等しく降り注ぐまぶしい光に霊夢もリグルも目を細める。霊夢は伸びをしてすぐに戻り、リグルは木々の下で空をみあげていた。
太陽が昇るにつれ、黒から青へ。空は晴れ渡り、空気は冷たく済んでいる。いつも通りの冬。
去年も一昨年も、ずっとずっと、自分が生まれてからずっとこの空は見てきたはず。同じような光景は何度も見ているはず。
それなのに。今年の冬はなぜ、こんなに寂しい空に見えるのだろう。なぜ、空を見るたびに心細くなるのだろう。
自分で幾度となく繰り返した問、リグルは何度も同じ答えを出していた。それでも、その答えを認めなかった。認めたくなかった。

「リグルー？　どうしたの？」
「…うんん、なんでもない、今寝るよ！」
「彼女がいなくなるから」という答えーそしてその先にある言葉をー今回も出して、その言葉を答えごと飲み込んで、リグルは家へと帰って行った。

太陽も高くあがり、冬といえど日があれば寒くもない。そんな感じの正午に、霊夢はあと一つ欲しいピースを手にいれるべく、神社へと戻ってきた。境内でどろどろに溶けて、無残な状態になっている雪はとりあえず無視を決め込んで、一直線にタンスへと向かう。ほどなくしてタンスから取り出したのは地の底に潜る時に使った陰陽玉。あの時援護をしてくれた、いて欲しいときにいないーそしていて欲しくない時にいるー妖怪たちとすぐに

連絡がつくようにする為に霊夢は通信手段として持たせておいたのだ。と、いっても、文には持たせる意味もないので持たせず、紫には持たせようとしたものの、面倒だから、という至極彼女らしい理由により拒絶された。
　持たせるために強引に弾幕勝負に持ち込んだら、全力で叩き潰されたのを思い出し、霊夢は苦笑いをしつつ、唯一快諾してくれた伊吹萃香へ発信を行った。

「萃香ー萃香ー」
「おー、霊夢かー。何ー?」
「ちょっと聞きたいことがあるからすぐ来てくれない?」
「んー…いいけど、それすぐ終わる?」
「ちょっとわからないわねぇ、質問に対するあんたの答え次第ね。」
「ん、まぁいいよ、すぐい」
「お、例の巫女と話してるのかい!?ちょっと変わっとくれよ、萃香!」
「うん?話したいことあるの、勇儀?」
「まぁね。おーい巫女さんー聞こえてるかいー!?」
「とりあえず声小さくして。耳痛くなりそう。」
「あっはっはーぁ、ごめんごめん。今日さー、下で地上とのつながりができたって事を祝う為の宴会やってんだけど、あんたもこないかい!?」
「…私が行った時もお祭り騒ぎだったみたいだけど。そこって結局いつもそういう感じなんじゃないの?」
「まぁね、暗い世界でも明るく生きてるんだ、みんな。明るい世界にいるやつもつきあってくれよ。」
「ふん、能天気というか、気楽というか…」
「私らは長らく閉ざされた世界で生きてきた。今を楽しむことができなきゃ、ここでは生きていけなかった。未来とは所詮、今という瞬間の連続でしかないんだ。今を楽しむ事が出来ないやつは、未来への希望もその程度なのさ。」
「あら、意外とポディシブに見えてネガティブな考えなのね。まぁいいわ、萃香?」
「もう後ろにいるよー」
「わぁっ!!!」
「あはは、意外と長話してんだねぇ、何話してたのかは知らないけどさ。」
「おいおい、巫女さん、人に声小さくしろって言っといて盛大な声出すじゃないか。」
「あ、ああ、ごめん。じゃ、萃香も来たしここで切るわよ。あと、今日はそっち行かないから。」
「なんだーつれないねぇ。」
「明後日かな、行くなら。じゃ。」

　通信を切り、ふぅ、と息を漏らして霊夢はお茶を淹れるべく台所に向かおうとしたら、すでに萃香が淹れていた。そして茶菓子まで出されていた。隠し場所を変えなきゃね、とため息を漏らし、おとなしく炬燵へと向かった。

「…ところでさ、受信用の陰陽玉、むこうに置きっぱなしにしてきたでしょ。」
「うん。どうせ今日の宴会行くしね。」
「ああ、だからすぐ終わるか聞いてきたのね。」
「そう。で、要件は?」
　霊夢はお茶を一口飲み、湯のみをおいて、息を一つ大きく吸った。その一連の流れは緩やかで、無駄がなく、隙がなかった。ただのお茶を飲むという行為で、これからの話がそこそこに重要な面を含むということを萃香に予想させるには十分過ぎるほどの迫力と集中力が放たれていた。こりゃ、腰据えておかないとな、と身構えつつ、萃香がお茶に口をつけたとき

　霊夢から放たれた質問で、萃香の手はピタリと止まった。

「リグル・ナイトバグのことなんだけど…彼女の周りに『悪い蟲』が付いてないかしら?」

「…その質問に答える前に、私から聞きたいことがあるな。『なぜ』それを聞く?」
　止まった手を下しつつ、霊夢を見据えて萃香は質問を返した。その口調はさっきまでとはまるで違う、重く、威圧の力を含む口調。

「私が解決を依頼された、先日から続く人里での盗難事件。狙われたものは全て多量、かつ良質の糖を含む物だった。これは慧音から聞いた情報で、だいたいの量もつかめてる。唯一、糖が含まれなかったのは、稗田の家にいついていた猫又だけ。そして、昨日、里の秘薬屋が山から重傷を負って帰ってきた。彼はどうやら一命をとりとめたようだけど、彼が苦心して集めたであろう、薬の材料は一部を残して持ち去られていた。彼の日記と薬の材料表、それに販売周期を考えて、彼が一昨日から昨日にかけて集めた材料はおおよそ把握。私の得た『事実』はこれだけ。」
「……」
「そこから察するに、まず、秘薬屋の材料を持ち去った者と盗難事件の犯人は最低でも同じ目的を持って動いている妖怪達と考えられる。もちろん、単体で動いているという可能性もある。
まず、人里からの信望厚い稗田の家から物盗り、しかも猫又を盗るという段階で人間ではないと出来る。薬屋のほうは、真冬の雪山にわざわざそんなものを盗るために出かけるなどというのは自殺行為に等しいし、何より、ただの人間が手に入れたところで役に立つものではない。よってこれも人間ではない。人間以外の中で、ここまで指向性を持った物盗りをするのなら、妖精や妖獣の類ではない。つまり、妖怪、と言える。」
「……人間でもいなくはなさそうだよね、どこぞのメイドとか、白黒とかさ。」
「それは私も少し考えたのだけど、妖怪だと確定させたのは、この犯人が作ろうとしてるもの。単純なエネルギー源、妖力の高い動物の肝、そして、条件を満たす数々の草―簡単ながらも強力な、妖力の強化薬が出来上がる。人間として該当する連中は、妖力に頼らない。だから必要がない。」
「……なるほどね、だが、なぜリグルに関してのみ聞く?」
「重要なのは、まず簡単な薬であるということ。実のところ、この強化薬、妖力の媒介となるものが用意できるのなら、それに自身の妖力を注ぐだけで出来るレベルのもの。妖力媒介が用意できない、もしくは妖力を分け与えれないのかーそれはわからないけど、いずれにせよ、この妖怪はわざわざ人間を介してしかこれを作れないレベルの存在。
次に、そして何よりも、この犯人は薬屋から材料しか盗って行かなかった。籠ごとのほうが簡単なのに。籠ごとのほうが証拠も残らないのに。何より、殺してしまえば、人目につかないようにしてしまえば、わからないことかもしれないのに。この妖怪は材料しか盗らなかった。
それは、無用の犠牲を避けようとする精神が犯人にあったということ。要らないものはとらないようにしようと思ったということ。そう考えるだけの知能があるということ。
私の知る中で、私の考えた全ての条件を満たす妖怪は一人だけ、それがリグルよ。
そして、リグルが自分で使うとも考えられなかった。冬でも蟲にしては元気に動き回るリグルにこんな薬は要らない。むしろ、考えられるのは、リグルの周りに新たに蟲の妖怪がついて、そいつの手伝いをしているということ。…こんな感じかしらね。」
「…なるほどね。いやはや…勘だけじゃないな、流石博麗と言ったところか…。」
「で、答えは?」
「……鬼は嘘をつかない。
が、約束も破らない。」
「……うん?」
「この件に関しては私からは『何も言えない』というのが私の答えだ。すでに私はリグルと、この件に関して『口外しない』という約束をしているんだ。だから、何も言えない。」
「…そう、けどもういいわ。あんたの今の答えで目星はつくし。」
　言いながら霊夢は炬燵を出た。２つの空の湯呑を持って台所へと向かう。萃香もそれを追うように、茶菓子が置かれていた皿を台所へ持って入りつつ、言葉をつなぐ。
「そうだね。今の答えで十分だろう。嘘はつかないから、『質問に答える』と言ったから答えた。『口外しない』と約束したから何も言えないと言った。
そして―霊夢がそれに到達したから、私はリグルとの約束を守るために―今から霊夢を口

封じする。」
「ああ、そうなるのね、やっぱり。別にいいわよ？　全力で抵抗するけどね。」
「私が勝ったら、この件からは手を引いてもらう。」
「私が勝ったら、この件で分かっていることを全て話してもらうわ。そして、解決まで私の邪魔をしないで。」
　湯呑も洗い終わった。部屋も片付けた。
「いつでもどうぞ？」
「なら5秒後に」
　2人で向き合う境内に残る雪は、この決闘が終わるころに残っているのだろうか。約束は守るという、妖怪は退治するという、互いのプライドをかけた弾幕決闘が始まった。

「…ねぇリグル、無理してない？」
「…全然」
　同じころ、目が覚めたリグルはミスティアが用意してくれたご飯に手をつけていた。
　差し向かいにいるミスティアの顔には明らかな心配の色があった。対するリグルは表情をいっこうに変えずに淡々と答えを返す。
「…ここ数日、この手の質問に対して、全然、としか言わないよね。」
「だって平気だし。この程度で体壊すほどやわじゃないんだよ。」
「体じゃないよ、心だよ。無理してない？」
「………」
「…ねぇ、あの子のためにそこまで…リグルが心を削ることもないよ。」
「ここまでやってそういうことは言わないよ。ていうか言えない。」
「…あの薬屋。命は助かったらしいけど…リグルはあの人を見過ごす時、すごいつらそうだった。つらい気持ちを必死で抑えてた。そういう顔だったよ…」
「だから何さ。」
「…リグルは命に対してそんな軽い気持ちでいられないヒトだったって言ってるのよ！」
　食卓を叩き、ミスティアは悲痛な叫びをあげる。なおも表情を変えもしないリグルにミスティアは叫び続ける。
「春にも夏にも秋にも冬にも。一年中蟲のことばっかり考えて、出会ったコには精一杯の想いを伝えて、1匹たりともないがしろに扱わないのに！　蟲も人も同じ命だっていつも言ってたのに！　あの子1匹のために、1人の命を蔑ろにしたじゃない！」
「…人間が妖怪に瀕死の状態で出会ったんだから、命があっただけでも拾いものでしょ？」
「…なんでよっ！　なんであの子のためにそこまでしてあげれるのよ！　自分の体も心も、信念すらねじ曲げて…自分に嘘ついて、ボロボロになっても…なんで…なんで！」
「…ごめん、ミスティア。私の責任なのに…心配掛けさせちゃった。」
　立ちあがり、涙を流して真っすぐに自分を見つめてくるミスティアの目。リグルはそれを直視しないまま立ちあがり、マントをはおって外へと飛び立った。
　ミスティアには悪いけど、今、私は何も言えない。もう一つ、やらなきゃいけないことがあるから。明日を迎えるために。

　リグルが向かった先は雪に囲まれた丘。季節の移ろいとともに自然は姿を変えていくが、この丘は一際大きくその姿を変える。冬は白一色、春は緑一色、そして、夏は黄一色。しかし、いつの季節になっても変わらぬ強烈な存在感を示す、白の傘に赤い服。朝の光を受けて、白く輝く太陽の畑に花のように佇むその妖怪のもとへ、リグルは降りて行った。
「おはようございます、幽香さん。」
「おはよう、リグル。…だいぶ頑張ってるのね、貴女。」
「…どうってことないですよ、ただの尻拭いです。」
　地面をみつめ、搾り出すように出た、どうってことない、というその言葉に力は感じられなかった。見た目も疲れはてていたが、それ以上に内側からの覇気がない。カラ元気すら出せていない。
（やれやれ、重症ね…）「ふふ、貴女みたいな律儀な妖怪も珍しいのよね。たいていの妖怪は同族であっても、産まれるきっかけを与えた後はほったらかしちゃうものなんだけど…。他の妖怪に理解されないでしょうね、貴

女の行動。どうしてかしらね、そういうことしちゃうのは。」
「…見捨てるなんて…そんなことは出来ませんよ、私は…」
「私は、弱いから、かしらね。」
「！」
「彼女と別れたくない
けど別れが確実に来るのなら
わずかな時でも一緒にいたい
見捨てる勇気を持てないほどに私は弱いから—
何も考えずにひとつの命を巻き込んだ、
何も知らずにひとつの命を危機にさらした、
何も出来なかったからひとつの命を見捨てようとした
すべて私が弱かったから、力がなかったから—
とでも言いたいのかしら。」
幽香は頭を垂れるリグルに対して言葉を浴びせる。
それは、言われたくないことだろうけど。
それは、認めたくないことだろうけど。
それは、考えたくもなかったのだろうけど—。
「…わ、私は…っ」
「何よ、言いたいことがあるのかしら、言い返せる事があるのかしら？」
「私はっ…わた、し、は…っ」
「あの春の日、今でも覚えてるわ。浮かれた顔して、満面の笑みで、それでいて申し訳なさそうな空気を全面に出して、この子を育てるための蜜をください、と、貴女はここにやってきた。それからの貴女はいつきても幸せそうだった。いつも希望を抱えていた。そして—
何も考えていなかった。」
「うあ…わ…ああ…」
耳を塞ぎ、うめき声を上げて、泣きじゃくりながらうずくまるリグルに幽香は容赦ない言葉を浴びせ続ける。
大かたリグルの周りにいる妖怪連中は勘違いしているのか、気遣いで言葉に出来なかったのだろう。今のリグルに必要な物は慰めの言葉でも、諦めを導く言葉でもない。「彼女」がいなくなるという事象の挽回を、リグルはとっくに諦めているし、今の自分の状況も受け入れている。彼女が受け入れていないものは自分の過去だ。過去、自分が何を彼女のためにしてきたのか、彼女の様な存在に出会った時のために何をしていたのか—彼女はそれを後悔している。だから、自分ひとりでは出来ないことがある。
過去の自分に対する自覚を
過去の自分を認める覚悟を
リグルはそれを求めてきた。自分ひとりでどうしても出せなかった言葉を、幾度も自問し、答えられなかった答えの解答権を私に託した。そんなこと—私は認めない。
これは彼女の問題だ。これは彼女の業だ。これを乗り越えずして何が蟲の女王だ。私の知るリグル・ナイトバグがこんな弱弱しい存在だなんて私は認めない！
「貴女は何をしていたの？　貴女は何をしてあげれたと思うの？　貴女は、２年前の春に貴女が妖怪への道へ連れ込み、そして明日別れを告げようとする、あの蝶へ、何をしてあげれるの？　そんなことも考えずに、今まで一緒にいたというわけではないだろう、蟲の女王よ！さあ、ここでその答えを！」

（続く）

〈作者コメント〉
「このネタをひっぱるかどうかは考え中…」（月刊ナイトバグ１０月号【静かな祭り囃】の作者コメントより）
引っ張りました。
今は意味わからないところが多々あると思いますが、すべて読み終わったときにきっと全部わかるはず…です。だから見捨てないで生温かい目で読んでください。
って先月も似たようなこと言ったなぁ…。

ファイヤフライの大鍋

著者：くろと

「そうだった。つい話がそれてしまったな。それで何処まで話した、確かリグルが寺子屋で私の授業を受けていたことは伝えたな。そうか、ならその先から話そう。確か、あの日は酷い大雪で、そう、ちょうど今日の様な天候だったよ。というのも外に出かけたときに私の生徒が雪中に埋まるという変な遊びをしていて、風邪を引いてはいけないから。と私が叱り付けてね。違う。そうではないな。お前が聞きたいのは、私の世間話じゃない。さて、リグルはあの日、妹紅と一緒に私の家でくつろいでいたよ。外の世界から流れてきたカードゲームで無邪気に遊んでいたんだ。デュエル何とかだったか？　いや、いい。それはどうでもいいか。私も先日、抜き打ちで行ったテストの答案用紙を採点していたところ、それが届いた。地下からの速達で、正しくいえば、招待状だったんだ。内容はこうだ。
『親愛なる受取人様。本日、地霊殿にて古明地さとりの誕生日会を催します。同封した招待状を持参の上、早急にいらしてください。差出人、お燐』
　正直なところ私はあまり興味が湧かなかったが、後ろの二人は興味があったらしくてね。行こうと言い出したんだ。そうして私も参加したんだ。で、行くと決めたなら私としてはプレゼントの一つでも持っていくべきだ。と提案してね。それには二人とも同意したんだが、何をプレゼントにするかで揉めたんだ。私は大陸の歴史書、妹紅は竹を焼いた炭、リグルは蝉の抜け殻だった。とりあえずリグルの提案は却下したよ。なぜかって、蝉の抜け殻を喜ぶような子供じゃないだろうからね。それから紆余曲折を経て、プレゼントは蛇の抜け殻にした。ほら、財布に忍ばせると金運が上がるというだろう？　手に入れるのは造作もなかった。魔法の森近くにある、あの愛想が悪い店主の店に売っているものを買ったんだ。そうしてプレゼントが決まった以上、私たち三人は地底に潜り地霊殿へと向かったよ。
　途中、釣瓶落としなり土蜘蛛なり橋姫なりに通せんぼをされたが、全て頭突きで押し通った。ただ、あの時、妹紅とリグルに醒めた目をされたのは何故だろう……？　兎に角、私たちは地獄の旧都に出たわけだが、旧都では何故かリグルが其処彼処で目立ってね。蛍が貴重らしいのか、あるいは地獄に縁でもあるのか、理由はともかくリグルが鬼に攫われたんだ。妖怪を攫うとはふてぶてしい鬼だと思わないか？　まあ、私と妹紅で奪い返したんだが、流石に骨が折れたよ。その鬼は強く、自らを山の四天王とか名乗っていたな。リグルは私と比較し体育会系女教師と評したが、何故、私と比較してそんな答えが出るのか不思議だったな。とまあ、そんなことをしているうちに時間も適度に消費してしまい、気付いたら誕生日会開催の一〇分前だった。これは遅れる。と逸った私は、二人を引っ張って強行したんだ。

地霊殿に辿り着いたのは三分前で、ギリギリだった。私たちは門扉の所に居た、ゾンビフェアリーに招待状を見せると、そいつは私たちに、ようこそ。と一言告げてから門扉を開けてくれたよ。中に入った私たちの前にゾンビフェアリー、といっても門の所にいたのとは別のだが、また現れたんだ。水先案内人らしく、私たちを会場まで案内してくれた。会場にはすでに多数の客人たちが集まってお り、知り合いも多数見受けた。それと私たちが最後だったらしく、私たちが入ると、私たちを案内したゾンビフェアリーが扉を閉めて、錠前を掛けたんだ。そうして会場と外界の行き来を切断されてしまった。

程なくして壇上に三人の少女が登ってな。そう、主役の古明地さとりとそのペット二匹だ。ペットのほうは右隣が地獄鴉のおくう、左隣が火車のお燐だった。一応、周りが拍手し始めたので、私たちもしておいた。拍手が終わると、お燐がマイクを取り出し、さとりに手渡したんだ。さとりは、あ、あ、と二度、呟くと、会場に設置されてあった拡声器から同じ声が大きく木霊した。そうして音声の調子を確かめたさとりは開口一番にこう言った。

『このたびは皆様、私の誕生日会に参上していただき、とっても迷惑しております』

……会場の温度が一度といわず、五度ぐらい下がったな。しかし、さとりは素知らぬ顔で続けたよ。

『そもそもこれは、私のペットが打ち出した企画でして、私は真っ白なほどに無関係です』

……主人なのだから責任の一つもとって欲しいものだ。さとりのぶっきらぼうな言い回しには、さすがに会場から不満と文句が飛び出しそうになったが、それ以上に気になることが出来ていたんだよ。さとりの両隣に居る、ペット二匹が準備運動なのか屈伸をしていたんだ。そしてさとりがその答えを言ったよ。

『では長い話もそこそことして、皆様には私の可愛いペットが企画した、狩り、に獲物として参加していただきます』

……このとき、言い終わる間もなく、おくうが飛び出したんだ。会場客はさとりの発言を理解するのに必死で、それを見逃してな。最後にさとりは、

『早くもお一人がリタイアですか。……おくう、間違っても食べちゃダメよ？』

と言ってからマイクを捨てて、壇上から降りたんだ。マイクが床に落ちると、あの、耳をつんざくような不愉快な雑音が残響したんだ。次いで、場内から悲鳴が一つだけ上がったな。見れば、会場に居た客の一人がおくうに捕まっていた。つまりは狩りとやらが始まったんだ。間もなく、取り乱した連中が会場の出口、扉を開けようと押し迫ったんだ。扉は硬く閉ざされていたが、数十人単位で負荷が掛かると脆いもので、簡単に扉は壊れたよ。そうした連中が雪崩となって騒いでいるうちに私は妹紅やリグルを見失ってしまい、妹紅は問題ないとしてリグルは危険と感じた私は早速、地霊殿を探し始めた。

地霊殿にはお燐やおくうのほかにもペットが色々と住んでおり、見つかるたび、私や他の客を狩ろうとしていた。もっとも私はこれを容易く、そうだ、容易く退けたんだ。リグルを捜す目的があったからな。いくつかの扉と回廊を進んだ先で厨房を見つけてな、そこで驚くべき状況が私を出迎えてくれた。リグルが風呂に入浴していたんだ。ぐつぐつと煮えたぎる大鍋という風呂にな。さすがの私も慌てて救助した、リグルはぐったりとしていたが、呼吸もあり意識も微かにあって、これ以上なんの問題もなかった。だから私は気付け薬の代わりに頭突きをしたんだ。リグルは唸りながらも覚醒したよ。

……そういえば恨めしそうに呪詛を吐いていたな。まあ、そんな感じで私たち二人は厨房から出ようとしたんだが、そこに、あの地獄鴉が現れたんだ。おくうは私に対し、『食材を返せ、この牛女！』と叫んできたよ。二、三発、頭突きして黙らせた。その後、説教を小一時間をしていたが、ふと、廊下側が騒がしくなってきてな。私たちは外に出たよ。すると廊下の突き当りで妹紅とお燐が威嚇し合い、口論をしていた。話の内容はよく聞き取れなかったが、可愛いとか可愛くないとかで言い争っていた気がする。そいつらは口喧嘩

もそこそこに、ついに手を出し合った。教育者としては喧嘩を見過ごすわけには行かず、私は彼女等の間に割って入った。……タイミングが悪かったのか、妹紅が繰り出した火炎とお燐の研磨したような長い爪が私にぶつかってね。つい、ついなんだ。我を忘れて暴れてしまった。

気付いたら壁面や天井は頭突きの跡ばかりで、リグルや妹紅は居らず、さとりが傍に立っていたよ。さとりはこめかみに青筋が浮かんでおり、明らかに苛立っていた。私に何かを言おうとしたが、呑み込むように抑えて、結局、何も言わなかったよ。私は申し訳ない気持ちのままで居ると、さとりが、つと人差し指で向こうを差したんだ。さとりはその方向に歩き始めて、私も大人しく従い、彼女に着いていったよ。

指差した先には食堂があって、室に入ると料理が並べられたテーブルと椅子に座る知り合いたちが目に入った。さとりはその一席に座り、私も別の椅子に座った。……ああ、知り合いというのは魔法使いや巫女、それに地底で知り合った土蜘蛛や橋姫、それと釣瓶落としの事だ。まあ、そいつらは酔った鬼に絡まれていたがな。

会食が始まると、すぐにおくうが見覚えのある大鍋を台車に載せて現れたんだ。大鍋の中身はスープで、お空は全員の所に配膳して回ったよ。スープは変な色をして見た目は悪かったが、魔法使いが最初に一口啜り、見た目に反して美味しいのだと分かり、他の奴等も食べ始めたよ。私は思うところがあって食べなかった。そして私を見ていたさとりも食べようとはしなかった。が、おくうが、主人思いなのか、さとりの横に座り、スプーンで汲み取って、それはもう、満面の笑顔でさとりに進めたんだ。これを断りきれなかったさとりはスープを啜ったよ。

会食も終わり頃になってから、最後に現れたのはお燐だった。彼女は手押し車に白い布を被せており、布の中身が人身だというのはすぐにわかったな。そして、お燐が布を払うと、中からリグルと妹紅が出てきたんだ。あまりに可笑しくて噴出したよ。何しろリグルは真っ赤なドレスに金のティアラを被り、妹紅はタキシードときたもんだ。それから二人は赤面しながら歌劇の様なものを始めたよ、私は笑いを堪えるのに必死になったさ。だってもう、あの二人が互いに愛を囁きあうんだ。

そうそう、後で知ったんだが、二人がそんなことをしたのは私が暴れた責任を取らされたからだそうだ。そこは申し訳なかったな。

歌劇が終わると、さとりにプレゼントを渡す時間がやってきてな。私たちの番が回り、リグルが用意していた蛇の抜け殻をいい笑顔で渡したんだ。さとりも笑顔で受け取ってくれたよ。そういえば受け取る間際にリグルに囁いていたな、リグルが話さないから内容は分からないが。

やっと、さとりの誕生日会が終わり、私たちは帰路に着いたんだ。二人は疲れきっていたが、帰りの際に温泉に入ってな。リグルも妹紅も、それが一番楽しかったと言っていたよ。

余談だが、あの日、スープを飲んだ者達は次々に倒れたらしい。

ところでお前はこんな話を記事にするのか？」

（終）

〈作者コメント〉

パロディに挑戦しようと試行した末、これが書けました。なのにパロディではないというこの不思議。

蟲の居所

著者：夏樹 真

冬にしては暖かく、ぽかぽかとした日差しが気持ちの良いある日の午後。

　魔理沙は暖かく気持ちのいい草むらの上に横になり、睡魔と闘っている状況にあった。

「……らさ、……だよ」

　流石に冬とはいえ、これだけ日差しが強くて風も吹いていなければ結構な暖かさだ。昨日は魔法の実験を遅くまでしていたために、こんな暖かさの中ではうとうとしてしまうのも仕方がないというものである。

　何やら近くで誰かの話し声がするのだが、それすらも分からないくらいに魔理沙はいつの間にかまどろみの中へと入ってしまっていた。

「……っと、ねぇ聞いて……理沙！」

　誰かの声が大きくなっていく。

　うるさいなぁ、と思いながらも魔理沙の意識はまどろみの中から起きることはなかった。

　ふっと気になる疑問。この聞こえてくる声は誰のものだったか。それがどうしても思い出せない。半分落ちかけの意識で思い出そうと魔理沙は試みた。

　あれは確か、そう緑色の髪で。私と同じような白黒の服を着た、活発な印象の少女。名前はそう……なんだったっけ。

「……ぇい、こうな……せーのっ」

　徐々に大きくなる声に、魔理沙の意識もちょっとずつだが覚めていく。

　眠りを邪魔されるような不快な感覚と、名前を思い出しそうなもどかしい感覚。そんな感じにうなされつつも、魔理沙は寝ぼけた頭で名前を思い出そうとする。

　あぁ、そうだ、こいつの名前は確か――――

「リグ、ル……？」

「起きろ魔理沙ぁぁぁ！」

　その瞬間、寝ぼけていた魔理沙のおでこを目掛けて平手の一撃が振り下ろされた。

　何の抵抗も出来ない魔理沙はそれをもろに額で受け止めることとなった。ペチンという音と共に、魔理沙の額に痛みが広がった。

「ぬぎゃぁぁぁ！？」

「まったくもー、人が話してるんだからちゃんと聞きなさいよ！」

「うぅ、いきなり暴力的な奴だぜ……」

　額をさすりながら、魔理沙は横になっていた体を起こす。そんな魔理沙の横には、むすーっとした表情のリグル・ナイトバグが座っていた。腕を組んで、完全にお怒りモードといった雰囲気をかもし出している。

　とりあえず目が覚めた魔理沙だったが、なんでリグルが横で怒っているのかをまだ理解できていない。

　なんとなしに思い出そうとするものの、すんなりと思い出すことができなかった。これは聞いた方が早いかなと思い、魔理沙は訊ねてみることにする。

「なぁ、ところでなんで怒ってるんだよ？」

「もしかして全然聞いてなかったの……？」

「疑問に疑問で返すなって。まぁ何のことか分からないから聞いてなかったと思うんだが」

「はぁー……まったくもう」

　呆れたようにリグルは頭を左右に振った。そしてちょっとだけキツイ目つきで、説明を始めた。

「私が魔理沙にチルノのことで話を聞いてもらってたんだよ！」

「んー……そうだったっけ」
「本当に寝ぼけてて聞いてないんだね……ばかぁ」
上目気味にむすーっと魔理沙に抗議の視線を送るリグル。しかしまだ眠気がどこかに残っている魔理沙はそれをさらりと交わしてリグルの頭をわしわしと撫でながら、ここまでの経緯を思い出すことにした。リグルがなんだか抗議をしているのだがそれは気にしない事にする。
確か陽気に誘われて、草地に腰を下ろして横になって。のんびりしていたらリグルがやってきて。話を聞いてよとか言われたのをはいはい、と適当にいなして話半分に聞いていて。そして、うとうとしてしまって今に至る、はずである。
大きく欠伸をひとつすると、魔理沙は目に浮かんだ涙を拭い去る。まだ眠気は抜け切れていないのだが、とりあえずはリグルの話を聞いてやらないといけないだろう。
「んで、とりあえずチルノがどうしたって?」
「聞いてよー、いつもの事なんだけどチルノが我侭でさ。みんな困ってるんだよね!」
そこからリグルの話を長々と聞かされた魔理沙だったのだが、それを要約するとこんな感じであった。
チルノがいつものようにみんなに迷惑をかけていて、それで困る時があると。元々チルノがトラブルメイカーである為に怒りたくなる時もあると。みんなの制止を聞かずに危険なことをしたがるのでも嫌だと。
ふむ、と魔理沙はとある疑問に辿り着く。
「ていうかさ、それだけ困ったりしてるのに何だかんだでいつも一緒にいるよな?」
「ふぇっ!? いや、まぁ確かにチルノは迷惑かけるし困った奴だけどさ……いやでも、その嫌うとかそういうほどじゃなくてさ、なんか気になるっていうか心配になるっていうかさ……」
ごにょごにょ、とリグルの語尾が小さくなっていく。俯くリグルの頬が、微妙に桃色に染まっていた。
それに気づいて魔理沙はあぁなるほど、と心の中で納得した。なんでリグルがこうやってチルノの愚痴を話したがっていたのかを。なんでそれを聞き流していた魔理沙に怒っていたのかを。
はぁ、と一つため息。それに気づいた瞬間、魔理沙の興味は一気に失せてしまっていた。再びリグルの頭に手を置き、わしゃわしゃとわざと荒々しく撫で回す。そこに八つ当たりの意味も込めて。
「ちょ、ちょっと魔理沙ってばやめてよ!」
「うるさい、寝起きからつまらないこと聞かせやがってー!」
「つまらないとか酷いんじゃない!?」
必死に魔理沙の手を振り解こうとするリグルなのだが、魔理沙の方が背が若干高い為に中々その手を払いのけることができないようだった。うぅっと唸りながらリグルが抵抗してくるが、それを上手く避けながらわしゃわしゃと撫で続ける。
「つまりはあれだろ、蟲の居所が悪かったわけだ」
「蟲の居所って、いや確かにそうかもしれないけどさ……」
「そういうことなんだよ、お前のそれは。恋の感情という蟲の居所が悪いだけさ」
「へっ!?」
突然の魔理沙の言葉に、リグルの顔が一気に真っ赤になる。そんな表情のリグルが可笑しくて、表情には出さないようにしながら頭を撫でていた手を離し、その額を指でパチンと弾く。あいたっとリグルの顔がちょっとした痛みに歪む。
それを見て、魔理沙は満足そうにうんうん、と二度頷いた。
「ま、そういうわけだ。私は博霊神社に二度寝しに行ってくるとするかな」
「ええ、ちょっと私の話はー!?」
「惚気を聞く趣味はないぜ。じゃあなー!」
横に寝かせてあった箒を手に取ると、魔理沙はそのまま跨って一気に上空へと飛び出す。
地上の方ではリグルが何か言っているようだったが、そんなものは気にせず上空へ。
「他人の惚気を聞かされるほどつまらないものもないからな。やれやれだぜ」
誰に言うでもなく呟くと、魔理沙はそのまま博霊神社の方向へと飛び去ってしまった

（終）

〈作者コメント〉
　夏樹ですー。今回もいつものようにギリギリっていうかなんていいますか。ゴメンナサイ小崎様！　内容的には魔理沙とリグルの日常の１コマみたいな感じを目指してみましたー。きっとこんな会話もしているに違いない……してたらいいなぁー。

IDEA
GAGRim
BONK!!
ボンク!
2月号テーマ
パロディ特集
『Scoutbug』　IDEA(GAGRim)
Bonk!
TEAM FORTRESS 2

『 リグプラス 』　緑

こんなゲーム欲しいですね。誰か作ってくれませんかね。

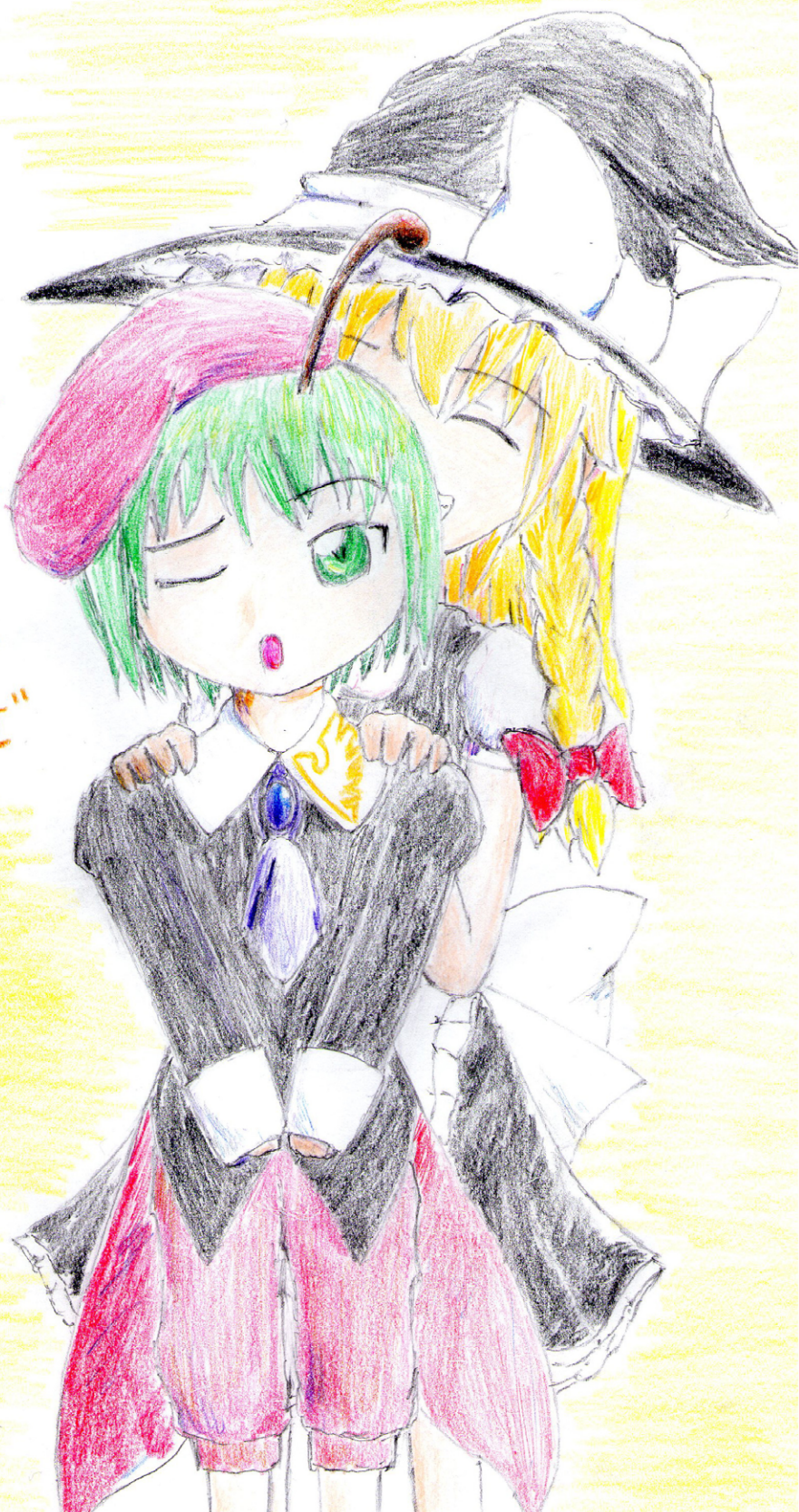
『 このページは横から見てね☆ 』　貴キ

VOCALOIDのミク＆ルカの「magnet」のパロをやるよーと言ったら
希望者が沢山集まって収拾がつかなくなりました。

『 東方魔法休暇 』 Salka

作品が分かる方がいらっしゃるか分かりませんが…総勢19（20?）キャラという狭苦しい作品になってしまいました（笑

『 Wriggle Fantasy VI 』　蛍光流動

FF6終盤あたり、仲間を求めて。

『「魔理沙、セリフちが」「あってるぜ☆」「ひぇぇ」』　ハシゴ

はじめまして。一般の方は例の電波ソングから東方とうみねこをつなげるでしょうが、私の場合はシム東方⇒うみねこNPC召喚肖像画オブジェクト⇒うみねこにハマる⇒ニコニコうみねこMAD⇒かのんくんの服リグルっぽいというコメント発見、という常識にとらわれない流れでつながりました。なんというポロロッカ。リグル愛があるからできたのでしょうか？

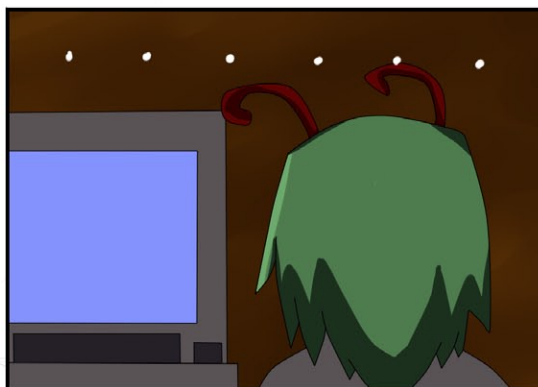
『 東方ポケ〇ンカードイラスト 』　むつのかみ　よしゆき

またまたお久しぶりです。思ったよりも忙しさが激しいので中々投稿できず…ぐぬぬ。
さて、今回は自分が作ってる東方ポ〇モンカードを題材に使って1枚やってみました。やっぱり好きなキャラは強く作っちゃう親心w。EXリグルとかやりそうで怖いですwww。

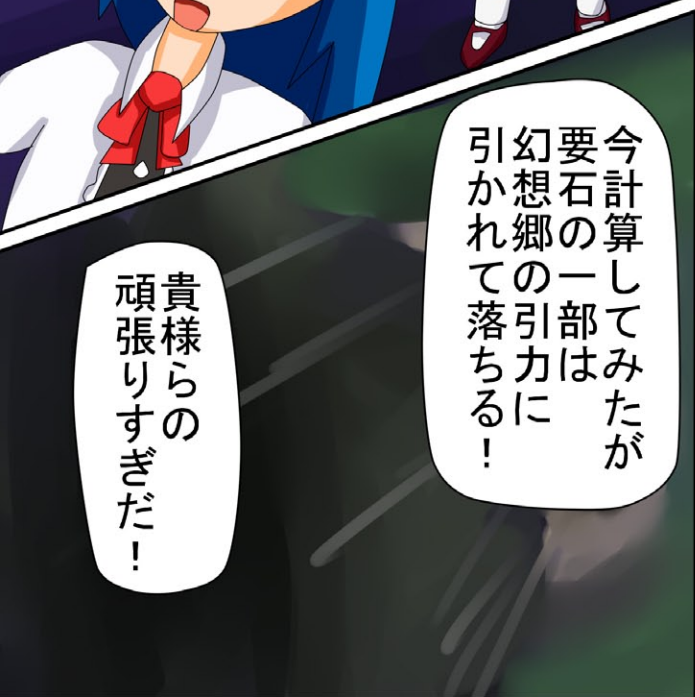
河童から妖しい物を
貰いました
アニメを作ったらしい

なんか私がもし
非想天則に出てたら
とか言ってたけど
なんの話やら

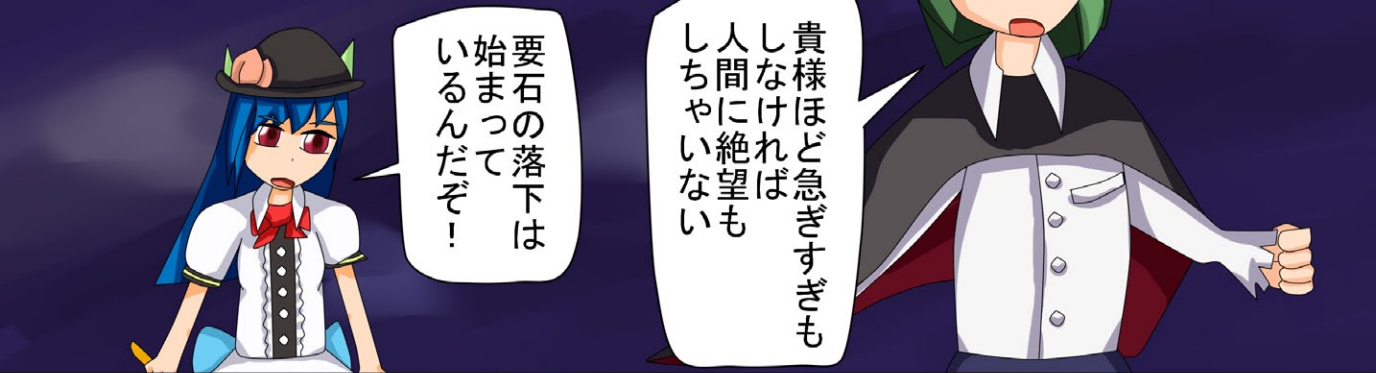
奇動戦士リグル
WRIGGLE
逆襲の天子
ダイジェスト版

描いたひと：
怒羅悪

なんでこんな物を人里に落とす？
これでは地上が寒くなって人が住めなくなる核の冬が来るぞ！
地上に住む者は自分達の事しか考えていない！
だから異変を起こすと宣言した！
天人が地上人に罰を与えるなどと！
私比那名居 天子が粛清しようというのだリグル！
え 何コレどっからツッコめばいいの？！

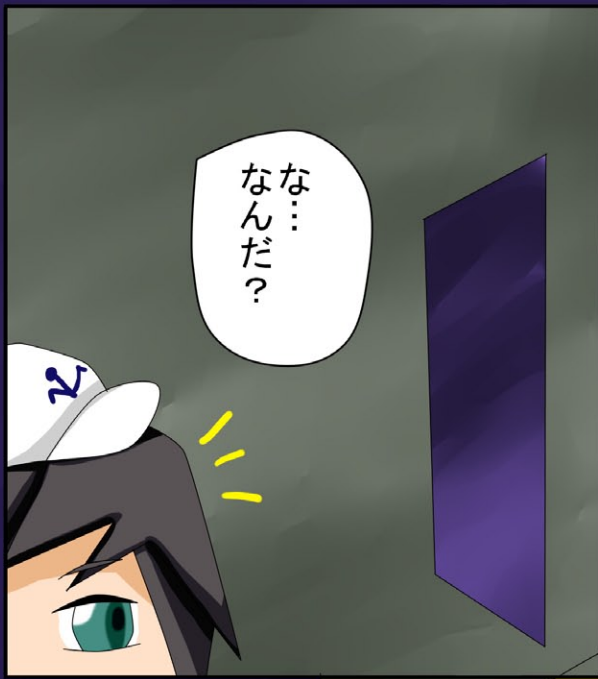
いや
もう止めないぞ
進まないし
しばらく何も言わないぞ
シーンとばすけど

ふふふ…
はははっ
何を笑ってるんだ？

私の勝ちだな
今計算してみたが
要石の一部は
幻想郷の引力に
引かれて落ちる！
貴様らの
頑張りすぎだ！

ふざけるな！たかが
石っころひとつ私が
押し出してやる！
馬鹿な
事は
やめろ！

やってみなければ
わからん！
正気か？！

リグル・ナイトバグは

伊達じゃない！

星蓮船内部
星蓮船で要石を押すんだよ！
無茶言わないで！
な…なんだ？
なぜだ？しかもみんな要石に向かっている…

なんだ？
どういうんだ？
やめてくれ！
こんな事に
付き合う必要はない！
下がれ！
来るんじゃない！
なんだ？
何が起こって
いるんだ？
ええい…
完全な作戦には
ならんとは…
蟲の妖怪だけに
いい思いは
させませんよ！
しかし
それじゃあ…！

紅魔館まで
無理だよ！
みんな下がれ！
人里が駄目になるか
ならないかなんです
やってみる価値は
ありますってよ？

しかし
残機が減り始めている
者だっている！
あれっ？
リリカはっ？

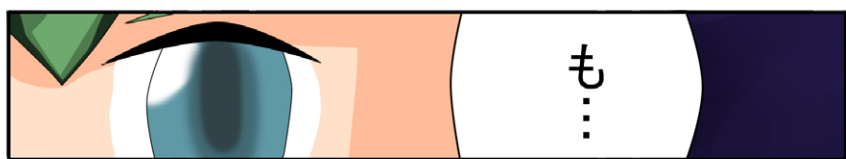
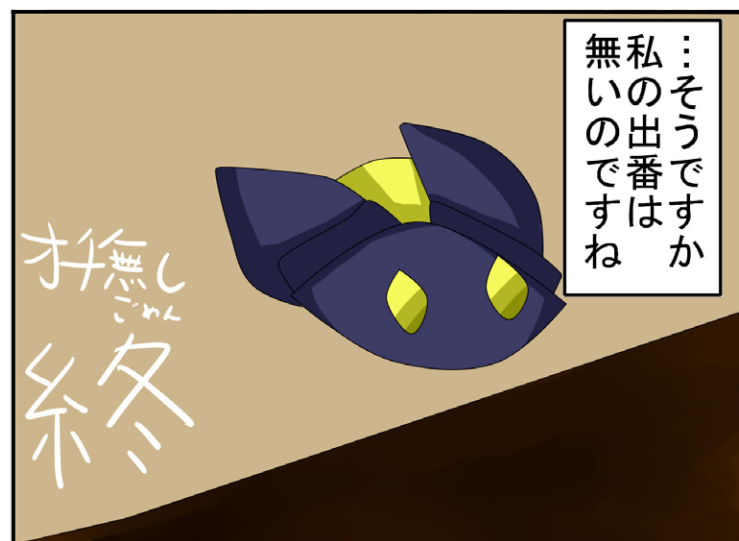
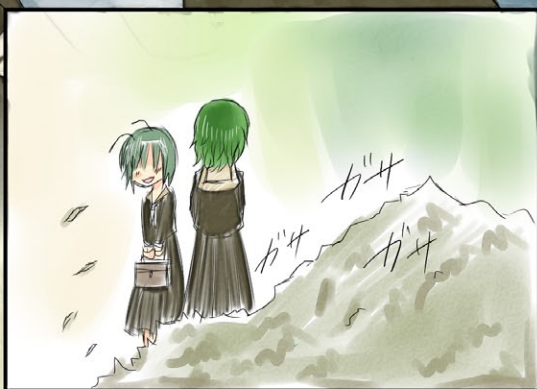
駄目だ
グレイズの狙いすぎと
食らいボムのミスで
自爆するだけだぞ！

もういいんだ！
みんなやめろーー！

も…

とりあえず私は何？
何があって
あんなポジションなの？
そういうのは
「もしも」だから
まだいいとして…

実際あんな事になったら
スキマ妖怪とかで何とか
なるんじゃないの？
というか星蓮船って
この時あったっけ？
そもそも河童は
私にこれを見せて
何を求めているの？

カシャ

※この頁はマリ○てのパロディです

この作品には虫描写や写真が含まれています。

蟲の手帖

描いたん HOUSE
2月号
2010 FEBRUARY

■前回のあらすじ
今年は(も…?)
きっと当たり年!!

というわけで

シリアゲムシしかり
ガガンボモドキしかり
贈り物ってのは オスから
メスにするものです

ヤマトシリアゲ
体長 約13～20mm
(4～9月)

げげっ
ヤ…ヤマメ!?
「げげっ」とは何よ
失礼な奴め

お取り込み中悪いけど
コイツは借りてくよ
ちょっと
私は
嫌だって

うるさい
とっとと歩け
ノロマめ
……
みすちー?
うゅ
なにその
ひどい言い種

で?

お燐から聞いたよ
あんた年末年始は
宴会でずいぶん
食べたみたいじゃん
もち。
黙々と
食べる姿に
虫の生き様を
見た
あのバカ…
ぎく
う。

今日は何の用なの
ぶっすー
うゎ
かわいくない
ヤツね
誰のせいだ

なんか
雲行きが
怪しく…
ドキ
ドキ
ドキ

今日は…
妖怪ドックだ!!
あああ
やっぱりーッ

きしゃあッ!?

ちょッ…やめッ
わー 相当キてるわね
幻想入りした9キロの行方はここなのか？
またそういうメタな発言ばっかして…！
蟲の手帖を読み
9kg減りました。
やかましいわよメタボタル
メ…!?
病気を操る私が言うのもなんだが
太りすぎは体に良くないわよ
脂肪ってのは手強いからねー
一度ついちゃうとなかなか取れないのよ
脇腹辺り特にね 脇腹辺りね
これは下っ腹ー
…！可及的速やかに対処すべきよね
ぽっ
急に暑く…
?

火球的!!
炭焼かに!!
CAUTION!!
いやいやいや!!

U・NEW！

カラスノバランス飲料

『バカダ』

SUN 鳥。

BORDER OF LIFE BORDER OF LIFE

ボーダーオブライフ

BAKADA

カラスノバランス飲料

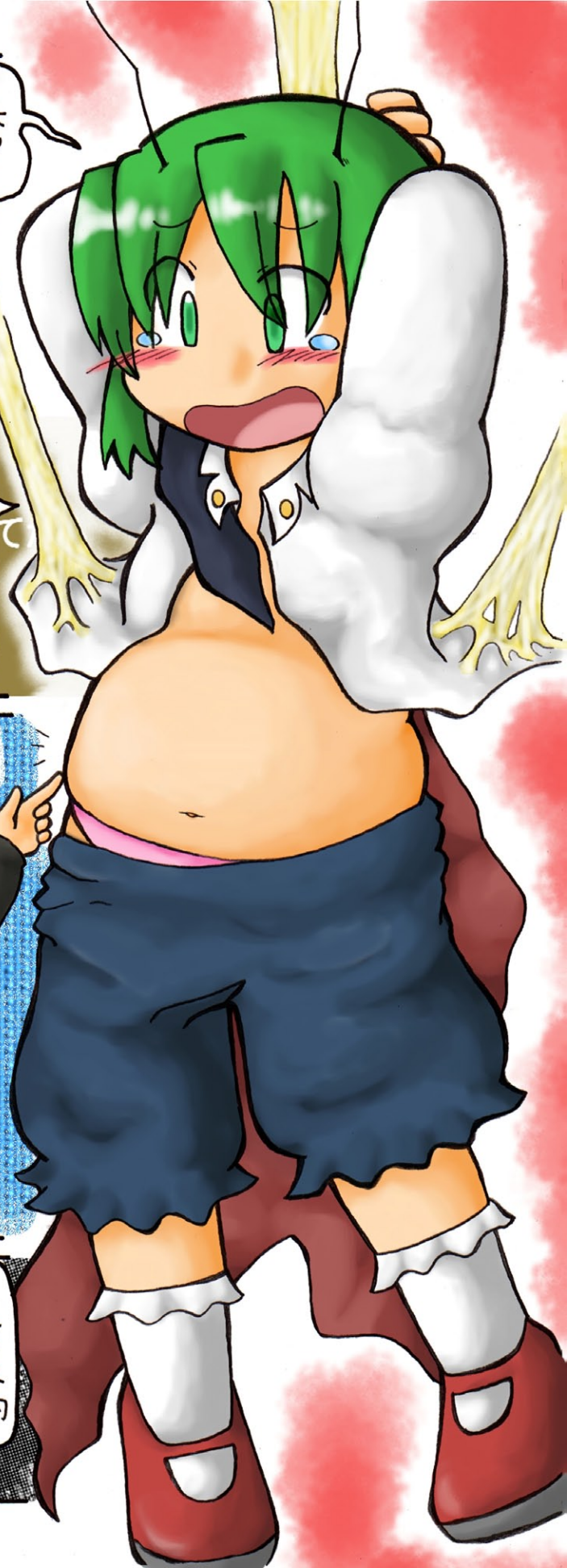
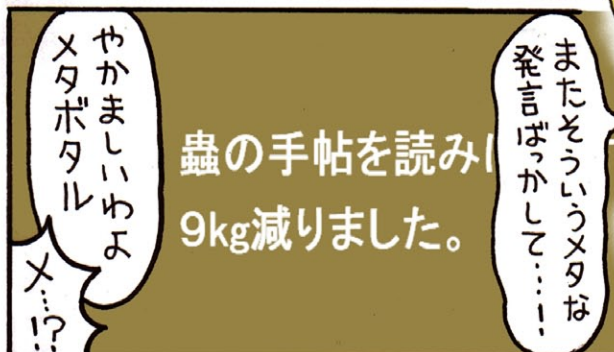
●抱え落ち

●チキンボム

●処理落ち

●パソコン新調

●事故死

●嘘避け

月刊 POMDEBUG

月刊ポン・デ・バグ

2月号

あなたはもう見た？
キュートでスイートな
幻想郷の
シンデレラガール・

ポン・デ・りぐるん！

新作目白押し！

魅惑の新フレーバーで春を先取り！

㈱リグル製菓

こんにちわ！私ポン・デ・リぐるん!!
幻想郷の平和を守ったりそうでもなかったり愛と勇気と⑨な子が友だちのいわゆる正義の味方だよ！
そいつは黙っちゃいられないぜ!!
この声は!?
ヒーローは常に一人だけ…正義の味方になりたくばまずこの魔理沙を倒すことだぜ!!
自機クラス出てくんなよ

お姉ちゃん遊びに来たよー
あぁリグルいらっしゃ・・・
い!?
蒼天航路
描いた人　東
おはよう
やっ
パチュリグな日々
～ポン・デ・りぐるん編～
…今日のリグルは何か違う…
今日のリグルは何か違うぞ…!
(大事なことなので二回言いました)

髪切った？
…全然。
そう…
でも今日のリグルは
ほわわ〜ん
いつもよりおいしそうだわ…
ゴクリ…
ガチャ
失礼します
お茶をお持ちしました
今お菓子をきらせてるので
お菓子はなしですが…
…って
お菓子あったし！
シャキン
いただきまーす!!
ひえぇ…
ポン・デ・りぐるんは
このあと紅魔館のみなさんが
おいしくいただきました

おわり

リグルがポン・デ・リグるんになったようです

著者：社　蛍夜

今回、私リグル・ナイトバグは、おかしな事件…いや、異変?に出会ってしまい、散々な目に遇ってしまいました。
　一言で言うならば地獄でしょうか。
　今回の事件はとある妖怪の気まぐれによって、何故か、私が、あんな事になってしまいまして。
　そうですね…事の起こりはとある日の朝でした。

「ん、ふぁ…」
　私は朝日が昇ると同時に起き上った。
　なんて事のない、普通の朝だった…その事に気付くまでは。
　私は寒い部屋に出るのが嫌で蓑蟲よろしく、布団に包まろうとしました。その時、違和感を感じたのです。
「ん?頭に何か…」
　でこぼこした何かが頭に巻きついていたのです。そして、近くに置いてあった手鏡を使い、自分の顔を見たんですよ。そしたら…
　ポン・デ・ラ○オンのようになっていたんです。

「それで、あたい達を呼んだのね…ルーミアを除いて」
　リグルの家の前にはチルノ、ミスティア、大妖精といつものメンバーが揃っていた。
「しかも伝書鳩ならぬ伝書蟲って…この時期に動く蟲も少ないのに」
　ミスティアの言葉に反応した、
「私の所には蝶が来たよ」
　大妖精と、
「あたいは…蛾かしら?」
「あぁ、フユシャクだね」
　リグルの補足を受けつつ言うチルノ。
「…私はアブだったわよ」
「一応逃げ足の速めな仔を…」
「食べないわよ!」
　等と会話を続ける四人、だったが。
「駄目だ、すっごい馴染みやすい。しかもｶﾜｲｲじゃない」
　ミスティアが語尾を小さくしながら喋る。
それを聞きリグルは、
「マズい、皆おかしく思えなくなってる」
「あー、あたいはダイジョウブよ…にしてもｶﾜｲｲわね」
　チルノも語尾が小さくなっていた。それを見てリグルは、
「うぅ…どうすればいいの」
「これって取れるんじゃないの?」
　大妖精の一言で場の空気が一瞬止まる。
「あっ、ゴメ…」

「それだっ！！」
「え…？」
　謝ろうとした大妖精は面食らっている。
「あ、あたいは思ってたけどそんな簡単な事言わなかっただけよ！」
「ハイハイ。リグル、ちょっと顔こっち寄せて」
「うん」
　そう言うとリグルはミスティアに寄り、そして…スポン
「取れた――！！」
　にゅっ
「…え？」「は？」「な…」「ふぇ？」
　生えた。
「何だコレ――――――！！！！」
「あー、リグル、ガンバ。それはそれで可愛いよ」
「慰めてるの！？慰めてないの！？」
「あたい用事思い出したわ」
「はっ、薄情者！！」
「こ、こういう事は駄目もとでも巫女にお願いしてみたらどうかしら」
「巫女！それがあったか！」
　そう言うとリグルは一目散に飛んで行った。
皆を置いて。

　博霊神社境内。
　飛んできたリグルはゆっくりと降りる。
「何だろう、頭重くなってるハズなのに飛んでても違和感無い…嫌な感じだなぁ」
　そう呟きながら巫女の博霊霊夢がよくお茶をしている場所へと歩く。
　すると、向かっている時とても嫌な予感を感じ、ビクッと体を震わせる。この先に行ってはいけない気がする。そう思ったリグルだが、行かなくてはこの状態がどうにもならないと思い、歩を進めた。
　そして、いつもは鬼の声が聞こえたハズなのだが今日は違う声が聞こえてきた。
「よーむー、まだ何も食べてないー」
「幽々子様、あまり居ては迷惑もかかりますし仕事も滞ります」
「だって饅頭一つ食べさせてくれないのよ。いくらなんでもこのまま帰るわけには…」
　この時リグルは考えていた。
　誰だっけ、この声聞き覚えが…たしか、あの満月の異変の時、に…
　リグルの額を冷や汗が一筋ツッと垂れ、落ちた。
　何であの幽霊こんなトコにいるんだッ！このままじゃ巫女に会えない！
「まったく、賽銭入れないような奴は客なんかじゃないっての」
「だそうですよ、幽々子様手持ちもありませんし…どうしました？」
「何か良い匂いが…」
　その言葉を聞いた直後、リグルの周辺にむわっとした冷気が漂った。
「ッ！？ッッ！！」
冷気に驚いた直後、目の前に冷気の原因である、西行寺幽々子が目の前に立っていて更に驚く。そして、グギュルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルと、地を揺らすかのような大きな音が幽々子のお腹から聞こえてきた。
それを聞いたリグルは、
「あ、私死んだかな？」
　そう呟いたそうだ。
「ゆっ、幽々子様ッ！正気を失わないで！」
「えッ！そこまで酷いの！？」
「何でもいいけどうちで暴れないでよ」
　グギュルルルルルルルルルルルルルルと音を立てながら、ゆらり、と一歩進んでくる幽々子。
「ひっ、ひぇっ」
「逃げろ！今の幽々子様に話は通じない！早く！」
「えッ！あ、わかっ…」
　言葉を言い終わる直前にリグルの懐に幽々子が飛び込む。
「ひえぇぇっ！」
　グレイズしながらも逃げるリグル。それを追う幽々子、さらにそれを追う妖夢。
「とりあえず撒かないと！何処か視界の悪い森か何処かに！」
　その言葉を聞いたリグルは妖怪の森へと向かう。
　たしか三月精が居たはず…
　そう考えリグルは森へと入る。

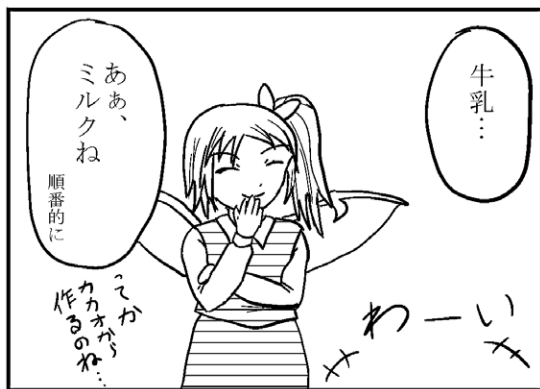
「おーい！サニー！ルナー！スター！」
　叫びながら森の中を高速で飛び続けるリグル、その時、
「あー、珍しいね。私達を呼ぶ妖怪がいるよ」
「何かしら？面倒なのはイヤだけど」
「ホント何かしら？後ろからわけわからないの追ってきてるし」
「ちょっ、居るなら姿見せてよ！」
　その言葉でほぼ平行した位置に飛ぶ三人の姿が見えてきた。
「何よ？妖怪が珍しく呼ぶから来てみたら、面倒事？メンドウは嫌よー」
「えールナちゃん、さっきまで『暇だー』とか叫んでたくせに」
「う、五月蝿いなッ！スターなんてやる事何も思いつかないでいたくせにッ！」
「二人ともー言い合いは止めとこうよ。丁度いい相手見つけたんだし」
「丁度いいとか言ってないで早く！私を隠して！！」
「え？隠すだけ？」
「そう！早く！早くしないと…」
　会話していた四人の後ろの方から物凄い音が聞こえた。恐らくお腹の音。
　その音に顔を青褪める三月精。
「さっ、サニー！早く！」
「分かってる！ルナこそ早く！」
「二人とも急いでー！」
サニーの能力（光の屈折を操る程度の能力）と、ルナの能力（周りの音を消す程度の能力）で周囲から確認されなくなったハズの四人は、近くの木の幹の陰に隠れる。
そこで、サニーがリグルに少々粗めに聞いた。
「ちょっ、アンタ！何てもんに追われてるの！？」
「えーと…たしか大食いの幽霊…」
「うわー、面倒なのに追われ…」
「ルナ！サニー！能力使ってるのよね！？」
　ルナが言葉を言いかけてる時に、スターが小さい声であるが、キツめに聞いてきた。
「え！？う、うん。当り前だよ」「私だって使ってるわ」
「何？どうしたの？」
「向こうの幽霊さん…スピードは落ちてるけど、ここを把握してるわ」
「え！？どうし…」
　台詞を言いかけたリグルの前に幽々子が現れる。そして、彼女は、
「クンクン……やっと…見つけたぁッ！！」
　鼻を忙しなく動かしながら歩き、近くまでやってきた。その後ろから追ってきた妖夢。
「今の幽々子様にはそれくらいの事では逃げれないぞ！早く！！」
「ひぇっ！」
「私達もとばっちりッ！！？」「だからメンドウ事は嫌だ！」「そんな事言ってないで逃げないと！」
　飛び込んでくる幽々子。四人はグレイズしながらも避け切り散り散りになりつつ逃げ出す。
「三人ともゴメンねー！今度会ったときにちゃんと詫びるからー！！」
　そういうとリグルは森の上に行き、またも最高スピードで飛んでいく。
　だが、そんなリグルの努力などお構いなしにグングン距離を縮めてくる幽々子。
「ひえぇぇぇぇ！！？」
　泣きながら飛んでいくリグル。その後ろから妖夢の声がかかる。
「迷い家に向かうぞ！こうなったら紫様に頼るしかない！」
「え！でも私行き方知らないよ！」
「私が指示する！出来る限り低空で森を通っていけ！幽々子様とのスピードの差は分かってるはずだろ！お前の方が森は飛びなれてるはずだ！」
「わ、分かった！」
　妖夢の的確な指示に従い、低空、出来るだけ森などを通りながら支持された方向に向かっていく。
そして、
「うわっ！」
　壁にぶつかりそうになったリグルは高度を上げる。迷い家の塀のようだ。
「つッ、いた、けど！まだ追われて…！」
　そこまで言った後に、幽々子が突然動きを止めた。
「ん…コレは！！」

そう言うと幽々子は家の中へと向かっていった。
「え!?ちょ、幽々子様!!」
その後を妖夢が追っていく。
「…え?何?…助かった、の?」
「そうねー、まぁ追われなくなったわね」
「ひえっ!」
突然リグルの横に、空間の切れ間から半身出して話しかけて来た女性。
「いやーゴメンねー」
あっはっは、と苦笑いしながらリグルに謝罪してきた。
「え?あの、紫さん…ですよね?コレってもしかして…」
突然の謝罪に面食らったリグル。半身で話しかけてくる八雲紫に、半分の疑念と半分の不安を抱きながら話す。
「あーうん、ソレ多分私のせいだわ」
「やっぱりー!!」
とっても衝撃を受けているリグル。頭の周りを囲っているモノを掴みながら言い寄る。
「取ってください!さっさと!!今すぐに!!」
「わ、分かったから。近い近い」
リグルは紫から少し離れた。
「ハイ、取っても大丈夫よ」
「早ッ!」
リグルはゆっくり、頭の周りのソレを外し
…スポン……
「…だいじょう…ぶ?」
「みたいね」
「ヤッター!って、何でこんな事になったんですか!!?」
リグルは喜ぶ暇無くまたも言い寄る。
「あー、多分寝ぼけてやったんでしょうね」
「寝ぼけでこの迷惑っぷり!なんてこった!」
「そして、今朝の夢は…」
そこまで言うとリグルの持ってた輪を取り、食べた。愕然とするリグル。
「いやー、コレ食べたくってねー、夢の中では食べれても幻想郷には無いしどうしようかなーってね、あーこのモチモチ感たまらないッ!」
「ッ…!!?ッ!!!ッ…」
呆然とその状況を見ていたリグルはやがて、がくりと肩を落とし項垂れる。
「あー、大丈夫?」
モチモチしながら聞いてくる紫。
「いえ、もう気力も体力も…」
屍よろしく、元気ない声のリグル。
「悪かったわよ。お詫びに一食食べていったらどう?流石にお腹すいたでしょう?」
「さすがにいまは…」
そこまで言ったリグルだが、家の方から急に漂ってきた匂いを嗅ぎ、お腹が鳴るリグル。
「まぁ、一食くらいなら…」
顔を赤くしながら答えるリグル。
「そう、それじゃいらっしゃい」
クスクスと笑いながら言う紫。そして家へと向かう、それに付いていくリグル。
お昼を食べたリグルは妖夢の案内の元、家に帰った。
「という、八雲家に一食一飯の恩を…」
「紫さんッ!人のモノローグに入らないでください」
「いーじゃない、間違った事言ってないし」
「そうですがソレとコレは話が別…」
「それじゃ読者の皆様、また来月〜」
「あっ何ですか!勝手に終わらさない出ください!それに来月って何!?読者ってなn」
（終）

〈作者コメント〉
全身が筋肉痛!（挨拶）社です。
先月号、季節性の…えーと、ヌンフル…?風邪でいいか、となってしまい投稿できず残念です。
その上願い事の方は最終話となるであろうものを書いて、長さを見てから適度に分割、調節する予定故、全何話になるか未だ不定 orz
投稿は計画的に!!
今回はポン・デ・りぐるんなるものを題に書いてみましたが・・・盛大な東方メドレー聞いてたらこんな逃走劇になって・・・
その上、オチをスキマに頼っているようではまだまだか・・・精進せねば。
それでは、各リグリエイター及び小崎様に感謝の気持ちを・・・また来月。

『 ポン・デ・りぐるんはいかが？ 』　触角幼女

初めて参加します。よろしくお願いします！「Salka社長！作戦成功ですよ！！」

大ちゃんシーッ!!

White Season

preludenano

チル×ミル

けーね先生
牛乳くれ!
ガラッ

…何や急に
授業中やぞ
ミルクチョコつくるのに必要なんだよ
チ

?まぁええわ
はい、
おおありがと!
MILK

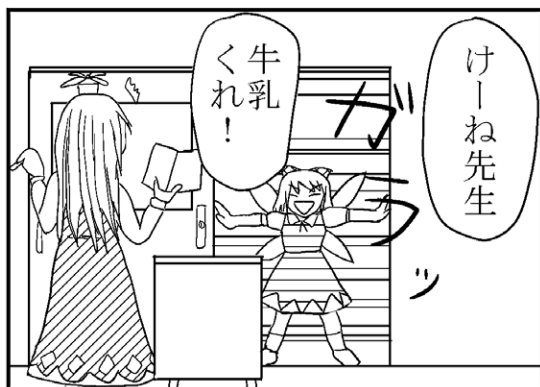
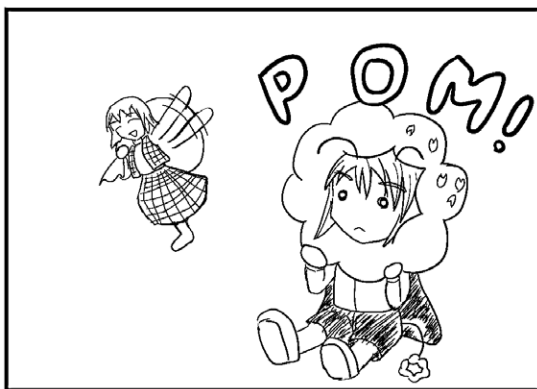
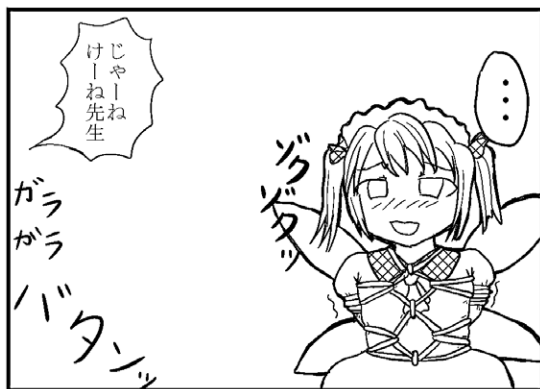
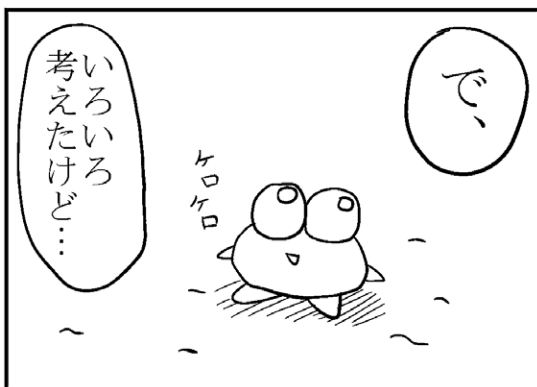
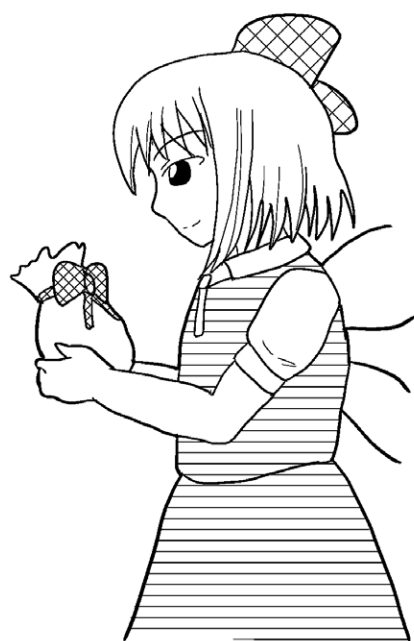
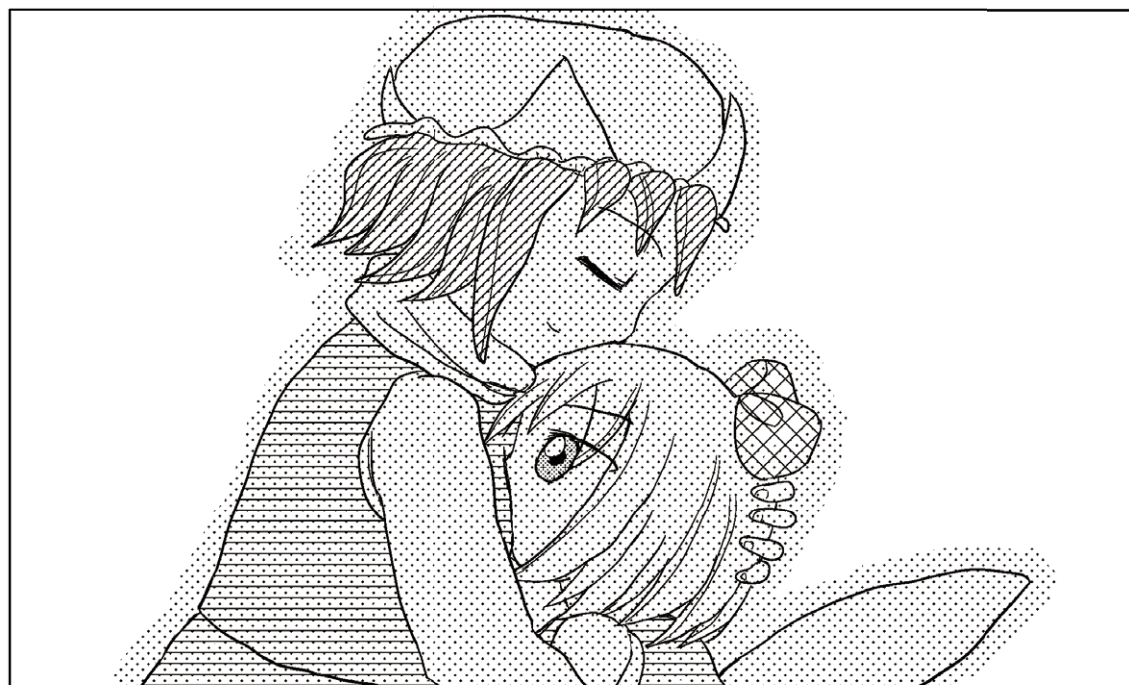
…
じゃーね けーね先生
ゾクゾクッ
ガラガラ
バタンッ

ここにまであの影響が…

で、
いろいろ考えたけど…
ケロケロ

今回ばかりは手に入る方法が
全っ然、分からないよ…?
何なのカカオって?

あ、幽香さ
ん
んん!?
タタタタッ
ボズッ

POM!

その後大ちゃんの指導の下手作りチョコを完成させた

アハハハハッ
うんっ！

fin.

こんにちわ！私ポン・デ・りぐるん!!
幻想郷の平和を以下略な女の子!!リグルは男の子派なお友だちは脳内変換で文字を変えてね！
俺い◎しってスバラシイ!!
ふふふ…良いことを聞いたわ
この声は!?
正義の味方が居るなら悪の親玉も欲しいわね！私がラスボスになるからかかってらっしゃい!!
これそういうキャラじゃねえから

フレーバー一覧

ポン・デ・
まっちゃ

抹茶パウダーが
渋めの一品です。

ポン・デ・
シンプルにチョコ

控えめ縞模様に
チョコソースを添えて。

ポン・デ・
ココアパウダー

ほろ苦い大人の味を
ココアパウダーで。

ポン・デ・
Wチョコ

贅沢にチョコを
使いました。

ポン・デ・
マジカルシュガー

魔法のような
鮮やかな味を。

ポン・デ・
ゴールデンシュガー＆
シルバーココナッツ

シュガーとココナッツで
二度おいしく。

月刊POMDEBUG

SELECTION

あなたのお気に入りを
見つけて下さい。

㈱リグル製菓

ポン・デ・
クランベリー
スカーレット

甘酸っぱい
恋のベリーです。

ポン・デ・
ストロベリー
クライシス

苺チョコに
ソースのアクセント。

ポン・デ・
サクラ
～すみぞめ～

少し早い
春の味わいをお届け。

ポン・デ・
ストロベリー
スカーレット

苺の味が
甘く香る一品。

幻想郷的フリーシナリオRPG、遂に登場!!

２００８年春発売予定
定価未定

フリーシナリオ

『ロマバグ』には決められたシナリオというものは存在しない。全てがプレイヤーの手に委ねられ、自由に物語を作ることができるのだ。本来の目的である異変解決に努めるも良し、リグルと絡ませるならこのキャラクターだ！とジャスティスでパーティを組んでちゅっちゅさせるも良し。一人一人が違う道を歩むことができるシステム、それが『フリーシナリオシステム』なのだ。

仲間を集めて
幻想郷中を巡れ！

幻想郷で多発する、幻想郷縁起には載らないような小さな『異変』。プレイヤーはリグルを操り、異変を解決することでリグルの人気を高めていくのだ。
リグルの努力が、次の人気投票にどう影響してくるのか。それとも、やっぱり何も起こらないのか……頑張れリグル！負けるなリグル！君には大きなお友達がついている！

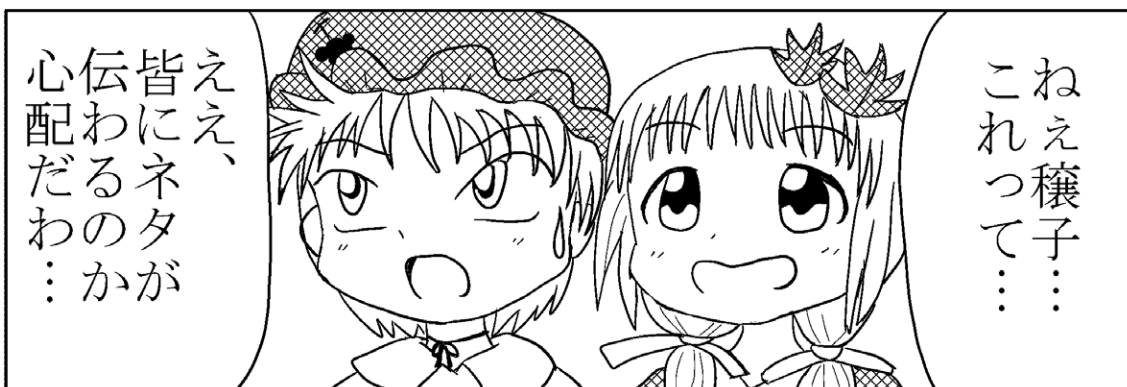
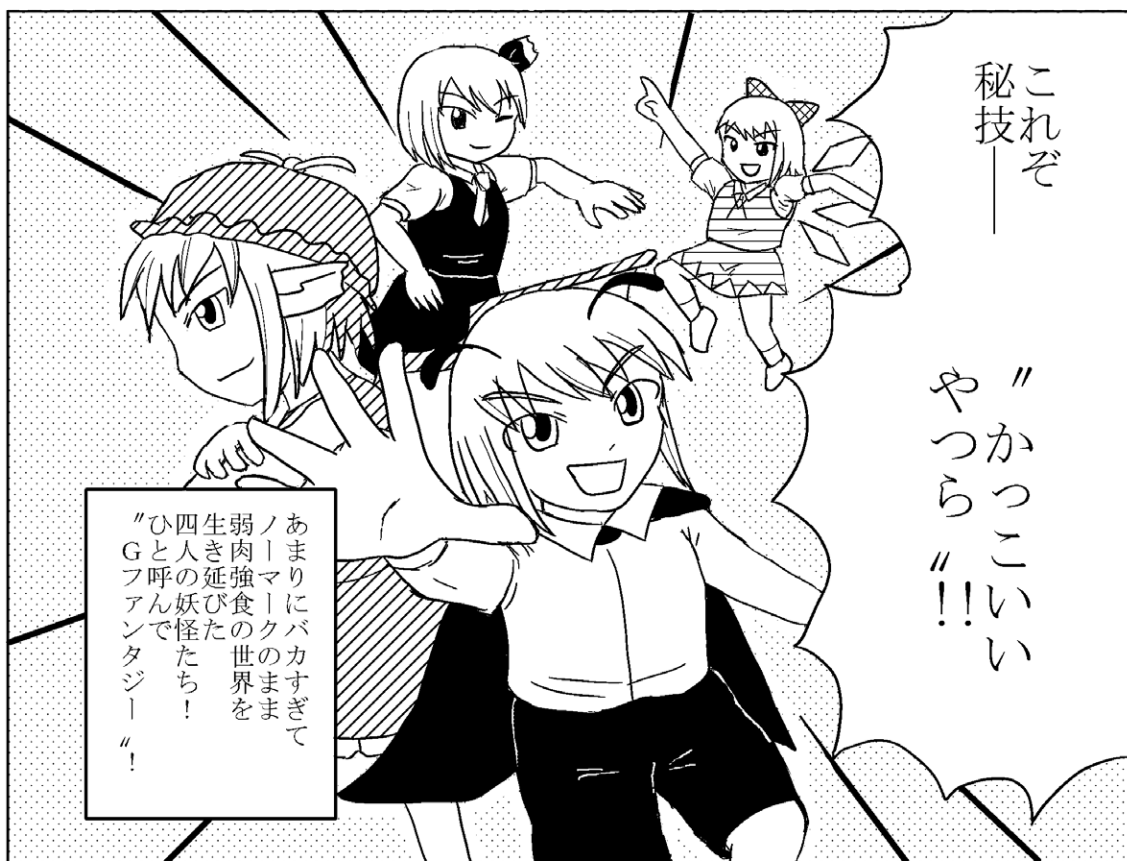
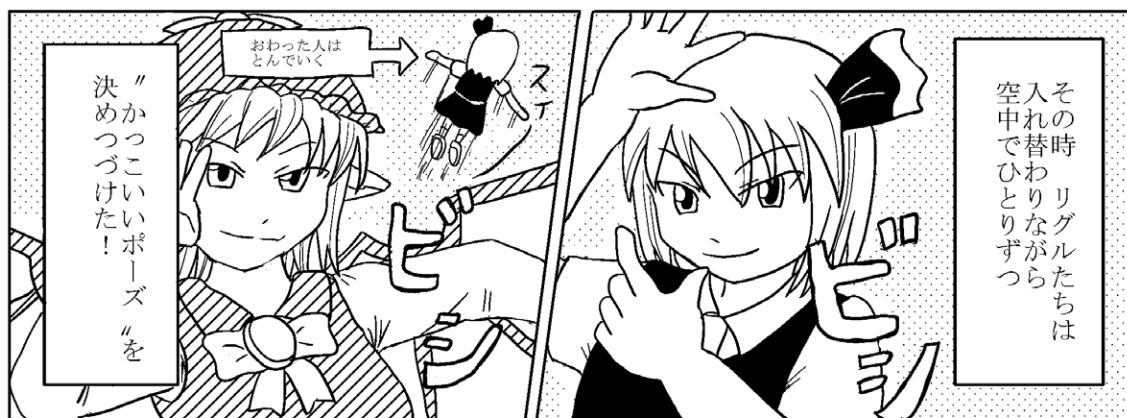
→特定のキャラクターを仲間にした時のみ発生するイベントも存在する。仲間に引き入れるチャンスが訪れたら、迷わず仲間にしよう。

目指すは人気投票１位だ！

←中には特殊なキャラクターも……？

詳しい情報は次ページからもありません。引き続き月刊NIGHTBUGをお楽しみ下さい。

～物語はいつも唐突に始まる～

リグル「だからホタルだってば!!」

その時 リグルたちは入れ替わりながら空中でひとりずつ

〝かっこいいポーズ〟を決めつづけた！

おわった人はとんでいく

ビビッ

ビシッ

これぞ秘技――

〝かっこいいやつら〟!!

あまりにバカすぎてノーマークのまま弱肉強食の世界を生き延びた四人の妖怪たち！〝ひと呼んでGファンタジー〟！

preludenano

びーさーいれーん
夢を〜夢を〜
夢を〜

楽屋ウラ的何か。

描いた人 草加あおい

発案者は姫様でした。

イケメンリグルは好きですか?

個人的にはこれでもいい。

Sは塾で見てないです。

じゃあこの人！㋷
うらぬーす
やはり似ない…
あー、あなたには㋹
適任かもしれないわね

あれ、何だか別のキャラが似合ってる気がしてきた！
…まぁ、後処理が大変そうだしそのほうがいいか…

萌えの語源とも言われれば。

語源はあくまで一説ですがね。

多分変態仮面言われる。

なにがむむむだ。

ウラ の ウラ。

この子男の子っぽいし、ハーレム系のパロは？

菊池正美がCVしか あんたも大既だけどね

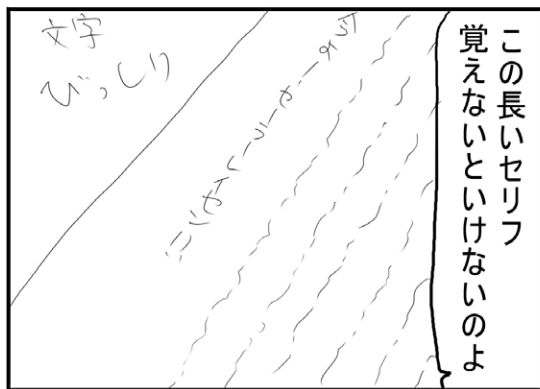
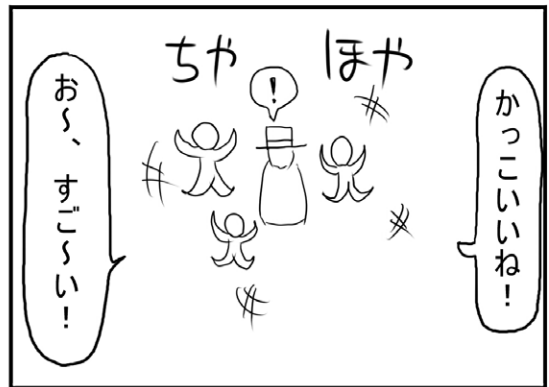
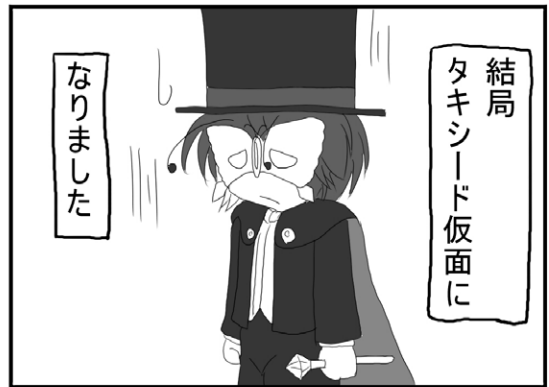
元祖とも言える天地無用？女神様もあるし、後はあかほり作品…他のキャストどうすんの

エヴァにウテナ…ナデシコは？

てか何でスタチャ？

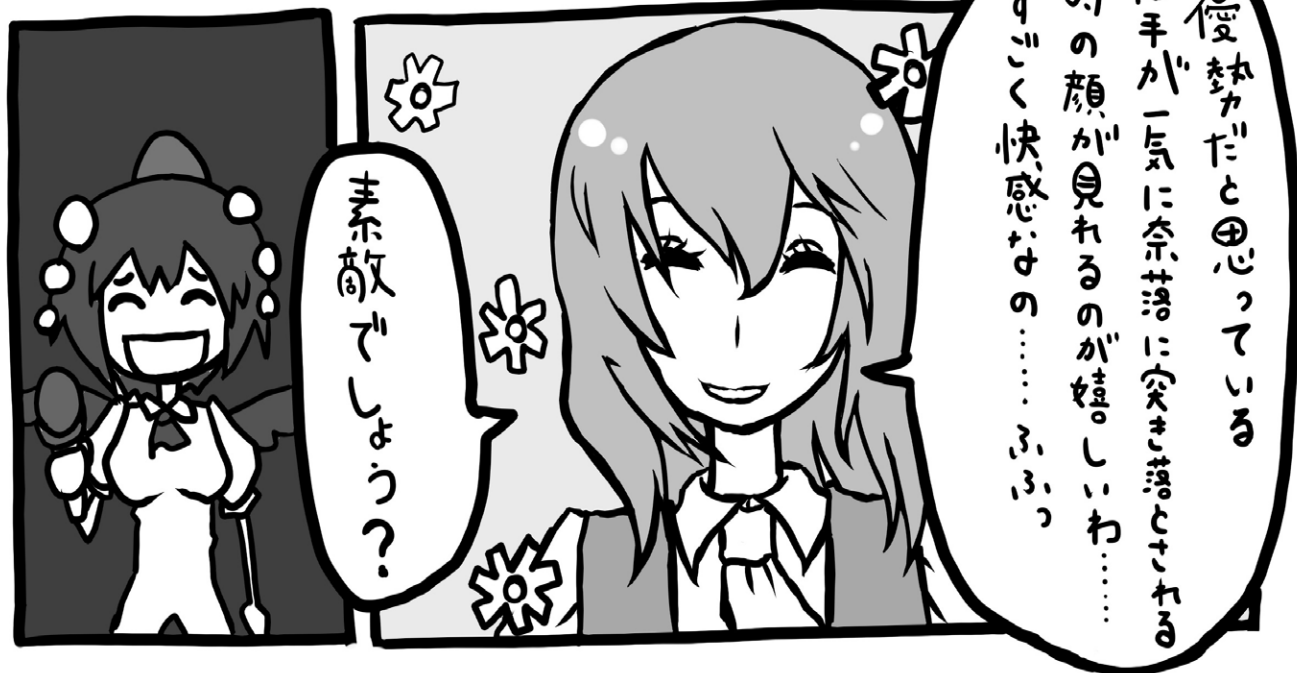
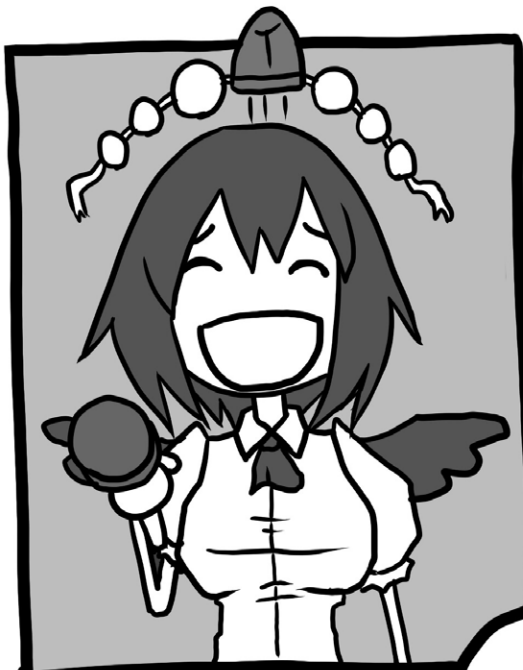
そりゃ私たちだろ…オモイカネにユリカ！両親の仇！って

そんな初期設定誰も覚えてないわよ

最近てるもこも好きになりました。

このネタ考えた後に実際言われましたw

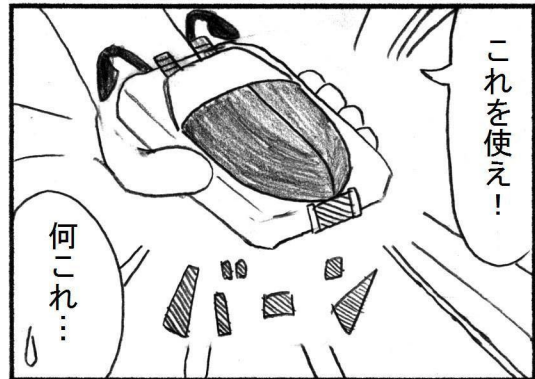
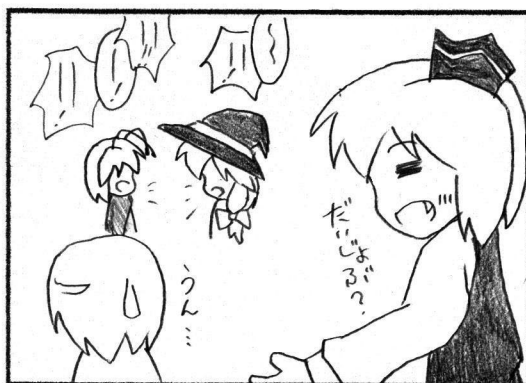
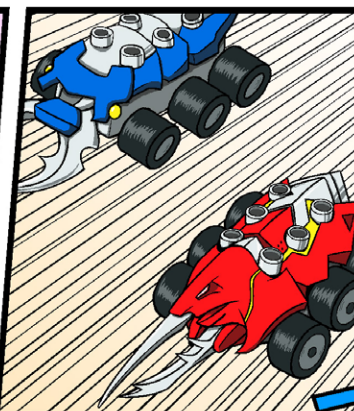
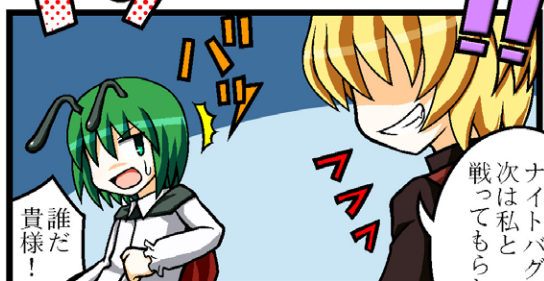
※注意書き
この漫画は遊戯王OCGの
現環境を知っていないと、だいたいの
ネタがわかりません。
一部にしか通じないパロディ?で
ごめんなさい…。
くらげん

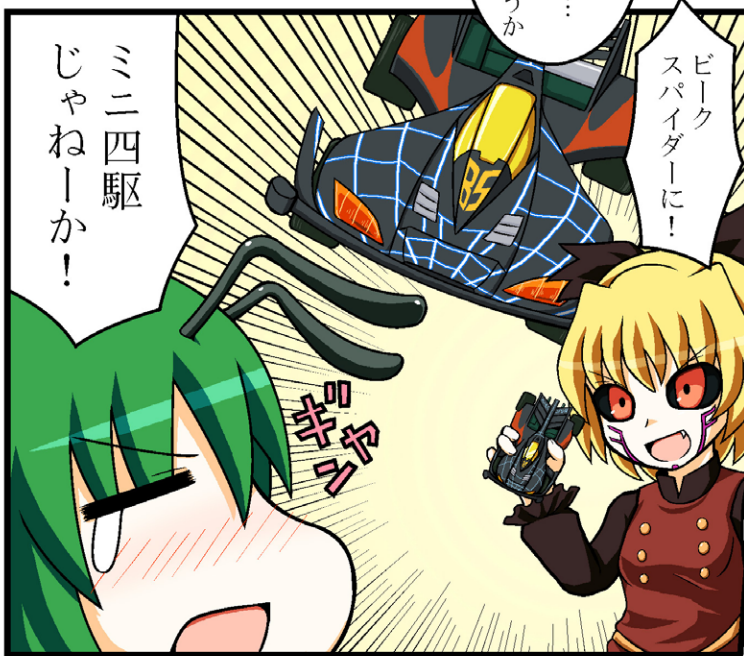
今日は何のデッキで出るんですか？
儀式よ…
巫女だもの
へぇ
儀式ですか!!
旬ですね～
儀式モンスターは？
※儀式デッキ… 強いけど出すのめんどう。
デ
デミ…ス…
※デミス… 強いけど、3枚じゃないとさ……。
弱くなってなんかないもん…うう…
めそ めそ
そっとしておいてやってくれ…!!
おっけーね

あ!!そこに見えるは
幽香さんではないですか!
幽香さんは…やはり
植物デッキですか?
ええ…そうね
ファンカスノーレ
アマリリスカウンターよ
※長いデッキ名…事故りやすい。
あら意外…
純植物じゃないの
ですねぇ…?
どき
どき
ふふ……
このデッキの方が
私に合っているのよ……
回していて楽しいし…
それに……
優勢だと思っている
相手が一気に奈落に突き落とされる
時の顔が見れるのが嬉しいわ……
すごく快感なの…… ふふっ
素敵でしょう?

さぁ！
気を取り直して
にとりさんに突撃！！
え、私？
にとりさん
どんなデッキ？
ジェネ帝です
おお！
機械に水ですごく
にとりさんっぽい！！
…お金かかったでしょう？
えへへ…
っがんばりました
次…チルノさんは
氷結界ですね！
何故わかった
※ジェネ帝…人によってだいぶ構築が違う（と思う）。強いけど必要なカードが高価。
※氷結界…壊れカードが多いが全体で言えば、そこそこの強さ。
さあて！！
みすちーがBFとかケロ子さまが
カエルとか色々ネタはあった（というか
ほぼそのままですけど）のですが
締め切りがあぶないのでそろそろ
リグルさんに出てきて
いただきましょう！！
お？
リグルさんは
それは勿論
昆虫ですよね？
いや違うよ？
あややっ！？
※昆虫デッキ…安定してそこそこの強さを誇る。

ライトロード
※ライロ…現環境の頂点。その割に安価で作れる。ただ米版の1stで組むと10万超え。
私もそろそろいい頃
目立ってもいい頃だって思ったの
ほらほら!人気投票も近いことだし!!
ふふっ
外道的な意味で目立ちそう
あらリグル…1回戦で当たるのね よろしく頼むわ
どもども
紫さん!!
今日は絶対負けませんよ!!
あらあら私は次元ネクロなんだけど…勝てるかしら♪
翌日の文々。新聞には、端っこにリグルが1回戦で負けたことが記事にされていた。
何でだよチクショウ!!
ドン
ドン
おわり
※次元ネクロ…ネクロフェイス。そこまで強くはないがいやらしいデッキ。ライロにすごく相性がよい。ちなみに羅外さんはネクロフェイスの絵が好きらしい。

古かったり新しかったり

描いた奴：キッカ

特撮ネタ一本かと思ったが、
別にそんなことはなかったぜ！

実はルーミアに邪甲させようとしていた

リグル・ザ・サティスファクション

羅外

ペスカトーレときたまご

著者：越冬

「長い階段を上り終え、境内への鳥居を潜り抜けると、そこは紛れもない雪国だった。」

　木々の影にある、融け損ねた霜柱を踏み歩く。

　童心に返ったようで気分も良い。

　自分が子供たちに紛れはしゃぐ姿を想像すると、すこし照れくさかった。

「雪は勘弁。」

　私の僅か後方から単純な感想が返ってきた。寒さに負け、想像するのも嫌らしい。

「終着点は南国の方が嬉しいかい？」

　振り返り、今のは無かったことにしようかと彼女に問いかける。

　彼女が追いつくまでの時間稼ぎである。

「いいけどね、叶わないし。そんなに積もってるなら、鳥居を抜けなくても、雪景色だろうし。」

　彼女の足元からは氷の砕ける音がしない。

　霜柱の融けやすい、日の当たる場所を歩いているからで、私が全て潰した訳ではない。

「鳥居の前後で世界が違うのだろう。向こう側は非日常の空間。」

　ゆっくりと彼女が近づいてくる。

「そうかなぁ。」

　現在、日差しと呼べるほどの日射は無く、どこを歩いても差は無いのだが。

「まぁ、雪国はトンネルを越えた先にあって欲しいかな。」

「だよねぇ。暖かいし。汽車。」

　先刻からは口を開けるのも億劫という具合だ。

　吐息は、白くなる前に風に流され消えた。

　冬枯れの風景の中、ぽつぽつ二人で神社へ向かって歩いている。

　寒い日だった。

　先日までの春の気配は偽りのようだった。

　薄く灰色の雲が日を遮り、寒気は服の上からでも伝わった。

　私は平気なのだが、寒がりには殊に辛いと見える。

　隣を見れば、いつにも増して厚着をしているらしい彼女が、丸く小さく身を縮こまらせて歩いている。

　少しでも冷たい風に当たらぬよう、あるいは風の入り込む隙間を作らぬように健気に体を縮めている様は、虫の越冬を思わせた。

　尤も、彼女も虫であったのだが、この様に寒くては誰であっても仕方のない。

　虫でなくても身を寄せ合うだろう。

　彼女とは道中で会った。

　鬱憤を巫女に晴らそうと、土産を持って神社へ行く途中のことだった。

　それは遠くから見て不思議な黒い塊だった。

　後で聞いたことだが、風で顔が冷たいので半目で歩いていたという。

　前を見ていないため木にぶつかりそうに。

地面も見ていないため根に躓きそうに。
そんな調子なので、のそのそと歩くしかない。
当たっては方向を変える様は、まさに団子蟲だった。
背後から近づき、首元に手を入れてやると雷が直撃したかのような反応をした。

彼女も神社に向かっていた。
寒いから、何かあるだろうと考えたらしい。
短絡的というか何というか。
しばらく歩いてみたものの、予想以上の寒さに身動きが取れず、酷く後悔したらしい。
私の目的も似たようなものなの、で共に行くことになった。
彼女は帰りたい様子だったが、休むには神社が一番近いことを言うと、しぶしぶ歩き出した。
もっと速く動けば速く休める気もするのだが。
不慣なので彼女の荷物は私が持っている。
驚かせた詫びも兼ねていた。

「冷えるねぇ。」
「ああ。」
「先生、ぼく、もう眠いんだ。」
字面を追えば、ずいぶん弱気であるが。
「ああ。向こうの方に羊が歩いているぞ。」
「羊が1匹。ぐう。」
「しばらくしたら起こしてあげるから、安心して寝ていいさ。」
「寝たら終わりだから。冗談だから。いや、冗談じゃないから。」
まだ、くだらない事を話す元気はあるようで安心か。
「つらいなら背負ってもいいんだぞ？」
「いつもすまないねぇ。」
と言うものの、背負われるつもりはないようで、変わらず歩みを進めている。
お姫様だっこが良かったのかしら。
何れにしても、神社はすぐそこである。
階段を、一段ずつ確実に、登っていく。
留守かも、とは言わないでおく。

「寒いな。」
「うん。」
「乾布摩擦でもするかい。」
「じゃあ、先生お先にどうぞ。」
「実は、私は寒くないんだ。」
「ずるい。」
ゴールが見え、少し反応も良くなってきた。
「ところで、厚着しすぎじゃないか？」
階段で並んで歩いているため、異様に丸いマントが再び気になってきたのだった。
まるで何かが詰まっているようだった。
そして、なんとなく、錯覚かもしれないが、それは動いている気がした。
「だって寒いし。これでも寒いけど。」
「神社に着いたら脱ぐのかい？」
「寒くないなら、ね。」
「中は、綿か何か？」
「んー。どうでしょう。」
私の変化に勘付いたらしい。
「先生、気になるなぁ。」
「さて、何でしょう。」
「何だろうね。」
やっぱり、動いているように見える。
彼女は手をしまっているから、隠した手で遊んでいるのだろうか。
「見たいの？」
私の目を見て、悪戯な笑顔を見せた。
見たいなら見せてあげなくも無いよ、といった口振りである。
「じゃあ、神社で乾布摩擦しようか。」
まさか冗談だろう、と笑って返す。
これで脱いだのなら、それはそれで面白い。
無論、変な意味ではない。
「それは、勘弁。」
彼女の歩みが速くなる。
鳥居が見えてきた。
当然、雪景色では無い。

境内に人の気は無かったが、この神社に関してはいつものことである。
彼女は、焚き火の匂いのする方へ、引き寄

せられるように進んでいった。
私もそれについていく。
どこからか、調子はずれの歌が聞こえてきた。

「どいつもこいつも、勝手に神社を集合場所にしないでほしいわ。」
「まぁ、そう言わずに。今日は寺子屋の面白い話を持ってきたから。」
「それ、面白いのかしら。」
巫女と共に、焚き火の前ではしゃぐ二人を眺める。
やっぱり蟲は明るい所に集まる。
焼き鳥がおいしそう。
口には出していないが、巫女も同じことを考えていそうだ。
「先生がお酒を持って来たって？じゃあ、今夜は宴会ね！」
夜雀の彼女は、何故こんなに元気なのか、不思議議である。
「寒いんだから、もう中に入るわよ。」
火の始末を私に任せて、巫女は玄関に入っていく。
「もう少しだけぇ。」と、蟲の彼女は焚き火に張り付いている。
その彼女に後ろから力一杯抱き付き、
「うわぁ。もっこもこ！」と、私の望みを叶えてくれた。
膨らんだ服には腕の形が残っている。
今ので五十四は逝ったかなぁ、と私は思う。

（終）

〈作者コメント〉
お初です。雪国です。当初は座敷に上がってワイワイして、集まった天道虫みたいだなぁって締めを想像していたのですが、屋外エンドに。
寒がるリグルも偶には良いかなと思いました。

リグルカンタービレ

著者：壁々

拝啓、親愛なるレイラ・プリズムリバー
　この間、４姉妹揃ってライブを行う夢を見ました。
　幻想郷を巡り、果ては結界を越えた先でも。
　私はいつまでこの狭い狭い幻想郷に留まらなくてはならないのでしょうか――。

（この音も…あの音も！みんな、みーんな平凡…！）
　いらついた様に幻想郷の空を飛び回る、遠目にもわかる赤い服の少女。その姿を地上から見上げる２人の妖怪がいた。
「あー見て見て！リリカちゃん♪」
「リリカ？あー、ライブをたまにやってるあの騒霊姉妹の？有名だけどさ、騒霊なんでしょ？能力に任せたただ騒がしいライブなんじゃないの？」
「むー、そんなことないよー。リリカちゃんは幻想の音ってのを使うの。一から自分で集めて、クセの強い姉２人の演奏をまとめてるんだからー。きっとすごい努力してんだよー。」
「ふうん…」
　２人の妖怪―ルーミアと秋穣子は、リリカが飛び去った方向を見やりながら会話を続ける。その後ろで２人の弁当をあける妖怪の存在に気づかないままに。

「そういえば今度ライブあるから、今日とか練習が聞けるかもよ？ね、聞きにいこうよ！」
「うん、そうね。でもその前にお昼お昼！なんと今日の弁当は秋先取りの味覚を詰め込んだー」
　こういいつつ、振り向いた穣子の目に映ったのは、緑髪の上につけた触角をさも幸せそうに動かしながら、満面の笑みで自分の弁当をほおばっている、顔なじみの妖怪の姿であった。
「わ…おいしそ…」
「り……リグルーっ！ぎーっ、私のお弁当ー！」
　幻想郷の空に怒りの声が響きわたった。

（聞いた？巫女がこの間月へ行ったらしいよ？）（えーっ結界とかどうやって越えたんだろう！？）
（…私も行きたかった…まだ見ぬ幻想の土地には沢山の音があったはず…！吸血鬼がただ行きたいからってだけでいけるのにっ…！！）
　集まらない音に収まらないイライラ。その気持ちをぶつけるようにリリカは力任せに鍵盤を叩く。
（っくそーっ‼）
　バーンっ

ファーーン！！ピチューン

「なーにやってんのよ！リリカ!!」

轟音を愛用のトランペットから鳴らし、演奏を強引に中断、あまつさえリリカを被弾させてもなお謝る気配なしなメルランが一気にまくしたてる。

「前回失敗したからってんで、次に向けて練習しようって言ってきたのあんたでしょー！？なのに何その演奏！？やる気あんの！？曲だってリリカが好きな『二度目の風葬』なのに、少しは気合いれて…」

「…気合って何よ？」

「は？」

「お姉ちゃんの言う気合ってなんなの！？いつもいつもハッピーハッピーハイテンションな演奏しかしないくせに、私にはそれに合わせるような強制しかしないっての！？私だって…私だって表に立って目立った演奏したいのに！」

「……リリカ？」

「…うっうー…ごめん、外出る！」

「ちょっリリカ！？」

そのまま外へとリリカは飛び出した。涙をこらえて、行くあてもなく。ただ、夕日が眩しかったから背を向けてやみくもにとんだ。

妖怪の山から音が聞こえる。人里からも音が聞こえる。音は絶えない、どこからでも聞こえる。普段のリリカが張り巡らせるアンテナは、もう存在しない。今のリリカには雑音にしか聞こえなかった。リリカは絶望していた。自身の環境に、自身の境遇に、自身の心境に―

（…ああ、蟲の音が聞こえる…いつもと同じ…ただやかましく、自身の存在を主張するだけの音―）

今のリリカは音を特に注意して聞いていない。だから、最初はわからなかった。だけど、死んでから生まれてこのかた、リリカは常に音と触れ合ってきた。だから、わかる。その音が普段と違うことに

（―！生命の歌…自身の存在だけじゃない！明らかに種族としての主張の『歌』…！！…偶然で出る音じゃない！なんで、こんな音が…！）

「リリカっ！」

「…へぅ？…ああ、ミスティアか…」

「もー、無視しないでよ。」

「…メルランさんから聞いたよ。行き詰ってるんだね。もしくは息詰まってるのか…」

「あのバカ姉～余計なこと…」

いつのまにか日は落ちていた。ミスティアに連れられるままに屋台へと入り、リリカは酒をあおっていた。

「リリカ？あんたそんな普段飲まないでしょ？」

「飲まなきゃやってらんないよ！」

「…管巻くのはいいけどさ…現実見ないと。月やら、結界の向こうやら、私たち力のない妖怪たちは望むべくもない場所だよ。」

「…届かないなら、もう騒霊やめようかなぁ…」

「…は？」

「普通に霊として、人驚かしながら生きてもいいかもしれない。別に姉さんたちはソロでも出来るんだし…」

「……リリカ。酔ってても、冗談でも言っちゃいけないことはあるよ。とりあえず今日は帰りな。」

「…もう一本」

「帰りなさい！」

追い出されてしまった。帰る気もなかった。ふらふらとした足取りは、酔いなのか、私の心を表しているのか、もうどうでもよかった。湖の水辺に生えた大きな木の根元に私は墜落するように降り立ち…そこで私の意識は途絶えた。

「ふーふーふふーん、ふーふ～ん。ふーふーふふーんふーふ～ん。ふー…」

どこかから歌声が聞こえる。だれかはわからない。なんなのかすらどうでもいい…

「…ひぇっ…えっと…なんとかちゃん…だっけ…？」

私のことを言ってる…のかなぁ……ああ、もう……なんか…

「………ふーっ…」

……風の音が…聞こえる…

「………ん…」
　再び意識が戻った時、私は音の中にいた。
夕方に聞いた、あの蟲の声の中に。
（ああ…これは…蟲の生命賛歌―）
　音の中、私は眼を開けた。その時、私の五感がとらえたものは

黒く蠢く蟲の中で、美しく響く蟲の歌。
気ままに気ままに、歌うようにー
（カプリチオーソ・カンタービレ）

　これが私とリグル・ナイトバグの出会いだった。

（終）

〈作者コメント〉
やってみたかったからやってみた。
このお題しかり、2話同時掲載しかり。
後悔はしてない。けど、反省はしてる。
ちょっとこっちのほう、適当だったかもしれない…と。

どうせ引き裂かれるなら、
身体を引き裂かれる方がはるかにマシだと思った。
信じてた。
……いや、信じてる。
今この瞬間だって、信じてる。
でも……薄々は気付いてる。
信じたいのは、認めたくないだけだからだ。
自分に言い聞かせるような、
そんな涙声が……もうたまらなく馬鹿馬鹿しくて……。
さらなる涙が……顔をもっとぐしゃぐしゃにする……。
機械的に繰り返されていたその言葉はようやく収まり、とても静かになった。
虫たちの声だけが…いやに騒がしい。
なのに、
……彼女のその言葉は、まだ聞こえる気がする。
……聞こえるはずはない。
彼女はもう、言うのをやめているのだから。
泣いているのは私だけだった。
彼女は泣きもしなかった。
彼女がそれを繰り返し口にしていた時も、
表情どころか感情もなかった。
彼女に、私のために流す涙がないのなら、

私にだって。
彼女らのために流す涙はいらないはずなのだ。
それなのに……痛み、目を潤ませてしまうのは……どうして？
それでも引き裂かれてないと、……信じていたいから。
もう十分だろ？
内なる、もうひとりの自分がやさしく語りかける……。
私はもう充分に心を痛めたさ。
……そして何度も、その痛む心を捨てるべきかどうか迷ったんだ。
だけど私は…頑なに、捨てることを拒んだんじゃないか。
捨てれば…もっと心が楽になれる……。
それを知りながらも、私は信じることを選んだんじゃないか。
その辛かった苦労は、きっと私にしかわからないし、私にしかねぎらえない。
なぁ私。
……私は充分に頑張った。
……私がそれを認めてやる。
だから。
……もう楽になってもいいんじゃないか
……？
それに……捨てるんじゃない。
彼女と一緒に、置いていくんだ。

花を手向けるように。

さぁ。
……心を落ち着けて……。
もう右腕が痺れているだろうけど。
……頑張って振り上げよう。
ひとつ振るたびに忘れるんだ。
親切が、うれしかった。
愛らしい笑顔がうれしかった。
頭を撫でるのが、好きだった。
そんな君がはにかむのが、好きだった。
これで最後だから。
これを振り下ろせば、忘れてしまうのだから。
君に送る、……私からの、
最初で最後の花束。
ひょっとすると、……私は君のことが、
……好きだった。
その言葉と共に、私はもう一度だけ振り
……

When Wriggle Cry?

著者：crimson-angel

どうせ引き裂かれるなら、身体を引き裂かれる方がはるかにマシだと思った。
　信じてた。
……いや、信じてる。
今この瞬間だって、信じてる。
でも……薄々は気付いてる。
信じたいのは、認めたくないだけだからだ。
　自分に言い聞かせるような、そんな涙声が……もうたまらなく馬鹿馬鹿しくて……。
　さらなる涙が……顔をもっとぐしゃぐしゃにする……。
　機械的に繰り返されていたその言葉はようやく収まり、とても静かになった。
　虫たちの声だけが…いやに騒がしい。
なのに、
……彼女のその言葉は、まだ聞こえる気がする。
……聞こえるはずはない。
　彼女はもう、言うのをやめているのだから。
　泣いているのは私だけだった。
　彼女は泣きもしなかった。
　彼女がそれを繰り返し口にしていた時も、表情どころか感情もなかった。
　彼女に、私のために流す涙がないのなら、私にだって。
　彼女らのために流す涙はいらないはずなのだ。
　それなのに……痛み、目を潤ませてしまうのは……どうして?
　それでも引き裂かれてないと、……信じていたいから。
　もう十分だろ?
内なる、もうひとりの自分がやさしく語りかける……。私は、まだ謝り続けている。
　私は、誰に謝っているのだろう。これだけ謝っているのだから、もう許してくれてもいいのに。
　どんな過ちだって、許されないことはないはずだ。取り返せないミスなんかない。次から気をつければいい。
　ならば……私は、取り返しのつかない過ちを犯してしまったのだろうか?
　取り返しのつかない事なら、なおのこと許してほしい。いくら謝ったって、起こってしまった事は、どうにもならないのだから。
　それでも私は、みじめな声で謝り続けている。
『ごめんなさい　ごめんなさい……』
　もういい加減、許して下さいよ……こんなにもみじめな声で、謝っているのだから……。
　私はゆっくりと、恐る恐る顔を上げた。
　出遭い頭の、ちょっとした不注意。満月の狂騒。

先刻、私が蹴落としたはずの、紅い瞳の幼い少女がにっこり笑いながら私を見下ろしていた。

「私を殺した責任、取ってもらおうかしら?」

◇　◇　◇　◇

「いやっはや災難だったねぇ（笑）」

慰めながら、彼女の顔からは悪笑が溢れている。

「私は巫女にやられた事があるんだけど、強い人ってみんな通りすがりの相手をフルボッコしていくのかな……かな……」

一方、小首を傾いで人差し指を唇にあてながら眉根を寄せる、金髪の少女は本気で心配そうに私を見てくれている。

「リグルが吸血鬼に遭った夜、私は亡霊に遭ったよ? そいつの従者だか何だかが、物干しざおみたいな刀持った物騒な奴でねぇ〜。しかも……」

自分の事となると途端に顔から笑みが消え、真面目に体験を語り出すミスティア・ローレライ。

そんな二人に、もう何日も白い布団のベッドにもぐりこんでいたリグルは囲まれていた。

「リグル、ほんとに大丈夫かな?」

そう言いながら、青あざと擦過傷で残念な事になっている顔面をさすってくれるのは、自分より人が心配できるルーミア。

「大丈夫だよ、私だって妖怪。この程度の傷なら、何日もせずに治るさ。」

「わふっ……」

心配そうに頬をなでてくれるルーミアの頭をわさわさと撫で返してやると、彼女は小さく『鳴き声』を上げた。

か、かわいくね?

「ちょっとー、鳴き声は私の専売特許なんですけどー。その辺が没個性になると本格的に食料キャラ以外のキャラ立ちが無くなるんだからー、勘弁してよー!」

と、両手を振り上げ口をとがらせる。最後まで自分の立場の心配に終始しぶーたれるのが夜雀。

それでも、そんな所が何時も明るく皆を盛り上げてくれる。

彼女は真に利己主義の塊なわけではない。面白おかしく場を茶化そうという目的から、キャラ作りや冗談の一環としてそういうひょうきんな部分を演じているのである。

それも、彼女とてその亡霊と従者に叩きのめされ、昨日まで病床に伏せっていたはずなのだ。事実、昨日まで見舞いに現れていたのはルーミアと、今日はいないがチルノ。みすちーは今日初めてここに訪れる。それに、彼女もまだ頬に絆創膏を貼ったままだ。

彼女の方が怪我が軽いか、治癒力が上だったのだろう。そして、自分が一足早く治るやいなや、こうして私という仲間の所にやってきてくれる。みすちーもまた、そういうやつだった。

今は、秋の暮にさしかかる頃。今からちょうど一週間ほど前だろうか。

何かの異変だったのだろうか、魔法の森には巫女や、普段滅多に姿を見せないような妖怪達がふらふら現れた夜があった。

少なくとも、それらと遭遇したリグルやミスティア、遭遇しなかったルーミアもまた、その異変の不穏な気配を感じ取る事は出来なかった。

ただ、偶然その夜だけ少し気分が高揚し、偶然その夜だけ少し調子に乗ってしまっただけだったのだ。

その結果が、今のリグルの惨状である。

全身数か所の切り傷に擦り傷、左手は白い布で肩に釣られ、左目に青あざ、右頬には森に落下した時に出来た擦り傷の、一際酷いものがある。

「私が遭った吸血鬼の従者も無茶苦茶だったよ。服がスパスパ切れるし。何なのあのナイフの数。」

弾幕ごっこだと言うのに、手加減できていないのではないかあの吸血鬼と従者は。

ちょうど一年弱ほど前になる。

私がこの幻想郷に来たのは。
切る様に冷たく、しかしかつていた世界では味わえなかった澄んだ空気。
自宅の戸を開ければ、一面の緑。せわしない人間の雑踏も、喧騒も無い。この朝の風景も空気も、私の一人占めだ。
空気が毒ではない事を、この幻想郷に来て初めて知った。

「りぐる〜おっはよ〜ぅ！」
朝の爽やかさそのままの、快活な挨拶。
主人を見つけた犬がしっぽを振るみたいに、上機嫌にぶんぶん腕を振って挨拶してくれる彼女は、ルーミア。
宵闇の妖怪。この幻想郷に来て、始めてであった妖怪の仲間だ。
「いつもはやいね、たまにはのんびり寝坊したっていいのに。」
「寝坊したら、リグルを待たせちゃうよ。」
私も、笑顔には笑顔で返す。ただし、私のそれはちょっぴりの意地悪。
「そんときゃ置いてく。きりきり置いてく。」
「ど、どうして冷たいんだろ……？　いっつも待っててあげてるのに……。」
ルーミアは、眉根を寄せて利き手の人差し指を唇にあて、小首を傾げてちょっぴり困った表情をする。この子は、言葉一つに一々一喜一憂してくれる、楽しい子なのだ。
「……嘘。ちゃんと待ってるよ。ルーミアが来てくれるまで、ずーっとまってる。いつまでもまってるよ。」
「……わわ、わ……ず、ずーっと……。」
ルーミアは、一転顔を真っ赤にして頭から湯気を上げている。
女の私から見ても、からかい甲斐のある可愛らしい子だ。外の世界ならずとも、こんな子は珍しいだろう。
「それより、はやく行こう？　みすちーを待たせるときっとうっさいよ。」
「わぅ、そ、そうだね。」

「お、来た来た。遅いよ二人とも〜！」
「いつも遅いのは君でしょみすちー！」
手を振って挨拶するこちらに手を振り返すのはミスティア・ローレライ。
ルーミアの可愛らしさとは逆の、マイペースタイプだ。
「それでさ、幻想郷のゲームってのは、どんなものなの？」
そう、今日は、ここ幻想郷で知らないもの無しとまで言われるゲームを、私は教えてもらう予定だったのだ。
「ンフフ……リグルさえよければすぐ教えたげる。でも、私のレベルは高いよ？」
「わぁ、今度からはリグルも仲間に加わるのかな？」
きらきらと瞳を輝かせ、喜びを零れさせるルーミアの様子から、彼女もすでにその遊びには堪能らしい。
これだけしたしそうな会話だが、この当時私は幻想郷に来てから一月ほどしかたっていない。新参の私がこの新しい世界に溶け込めるよう、彼女達が気を遣ってくれていることは疑いようもなかった。
だから私も、これ以上気を遣わせないよう、早く溶け込む努力をしなければならない。彼女達が積極的に働き掛ける努力をしてくれる分、自分も少々馴れ馴れしいかと思うぐらいの方が、きっとふさわしいに違いない。

「さてと、本日は命名決闘のルールに則り、リグル君を我らの最も美しく無駄なゲームへとご招待したいのだが、いかがだろうか！」
妙に仰々しく、みすちーが右手を掲げて一同に宣言した。
「私は異議なしだよ。」
「ふっふっふ、昆虫風情にあたいの相手が務まるかな……？」
泉のほとりでもう一人仲間に加わったのは、妖精チルノ。冷気をあやつる力は妖精にしては破格らしいが、いかんせん頭が足りていない臭いがぷんぷんする。
「何々なんなの？　これはいったい何が始まるのよ！」
私の頭脳は、事態の展開の急な事に付いて

いけず、ひとまずみすちーに議事進行の凍結と説明責任を果たす事を要求した。

「わが幻想郷ではだね、複雑化する人妖間の力関係を是正するため、決闘毎に提案される様々な条件下、時には定置弾、時には気合い避けを如何にして……」

「私は弱いから、あんまり苛めないでほしいな……。」

「ふふん、ルーミアは甘ちゃんね！　じゃくしゃひつめつが世のことわりよ！！」

「……つまり？」

「そう、つまり幻想郷に於いての意志決定は、いまやこのスペルカードルールによる命名決闘で行われるのである！」

結局、一文で説明できる事にこの夜雀は長々と枕詞を並べていたわけであった。

リグルはこの制度が作られた時のルールブックの写しを渡され、この命名決闘の趣旨と取り決めに付いての説明を受けたのであった。

スペルカードとは、お互いに得意技を見せあい、その美しさを競う決闘ルールである。体力に任せて攻撃を繰り返してはいけない。完全実力主義の否定。ふむふむ……。

勝っても人間を殺さない。不慮の事故は覚悟しておく事。……意外と物騒な事も書いてある。

「というわけで、私たちも日々研鑽と自己鍛錬を続けているわけだよ！　……遊びとはいえ、力と力のぶつかり合い。本気の勝負。気の抜けた事をしてると取り返しのつかない事になるかもよ？」

そんなこんなで、私もこの命名決闘とやらに巻き込まれていくのである。

「ちょ、ちょ、こんなのどうやってよけるのさーー！！」

「はっはっは、ちょこまか動いた所で、私の弾はかわせないよ！」

「リグル！　慌てて動かずによく見て、無理に見える弾幕にも、なにかパターンが有るはずだよ！」

ルーミアの声援に、一瞬思考が冷えた。

待てリグル。

空間上にばらまかれた弾全てを避ける必要はないじゃないか。隙間があるなら、最小限の動きで直撃弾だけをかわせばいい。弾をよく見て、軌道を読むんだ。よし、

「ん、これを避けるか。」

「みすちー、今の弾幕……縦のラインで動きを制限してる『定置弾』以外は、全部『私を狙う弾』でしょ？　迫る弾の塊に追われて下手に動きまわれば、目の前が弾だらけになってしまう。でも、全弾私を狙って飛ぶ事がわかっているなら、直撃する瞬間少しずつ身をかわせばいいだけの事。そして、定置弾をよく観察し、追い詰められる前に一瞬大きく動いてたまに隙間を作り、そこを通って『切り返す』……ッ！！　初心者だと思って、随分おちょくってくれたね？」

「チッ、リグルがこう早くこの弾幕の世界に入門してくるとは……でもその程度でこのみすちーを暗殺することは出来……あぶな、あぃったあぁ！？」

思わぬ直撃弾に、余裕綽々だったみすちーも、ギャラリーの二人も驚愕する。

「あ、みすちーが直撃貰うなんて珍しいね。ただの誘導弾じゃないの？」

「ち、違う、今のは……！」

「雀も動かずば撃たれまい……さんざ無駄に逃げ回らせてくれたお返しだよ。」

「自機外し？　昆虫風情が、味な真似するじゃん！」

「わぁ、リグル大健闘だよ！」

……結局、この日私が取れたのはこの一本だけだった。

フルボッコの敗北感はあったが、その痛みがむしろすがすがしいぐらいだった。

外の世界では、決して味わえなかった激しい感覚。こんなにも笑顔を零れさせながら汗を流す事が、あの世界で一度でもあっただろうか。弾を撃ち合えば、傷付け合うことだってあるだろう。仲間同士なのに。だが、それでいいのかもしれない。傷付け合わない様に注意して注意して生きる関係。安心して傷付け合える関係。本当の仲間の信頼関係とはどちらの事を言うのか。気付けた気がした。

そしていつか、みすちーに勝ちたい。

『いつか』という未来に思いを馳せる言葉

を、こんなに光り輝く物として思い描いたのは、始めてだったかもしれない。

「さ、て、弾幕ごっこに負けたリグルには、罰ゲームだねぇ……。」

みすちーのその一言を合図に、爽やかな勝負の余韻で真っ白に燃え尽きていた私は、ガシッと左右から両腕両肩を極められ我に返った。え、ちょ、力強！マジで身動きできないんですけど。あと、チルノ冷たい。

「ちょ、ちょっと？罰ゲームって何する気！？」

狼狽し、つまれた虫の様に手足をじたばたする私に、捕食者の目で舌舐めずりしながらにじり寄るみすちー。

右手はポケットから何かを取りだそうとしているが……まさか……え……ちょ……まっ？

「んっふっふ、んじゃいくよ～覚悟しな～うひひひひ！」

「待って、よして、話せばわかっ！ひゃめてえええぇぇぇぇぇぇぇぇぇ………。」

私の悲痛な断末魔が、夜の湖面を僅かに揺らした。

日は変わり、ここは私たちの住む森の散歩道。４人仲良くお散歩タイムというわけだ。

談笑する私の顔の皮膚は、空気に撫でられるたびにひりひりする。

昨日は帰宅直後に心地よい疲れでそのままベッドに倒れ伏し、いつも以上にさわやかな目覚めと同時に、急ぎ顔面の落書きを消去する作業に移らねばならなかったからだ。

しかも、顔面を真っ黒に染めたペンのインクは、水でぬらしても、布でこすっても、一向取れる気配が無い。三人して、ポケットから油性とは恐れ入った。いつか勝って、三人にも同じペンで落書きしてやる。

そんなわけで、私のデリケートな顔面は赤くこすれ気味なのである。

今日は、昨日の熾烈な決闘とは一転、のんびり幻想郷を案内してもらった。

聴くと、４人の中では一番頭の足りなそうなチルノが一番長生きらしいのだが、掘り下げられる記憶がもっとも浅いのも彼女なのだから世話はない。

幻想郷は、その中心に人間の里こそある物の、近代化とは程遠い田舎村だった。コンクリートの姿は少なく、あちこちに茅葺き藁葺き瓦葺きの日本家屋が建ち並ぶ。

他にあるのは、その周辺の畑と、森と山と川と湖と。外の世界の平地の殆どを埋め尽くしつつある、人工物は殆どない。のどかな世界だった。

全てがのんびりしていて、誰も物ごとを急かさない。

前の住処では、こうして散歩に誘ってくれる友人などいなかった。

治水の名の元に、川は手当たり次第にコンクリートで固められ、さしずめ『大きな水路』といった塩梅だ。私たち、蛍の住む場所などありはしない。

工事の為所を、どういうわけか川を覆う事から覆いを剥がす事に切り替えたらしい。何か人間側の特別な事情か、単に川を全部覆いつくしてしまい、剥がす以外にやることが無くなってしまったからかもしれない。

だが、私たち蛍は人間に好かれる虫らしく、これでも愛されていた方らしい。かねてより優先的に住処を保証され、恋の季節には夜の川を人ごみがにぎわした。

それでも、人間の愛情とは勝手だ。

大きな車で乗り付けては、自分の周りに蛍を集めようと車のヘッドランプをちかちかやる。夜に、私たちよりはるかに強い光でアレをやられると、私たちはみんな頭がまいってしまうのだ。

夜が更ければ多くは立ち去るが、彼らが出したゴミはそのまま川に浮かんでいる。

更には、蛍が居なくなったり少なくなった川に、他所から蛍を持ちこんで増やしたり、定着させて蛍で人を呼び、金儲けをしようという具合だ。

私たち蛍は、ある川で生まれた者はその川から出ていく事はない。その川で育ち、その川で一生を終える。

いきなり他の川や、同じ川であっても遥か上流や下流。そんな異郷の地へ行っても、同種とはいえ長年全く隔絶されていた者たち

だ。生活の仕方や光り方まで何もかもが違う。放り込まれた私たちは、原住民たちにとっては得体の知れぬ他所者だ。挙句、北の海を渡って蛍なんていない島にまで連れて行かれた者達もいるらしい。その川で平和に生活している他の者たちにとって、それは異形の侵略者でしかない。

　結果、人間とも仲良く出来ず、周りとも仲良く出来ず。

　殺伐とした、灰色の日々。

　水も空気も、年々変な味がする様になった。妖怪となってからも、仲間なんていない。安住の地なんてない。自分の居場所なんて、感じられなかった。

　毛色の違う土地に足を踏み入れるたび、ここは何というところで、どういう性質の場所だ。甲斐甲斐しく、身振り手振りを交えて説明を加えてくれるルーミアやみすちー、チルノ。

　未だ幻想郷に完全に溶け込めずにいる私への、彼女らの気遣いを一身に受け、私はとても温かく嬉しかった。

　案内されるままに魔法の森（私たちの住む森は、そう言う地名らしい）の細い道を進むと、突然森の中に一気に視界が開けた。

　そこには、粗大ごみの山がぶちまけられていた。

　外の世界で見た山腹の工事現場や、不法投棄の現場とも少し違う。もう少しこぎれいにまとまった感じはしたが、ゴミの山には違いなかった。

「うふふ、今日は何か面白いものがあるかな……かな？」

　両手を合わせ、声を上ずらせるルーミアには、もうそのゴミ山しか映っていないらしかった。

「ルーミアったらね、ここに散らばされてるわけのわかんない物の山が好きなんだってさ。こればっかりは私やチルノにもわかんない。なーんかみょうちきりんなもんを掘り出しては……」

「ねーねー見て見てー、これか～わいいよぉ～！」

　既に視界の一段奥から飛んでくるルーミアの声。巨大な道路標識を片手でぶんぶん振り回している。その足元には、折れたり曲がったり日に焼けた標識がいくつも折り重なっているようだった。

　確かに、大物から小物まで様々な品物が乱雑に放置してあるこの地帯は一見ゴミ山。しかし、個別に見ていくと、たまにインスピレーションを否定できない斬新な形状の物体や、まんまデザインが奇抜すぎて売れなかったとみられるおもちゃ、なんかのマイナー団体のマスコットの様なものが転がっているのだ。

「リグルはもしかして、外の世界から流れ込んでるこのゴミ山、知ってる物があったりして。なんか面白いもの探してプレゼントしてあげたら？　喜ぶと思うよ？　おーーぃ、ちょっとまちなよぉ……」

そう言い残し、ルーミアを追いかけて遠ざかって行くミスティアとチルノ。

　ルーミアは、もう視界にずいぶん小さくなっている。

　リグルは、足元に転がった真っ黒なオオゴキブリの玩具を拾い上げた。オオゴキブリは、森林にすむ人の親指大の大きなゴキブリ。こうして森の中にあると、本物と見分けがつかないほど精巧な出来だが、軟質プラスティックかゴムみたいなもので出来ていて、動き出す事はない。人間はすごい。売れるわけがないが。

　静かな森。遠くに友の声。

　秋の、そして夕暮れ時の訪れを告げる虫の声が、ゆっくりと空気を冷やしていく。

　狭い幻想郷とはいえ、昼間中飛び回った疲れが、一人残された事と合わせ、ちょっとした眠気を誘うのがわかった。

　その時、突然背後に砂利を踏む音と誰かの気配を感じ、私は驚いて振り返った。

「おぉっと、驚いたぜ。」

「……それはこっちのセリフだよ。のんびり夕凪を楽しんでる所を振り返ったら、見知らぬ……人間？」

「悪い悪い、驚かすつもりはなかったんだ。お前は魔法の森の妖怪か？」

　何の妖怪かでなく『妖怪か？』と聞く所を見ると、彼女は『何の妖怪か』ではなく『妖怪か』どうかが重要なステイタスの存在。即ち人間であることが私にも分かった。

「私は霧雨魔理沙。普通の魔法使いさ。魔法の森に住んでるんだぜ？ ここはなかなかおもしろくてな。色々な生き物を観察するのに飽きないぜ？」

「……私は勝手に観察されるのは好きじゃない。」

ちょうど殺伐とした思い出巡りをしていた事もあり、私は彼女の不躾な登場の仕方を意地悪く責めてしまった。

「悪い悪い、メインはキノコ採集でね、断ったためしがないぜ。」

「……私はキノコ並みって事？」

「いやいや、夕暮れにたそがれる見慣れない少女が、あまりにも絵になってたもんでな。自然の機微って言うか、私が一声かける事で水鏡が壊れてしまうのが、怖かったんだぜ。」

……人間は本当に上手い。程よくおだてられ、驚かされた事への腹立たしさは、すっかり引っ込んでしまった。

話の歯車はかみ合わないが、悪い奴じゃないらしい。聴かれもしない話をぺらぺらと続けている馴れ馴れしさには少々閉口したが。

ルーミア達が早く戻ってこない物かと、私は人間の登場に気付いていない仲間たちの方をちらと見やった。

「ん、連れがいたのか。あいつら、あんなとこで何してるんだ？」

「さぁ、昔殺して埋めたバラバラ死体の確認でもしてるんじゃない？」

あのみすちーとかならやりかねん。妖怪だし。

「……え？」

おっと、つい昼間からの仲間達とのふざけたノリで物騒な事を口走ってしまった。相手は人間なのだ。

冗談冗談と取り繕おうと振り向いた時、人間はさっきまで浮かべていた勝気そうな笑みをすっかり失い、ゴミ山に遠い目を向けていた……。

「嫌な事件だったな。あー……腕が一本、まだ見つかってないんだろ？」

「え……？」

今度は、私が人間に聞き返す番だった。

この人間は今なんて……

そう、頭を整理しようとした時、背中を強く叩かれた。

「どーしたの少年、黄昏ちゃって！」

ふっと振り向きあたりを見回すと、妖怪の増加に恐れをなしたか、人間の姿は上空はるか遠くにあった。人間も、飛べるのか……。

「少年じゃないし。私は女です、メ！ス！」

「ククク、少年は性別のある名詞じゃないんだじぇ、学びたまえ少年。」

チィ、この雀は一々腹の立つ……、チルノまで『しょーねんしょーねん』と真似してはしゃぎ出す。

「リグル……やっぱりここは、つまんなかった？」

得意の、眉根を寄せて人差し指を唇にあてる困り顔。傾いだ首に上目づかいで見上げてくるルーミア。自分のゴミあさりで置いてけぼりにして、私を不機嫌にしてしまったと勘違いしたらしい。

「んなことは無いみたいだよ？ ほら。」

そう、長い爪で指さしたみすちーの指先には私の手、の上のゴキブリの人形。

「わ……か、かぁいい〜〜☆」

「う、ま、まさか、ルーミアのびてきせんすに合致する妖怪があらわれようとは……あたいびっくりっ！」

チルノがズザッと後ずさりして、オーバーリアクションで驚きを表現した。

失礼な。かわいいのにゴキブリ。

そんな私の言葉に、三人三色の笑いが起こる。釣られて私も笑う。

夕日に焼ける秋の空に、笑い声が高くこだました。

夕闇が空を、幻想郷を覆う頃、ミスティア・チルノと別れ、私はルーミアと二人、帰途についていた。

あの人間がいない今、あれは何かの聞き間違いだったようにも感じられる。

だが、確かに言った。

『嫌な事件だったな。あー……腕が一本、まだ見つかってないんだろ？』

それが何を意味しているにせよ、物騒な想像を掻き立てられずには居られなかった。
「ねぇルーミア、ここって昔さ……なんかあったの？」
「外の世界の要らない物とか忘れられた物が流れ込んでくるんだって。詳しく知らないけど、……わぅ……。」
ルーミアは、さっき見つけてあげたゴキブリの人形の事で頭がいっぱいらしく、夢見心地でふわふわした足取りのまま答えてくれた。
そういえば、みすちーも同じ様な事を言ってたっけ。
「あそこでさ……、何か起こんなかったの？ 例えば……事故とか？」
「知らない。」

いやにはっきりとした声だった。
それは返答というよりも、拒否に近い響きを含んでいるように聞こえた。
それは、私が知る普段のルーミアからは一度も聞いた事のない様な、林とした声だった。
しばらくの間、私は絶句してしまった。ルーミアはそれを感じ取ったのか、すぐに表情を柔らかくしてくれた。
「うん、ホントに、私もよく知らないの。……ごめんね☆」
そう笑いながら、ぺろっと舌を出す。その仕草は、私のよく知る普段のルーミアだった。
……だが、さっきの短い言葉には、はっきりとした意思が含まれていた。
……よく知らないし、話題にもしたくない。そういう含みが、はっきり感じられた。
考えて見れば当然か。腕が一本見つからない様な何かなんて、楽しい話題のわけがない。彼女はこの地に慣れない私をおびえさせたくない、好意でこの話題を拒否した可能性もある。そうさ……腕が一本、いまだに見つからない様な何かなんて。
……腕が一本、未だに見つからない様な、何か。
何だと言うんだろう。この温かで楽しい幻想郷で、何かって……何だ？
心の中で問いかけても、応えてくれる誰かはいない。
さっきから、ずっと聞こえてくる虫たちの声。
ここで、何かがあった。

虫たちだけが知っている様な気がした。

◇◇◇◇

時は現在に戻る。
幻想郷の、爽やかな朝。
今日の私は、腕をつっていた布を外し、頬の傷をさすった。治りかけている。
これでも私は妖怪。傷の治りは早いのだ。
今日は、傷も癒えるだろうと見込んでルーミア達と約束をしてある。
数日前まで自由が利かなかった腕をぐるぐるっと回し、若干の違和感を覚えながらもほぼ全快した事を確認した。
「よしっ！」
白い軍手をはめ、今日はゴミの山へ宝探し。ルーミアと、みすちーと、チルノと。寒い冬も、暖かい春も、熱い夏も、涼しい秋も、この一年間ずっと変わらない。幸せな世界。
扉を開け、今日も朝の冷たい空気が、寝起きで火照った喉を心地よく冷やす。
そんな冷えた頭で、今日一日起こるべき事を想像した。
『りぐる～おっはよ～ぅ！』
毎日変わらない、腕を振り回して私を呼ぶだろうルーミアの笑顔。
『お、来た来た。遅いよ二人とも～！』
『いつも遅いのは君でしょみすちー！』
手を振って挨拶するこちらに手を振り返してくれるのは、みすちー。
たまに私たちより早く来る、男勝りな私たちのリーダーみすちー。
騒がしくせわしないチルノも加え、ゴミ山へ。
変わらない、変わらない世界が、これからずっと続いていくように思えた。

皆と待ち合わせているゴミ山への林道を抜けていくと、森の茂みをガサガサ漁る人影に出くわした。
あ、この人は……
「お、久しぶりだな。」
霧雨魔理沙。
魔法の森に住んでいる、人間だ。
同じ魔法の森に住む者同士、私も一年前の出逢い以来数度顔を合わせていた。
そういえば、キノコを採るのが専門だって言ってたっけ。いいキノコは見つかったのだろうか。
まさか、夕焼けにたそがれる少女ばかりハンティングしているわけでもあるまい。
「リグルだっけか、どうだい調子は。」
「そっちこそ、いいキノコは取れた?」
無礼な勘繰りは頭から追い出し、無難な挨拶を返した。
「……ひょっとして、ルーミア達とあのゴミ山で待ち合わせか?」
「え、うん、まぁそんなとこだけど……。」
「んんん……実はなぁ……」
ミスティア以上に尊大な性質の魔理沙が、なにかそわそわとした様子で声をひそめる。どうしたと言うのだろうか。
「いや実は、さっきルーミアとすれ違ったんだが……まともじゃないぜ。わぅ～ってこの世の物とは思えん唸り声を上げてニヤニヤ笑いながら、ぎらぎら光るむき身のでっかい斧を持ってたんだ！危険を感じて咄嗟に身を隠したが、ありゃ弾幕ごっこって気配じゃない。お前、もしあいつに呼ばれてるなら注意した方がいいんじゃないかと思ってな。あそこ、妖怪もあんま近づかないし……喰われるぞ？季節の変わり目だし、急に気が変になることもある。霊夢でも呼んだほうがいいんじゃないかぁ？」
確かに、むき身の斧を持って徘徊する妖怪というのはいかにもヤバい。
ことポーズ上妖怪は敵の人間である、魔理沙の反応は極めて正常だ。
しかし、私はその事情を知っている。彼女は、ゴミ山に埋もれている大型の宝物を発見し、それを発掘する為に今日私たちという人手と、その得物を必要としているのだ。
だが、彼女の異常なセンスと行動を理解するのは一般人には難しいだろう。適当にけむに巻いておく事にした。
「いーのいーの、また犠牲者を探して徘徊してるだけだよ。魔理沙さんがここで喰われたら多分犯人は彼女だね。せいぜい、退治しようなんて思わない事だね。」
意地悪くニヤッと笑ってやって、私はさっさとルーミア達の待つゴミ山へと向かった。
しかし、少し歩きかけたところで不意に魔理沙の声が追いかけてきた。
「そりゃ、警告のつもりか?」
……え？別にそんなマジな話じゃなくて……。そう弁解しようとしたが、
「……せいぜい気をつけるぜ。はは、ありがとな。」
それだけ言い残すと、魔理沙は踵を返し、去って行ってしまった。
……なぜだろう、どうしてだか分らなかったが、彼女を不愉快にさせてしまった事だけはわかった。
「りぐる～おっはよ～ぅ！」
ルーミアは、私を予想通りの大はしゃぎで迎えてくれた。
「お、来た来た。遅いよリグル～！」
「いつも遅いのは君でしょみすちー！病み上がりを少しはいたわってよ～。」
たまに早く来た時のみすちーの口上も、普段と変わらない。
しかし確かに、魔理沙の言うのもわかる。大斧をぶんぶん振り回しながらはしゃぐのは、確かにヤバい。
しかし、この狭い幻想郷。人間である魔理沙はともかく、妖怪たちには案外、このルーミアの奇癖も知れた事なのかもしれない。
「そんなことより、あたいは早くルーミアのお宝掘り出したいっ！」
チルノは、仕事を与えられて喜ぶ子どものように、梃子にでも使うのだろう鉄パイプを手に飛び跳ねている。傍から見れば撲殺集団だ。
「はいはーい、私は一生埋まってればいいい

と思いまーす。ぶーぶー！」
　みすちーは一人テンション低く口をとがらせている。
　何せ掘り出そうと言うのは、外の世界でフライドチキンを売っているチェーン店の、髭を蓄えた恰幅のいい老紳士の姿をした等身大マスコット人形なのだ。初めてこれを見つけた時私がそれを教えてやると、みすちーは大層憤慨した様子だった。
　しかし、本気で掘り出したくないのだったら今日ここに私より早く来るはずもない。
　なんだかんだで、みんな楽しいのだ。こうして仲間とはしゃぎ合い、汗を流す事。
「ふー、思ったより重労働だーこれは。」
「う～、秋なのにあたい溶けそう……」
　実はこの等身大人形、発見時も既に埋もれていたが、私とみすちーの負傷でしばし掘り出しが凍結されていたのだ。
　その間に、さらに流れ込んだらしい大量のゴミに、ますます深く人形は埋もれてしまっていた。
　私はそれを申し訳なく思っていたが、それをわざわざ口に出すのが野暮だというのは、この一年皆と付き合ってきて、とっくにわかっている事だ。
　そんな、口にした所で社交辞令以下にしかならない非建設的な言葉より、今は行動で応えるべきだ。しかし、かなり掘り進んだが流石に疲れた。
「よし、いったん休憩！」
　みすちーの一声に一同、『ふー』とか『はー』とか、は行の感嘆詞を漏らしながらその場に腰を下ろす。
　秋も半ばだが、ここはゴミ山の天辺。流石に日差しがきつい。各人力仕事で火照った体を冷ます為、最寄りの日差しを避けられる場所へと自然に散った。
　私も、一つのゴミ山の裏に回り、突起物の無い部分を見つけて腰をおろし、背を落ち着けた。
「ふーーっ。」
　影を背に一息ついたが、そこはゴミ山。かつてこの地に来る前に自分がすっていた空気を思い出させるような、ほんのり酸っぱい味の呼吸に、私は少し気分を悪くした。
「？」
　何気なく、本当に何気なく視線を落とした先には、沢山の大きな紙束。灰色の、ビニールひもで纏められた薄っぺらい紙の、束。
　古新聞紙だ。こちらの世界にも多くばらまかれているとは聞いていたし、自分が目を通した事もあった。自分が見た物は、見世物的なゴシップ記事や、商売・運動・出来事の紹介文といった物が主だった。
　……ならば、
　唐突に思いだした一年前の魔理沙の言葉。
　あるのではないか？
　かつて魔理沙の言った、『右腕が一本未だに見つからない何か』等という、いかにも大衆やゴシップ記者が興味を示しそうな、センセーショナルな事件の記事が。
　私は、仲間たちの気配、喋り声が未だ遠くにある事を確認し、その紙束へと向かい、手を伸ばした。
　手早く梱包を解き、日付欄をざらざらとチェックする。しめた、今より数か月前から、日付順に並んでいる。やや紙は痛んでいるが、雨にやられて読めない事もない。
　魔理沙は人間だ。そう長生きしてきた思い出でもないだろう。口ぶりも、遥か数十年前という感じではなかった。ほんの、ここ４～５年、いや、２～３年の出来事のような……。
　そんな思考を巡らせながら、手早く一面記事の見出しだけを確認していく。
　ない。次。ない。次。
　事件がいつのことか正確にわからないのが痛手だった。
　時折思い出しては顔を上げ、仲間たちの気配の変化を確認した。
　こんな物をあさくって、みすちーあたりに変な勘繰りをされてはたまらない。
　私はそう自分に言い訳したが、実際はそれだけではない。
　ルーミアは、知らないと言った。
　だが、魔理沙が嘘をついていない限り何か物騒な事が有ったのだ。ここで。
　あのルーミアが、好意で隠してくれているのかもしれない事を、わざわざ暴こうとして

いる事。
自分に言い訳を強要する様な、腹の底から湧きあがる焦りに似た不快な気持ちの正体は、自分を気遣う仲間への背徳感だ。
載っていなければ、載っていなければ、人間はうそつきだ。そう自分を納得させられる。
そんな、客観的に見れば現実逃避でしかない、好奇心という強烈な衝動に対してあまりに無力な防衛線を言い訳に、私は新聞を……

『ゴミ不法投棄現場に男性遺体！　リンチ・バラバラ殺人！！』

……あった……？

ページがカビたりゴワゴワとしわくちゃになっていたり、文字が小さかったりですぐには内容を読めない。それに、みすちーが休憩と言ってからかなり時間がたっている。いつ集合がかかってもおかしくない。
取り急ぎ、その号の最終面と前後する新聞の一面を確認する。
『ゴミ山での凶行、リンチ・バラバラ殺人か』
同心円状の模様で目が騙される背景に、白抜き文字の大きな見出し。
……やっぱり、あったのだ。
『鉈や鶴嘴や斧で滅多打ち。殺害後遺体を分割か』
記事中の小見出しだけが、流し読みで頭に入ってくる。
こののどかな幻想郷にあまりにも似合わぬ光景を、その文字列は鮮烈にかきたてる。
鉈、つるはし、斧……？　そんなもので、一人を……その先を連続的に想像してしまうのを防ぐのに、私は次なる小見出しを探して視線を紙面に這わせなくてはならなかった
『主犯格？バラバラ指示男、遺体の右腕と共に未だ逃走』
右腕……未だ逃走……右腕……？
その時、人影は、肉厚の斧を携えて私の後ろに立ちはだかった。
その人影は私を見下ろし、その斧をすぅっと振り上げて……、
「ぅ、わあぁぁあぁぁあぁぁあっ！？」
「ひゃぅっ、ご、ごめんリグル、驚いたかな……？」
人影、ルーミアもまた、私の奇声に驚き、手に持った斧をどさっと地面に落とした。
「あ……ほら、みすちーがもう集合だって。あの、人形の上に、おっきな木の棒が重なっちゃってて。これ役に立つかな、って思って……！」
ルーミアは、慌てて弁解と謝罪の言葉を並べた。
彼女の性質かもしれないが、それ以上に私の見せた表情が並みの物ではなかったのだろう。
「あ、ご……ごめん。ちょっとオーバーに驚きすぎちゃった。」
「う、うぅん、こ、こっちこそごめんね。おどかしちゃって……。」
その木の棒とやらは厄介そうだ。秋の日は釣瓶落とし。もたもたしていると日が傾いてしまう。
「よし、そいつでその棒とやらをどけちゃおう。そうすれば人形までもうすぐだ。」
「……うん。」
ルーミアはまだしょぼくれている。私を驚かしてしまった事で、ずいぶん自責してしまっているようだった。
「どうしたの！もうすぐ人形ほりだせるんだよ！？」
「そ、そうだよね。あはは、早く掘り出せたらいっいなぁ～☆」
互いに、これ以上謝り合う事の不毛さを十分わかっていた。
私は努めて明るく振舞い、ルーミアの背中をバンっと心持強く叩く。
ルーミアも、それに応えていつもの調子に戻ってくれた。
咄嗟に破り取ってズボンの後ろポケットを膨らます紙片の束が、今はとても後ろめたかった。

ルーミアと二人、ゴミ山の陰から顔を出すと、そこには先程も見た黒装束の人間と、そいつにむかって手をバタバタとバンザイのポーズで振り回す、チルノとみすちーの姿が有った。

「だーかーら、あんたのそれじゃぁ絶っっっっ対人形も一緒に吹っ飛ばすって!!!」「そーだよ、あたいてんさいだからわかるよっ!!!」

「なーに案ずるでない皆の衆、全てはこの魔理沙さんに……」

「なーに、どうしたの二人とも。」

聞くところによれば、この人間の持つ道具は凄まじい火力の魔砲が放てるらしい。それでこのゴミ山をふっ飛ばし、人形を救出しようと言うのだ。そして、それが例に漏れず手加減知らずの一撃らしく……。

「待って、待ってよ。ルーミア斧かして。私が何とかするから。」

そう名乗り出て割って入り、私はルーミアから斧を受け取った。

「おぉう妖怪め、そいつをまさか私に振るつもりではあるまいなっ!?」

いかにも軽口、というオーバーリアクションをとる魔理沙だったが、私はその言葉にドキッとさせられる。新聞束を漁った事を、今更後悔した。

「んなわけないでしょ。こう見えても、私だってパワーあるんだから。」

昆虫は、サイズ比を合わせれば人間や鳥などに比べればはるかに出せる力が上だ。驚くほどという訳ではないが、私もそれなりに自信はある。

「よっ、漢だねぇリグルっ!」

みすちーが毎度ながら茶々を入れてくれる。もう髪伸ばそうかしら。いや、それをしたら負けな気がする。言い返しても負けな気がしたので、私は4人に見守られ、ゴミ山に登った。

なるほど、私が新聞にかまけている間に更に作業が進んだらしく、大きな木の梁が1本人形の上に露出していた。

「よし、いくよ!」

斧を肩に担ぎ、振り下ろす。

バシャッ!っと威勢のいい音がして、斧が梁に食い込んだ。梁に足をかけ、ぐっと刃を引き抜く。そして、又振り上げて……

後ろから、しかし、魔理沙とリグルはもう知り合いだったのか。という様な内容の会話が流れてくる。それを聞く限り、仲間たちは既に魔理沙と旧知らしい。今朝も、魔理沙はルーミアの名を知っていたし。そんな話をほどほどに頭に入れつつ、集中し、力を入れて、汗を散らし、無心に斧を振るった。

一度振り下ろすごとに、先ほどの紙面の印象を振り払おうとした。

しかし、振るえば振るう程、何度も刃を打ちつけられた梁が裂け、無残な刃の痕を見せるにつれ、私の脳裏にはあの物騒な新聞の文言が甦って来た。

これは、頑丈な梁だ。しかし、生き物に対して、こんな無慈悲な刃を振り下ろしたなら、腕は折れ、頭なら一撃で割れてしまうかもしれない。

梁の下のゴミから半身の覗く人形。それに斧を振り下ろす自分の姿が、何故か不吉な光景とオーバーラップするように感じられた……。

ゲシャ!

不意に、これまでと違う手ごたえ。最後の一撃が、とうとう梁を叩き折ったのだ。しかし、最後の一撃は梁を折っただけでなく、その下の人形の肩も打ち砕いていた。

体より一足先に自由を得た腕が、梁の隙間を抜け、ごろんとわたしの足もとに転がった。

「ぁ、」

「ど、どうしたの?大丈夫?」

ルーミアの、心配そうな声が飛ぶ。

「ご、ごめん。人形の腕、壊しちゃった……。」

恥ずかしながら、私は素直に事実を告げ、謝罪した。重い刃物を叩きつける際、物は最後『切れる』のではなく、『折れる』。私は、まだ対象に太さが有ると油断した、自分の浅はかさを呪った。

「な、なぁんだ。リグルがまた怪我したか

と思っちゃったよぉ。」
　ルーミアは、人形の安否よりもむしろ私が何か怪我でもしたかと心配したらしい。そうでないとわかり、安堵のため息を漏らすのだった。
「修理するから大丈夫だよ。適当にくっつけて、上から服着せちゃうから、どうせ中は全然分かんないんだよ。」
「そ、そっか。」
「そそ、そこの魔砲でぶっ飛ばされるよりはるかに幸いさ！」
「じゃあ、ひっぱりだそう！あたい手伝うよ！」
　身軽なチルノが、失礼な。と口をとがらせる魔理沙を置いてぴょんぴょんとゴミ山に登ってくる。
「まだだね。もうちょっとゴミをどけないと、まだ半分ぐらい埋まってる。」
『……腕が一本、まだ見つかってないんだろ？』
　チルノと一緒に、小間物大物、人形を捉えて離さないゴミ達を取り除きながら、ふと視線を後方に移した。
　私たちの作業の終わりを待つ三人を背景に、ごろりところがった腕が、やけに不吉に思えた。

「わぁい、ＫＦＣ君人形！やっぱりかわいぃ☆」
　ＫＦＣ君人形と略称で呼ばれた薄汚れた初老の半裸人形に、ルーミアは嬉しそうに頬ずりしている。何だろうこの犯罪臭は。
　しかし、久々に筋肉を酷使して腕に痛みはあるが、彼女の嬉しそうな顔だけで報われる気がした。
「んじゃ、とりあえずルーミアの家まで運ぼうか。魔理沙は？」
「私も行く道がこっちだぜ。」
　運ぶと言っても、大きな人形を妖怪の力で持ち運ぶには二人で事足りる。
　私とみすちーが本体を支え、その横にはルーミアが斧を持ちながらうわごとのようにＫＦＣ人形に話しかけ、最後尾は折れた右腕をぶんぶん振りながら、チルノをおちょくりつつついてくる魔理沙。
　右腕、事件、リンチ、斧。
『そりゃ、警告のつもりか？』
　ちょっとした冗談のつもりだったのに、かみ合わない返事を返した魔理沙。
　今こうして笑い合う中でも、何かが釈然としない。
　そんな気持ちを心から追い出そうと苦心する中、ようやく私たちはルーミアの家についた。
　相変わらず百鬼夜行の人形供養の付喪神祀

りといった様相を呈する彼女の自宅。もはや、何も言うまい。
「で、リグル隊員の頑張りにより、予想外のスピードで救出作戦は状況終了と相成ったわけだけど、この後何する？」
　というみすちーの問いに、一同即答はなかった。
　そこで、魔理沙がこれから行う予定だったと言うキノコ採集に便乗し、キノコ観察が始まったのだった。
「あれ、こっちは私の家……。」
「ほぅ、お前いい所に住んでるな。……一緒に住んでいいか？」
「勘弁して。」

コンイロイッポンシメジ *Entoloma cyanoniger*

「あぅあぅ〜、一緒に住む……わぅ〜」
「ルーミア、顔を赤らめる所じゃない。」
　魔理沙に連れられ私たちが訪れたスポットは、本当に私の家のすぐ近く。最近、新しいキノコが見つかったスポットらしかった。
「ホントにすぐ近くか。まぁ、魔法の森でもなおじめっとしてて、住みよくはなさそうだが。」
「あたいの家はこんなじめっとしたとこじゃないよ、れいくびゅーのせれぶな住まい！」
　普段、互いの住処に興味を持たないのも妖怪の性質だろうか。
　大きなお世話だと言い返してから、早速キノコ探し。
「ねぇねぇ、これは？これは？」
　チルノが、みょーちきりんな色や形のキノコを見つけては、矢継ぎ早に魔理沙に質問を飛ばす。
「このでかい赤いのはベニイグチ。図鑑じゃ食毒不明。喰ってみたが並み以下かな。そっちのコケの上の小さい方はアカヤマタケ。湿っぽいとこが好きで苔の上に生える。カラフルで綺麗だけど、触ると黒く変色しちまう。美しい物には、安易に手を触れてはいけないんだな。思わぬ事で、簡単に壊れてしまうもんだ。その群青色はコンイロイッポンシメジ。食えるしまずくないんだが、苦味があってな。それを抜く方法を検討中だ。あと、ちっこいわ数が少ないわでボリュームがない。その、朱色のつまようじはベニナギナタタケ。食えるらしいがイマイチ興味がわかないんで味は知らん。クリーム色の方は……ようわからん。」
　次々と種名を答えていく魔理沙に、素直に尊敬の念を覚えた。すごい。
「へぇ、キノコって意外と種類あるんだねえ。凄いもんだぁ。しかし、魔理沙にもわからない物はあるんだね。」
　みすちーも称賛。が、最後の余計なひと言が魔理沙のプライドに火をつけたらしかった。一瞬ムッとしたような表情を浮かべてから、魔理沙は一気にまくし立てた。
「そりゃあそう簡単には分からんさ。キノ

ベニナギナタタケ *Clavulinopsis miyabeana*

コなんてのは、キノコを作る菌の体の一部に過ぎん。本体はずっと地下や朽木の中に居る菌糸だからな。キノコを見ただけでは見分けがつかないぐらい似ている種類もいっぱいある。いいか、我が国に分布しているとされるキノコは６～７０００種類と言われている。そのうち、図鑑に記載されているのは１／３程度とされているな。昆虫に比べりゃ数は少ないが、調べられてないという側面もあるだろう。キノコの生態は菌根共生菌と木材不朽菌、その他に大別される。菌根共生菌は、樹木の根と結びついて生活する菌類の事だ。菌根と呼ばれる、樹木のそれよりも細かく広範囲にわたる構造を形成し、樹木では自力で集められない土壌中の水分や栄養分を樹木に与える代わりに、樹木から光合成等で得た栄養分を吸収して生活している。菌類のこの役割は一般にはあまり知られていないが、植物の9割程が何らかの菌根共生菌と関係を持っているという研究もあるらしいぜ。マツタケ、テングタケ、ベニテングタケ、あと、そこにもあるドクツルタケもそうだな。ちなみにそいつは猛毒だぜ。一本で死ねる。白いキノコは食わん事だな。ただ、見た目や季節がよく似た違うやつが何種類も混ざってるらしい。そう言うの一杯あるって言ったろ？そいつは秋に出るタイプだ。純白じゃなくて、頭がちょっと紅い。で、木材不朽菌は、枯死した木や落ち葉を腐らせて（分解して）栄養源とし、生活している菌類の事である。彼らが存在しなければ、地球は数千万年分の落ち葉と丸太で覆われてしまい、ヒトを始めとした生物（少なくとも現在地球上に存在する）は、生息できないだろう。シイタケ、エノキタケ、ナメコ、ブナシメジ、マイタケ、ヒラタケがそうだ。この辺は馴染み深いだろう。ただ枯木に菌を入れればいいから、栽培しやすいわけだな。しかし、そもそも我が国においては一般にキノコについての認知がされなさすぎだ。鳥はスズメとハトとカラスとしか認識できない人が殆どだがまだマシだ。般人にはキノコはキノコでしかないし、その生活様式なんて誰一人知らない。植物が光合成で有機物を生産し、動物がそれを消費する事は学校で

不明種 *Clavulinopsis sp.?*

ガヤドリナガミノツブタケ
Cordyceps tuberculata (Leb.) Mair.f.moeleri (Hen.) Kobayasi

ドクツルタケ近縁種
Amanita sp.

習うが、それが如何にして分解され植物に利用される資源として再還元されるに至るか。その植物の働きを助けているのが何か。自然保護が叫ばれる昨今において、生態系の物質循環の輪を形成する、動物・植物と並ぶ最も基本的かつ重要な生態系のシステムが、学校教育のカリキュラムから全く抜け落ちている事は、国民の知識、意識の改革にあたる大変な欠陥である。当然研究者も育たなければ研究も進まない悪循環だ。豊富な自然環境に恵まれながら諸外国に比べその知識は大きく後れ……」

「で、魔理沙。これもキノコ？」

みすちーの不用意な一言から展開した魔理沙の固有結界を打ち破るためには、何か彼女の興味を引く別の話題を与えるしかなかった。

魔理沙は、ルーミアの指さした先、木に張り付いた白いカビの塊の様な物をまじまじと眺めた。

「これは、ガヤドリナガミノツブタケ。冬虫夏草だな。」

「冬虫夏草？」

「冬は虫の姿、夏は草……つまりキノコだな。の姿になる生き物としてこう名付けられたらしい。実際は、キノコの菌が虫に感染して、そいつをのっとってキノコをはやすんだ。しかし、菌類ってのは昔は草扱いだったんだよな……むしろ最近の研究で遺伝的には動物に近く……」

再び意味不明の言語を口走り始めた魔理沙を放って、私はその冬虫夏草をまじまじ眺めた。確かによく見るとそれは、小さなガの成虫から、無数の白い針の様なキノコが突き出した異様な姿をしていた。

自分は昆虫の妖怪。じっとそいつを眺めていると、私はブルッと、身震いがした。

◇◇◇◇

『ゴミ山での凶行、リンチ・バラバラ殺人か』

××年　10月×日

『鉈や鶴嘴や斧で滅多打ち。殺害後遺体を分割か』

秋の宴会の……酒に酔って口論となり……（文字がにじんで読めない）

『宴の後の殺人鬼！主犯格？バラバラ指示男、遺体の右腕と共に未だ逃走』

自首による発覚を恐れ……容疑者らに遺体の分割と隠匿を強要……右腕部分を担当した主犯格の男は未だ逃走中……（文字がにじんで読めない）

『宴の後の殺人鬼、車両を発見……行方不明……逃走中に事故？……』

『リンチ犯人未だ捕まらず。神隠しとの……』

◇◇◇◇

ＫＦＣ人形を掘り出してから一週間。秋深まり、場所は夜の博麗神社。

事あるごとに祭の会場となるこの神社に、私たちはいた。

勿論、全員酒を飲んでいる。

「おらおら～！緑髪立ち絵最速登場兼認知度最下位がぁ～。後発の閻魔やら新参の巫女にも個性を奪われてる癖にぃ～。」

「なにを食料アイデンティティ雀が、小骨が多いんだよぅ。後から出てきた鳥キャラにさんざ立ち位置をうばわれてる癖にぃ～。」

「なぁにおぅ？私は屋台経営という企業努力でしっかりと……」

「立ち絵が何だ～大ちゃんディスってんのかァ～！」

みすちーの絡み酒に、私も買い言葉で返す。そこにチルノが割って入ったからもう事態は収拾できない。

「あるぜぇ～幻想郷には、美しい物が正義。不毛な議論に一発で決着をつけられるる～るがねぇ～。」

「んっふっふ、小鳥や①ボス風情に、あたいの相手が務まるかな？？」

「ふん、私だって新参の頃とは違うって事を、わかってての大言だろうねぇ！？」

「ふっふっふ、雑魚がいくら「Ｐ」を吸収したとて、さいきょうのあたいを超える事は

出来ぬゥ！！」
　酒を飲んで気が大きくなっているわけではない。私の弾幕ごっこの実力は、既にかつてとは比べ物にならない。少なくとも、彼女たちと勝負になるくらいには成長しているはずだ。
「面白そうな事をやってるな。私も混ぜてもらおうか？」
　スペルカードを構えた私とみすちーの頭をガシッと掴んだ手は、人間、魔理沙の物だった。
「ふふふ、人間ごときが小癪な。我ら妖怪の力を今こそ見せてくれん。」
「ルールその……なんだっけ？　勝っても人間を殺さない、だ。お手柔らかに頼むぜチビさん達？」
　魔理沙も、スペルを構えた。こんなことも、宴席では茶飯の事。誰からともなく、私たちの体は、ふわりと宙に舞った……。

◇◇◇◇

「うりゃ、「ブラインドナイトバード」！！」
「そぉい！　氷塊「グレートクラッシャー」！！！」
　暗く狭まった視界一面を、巨大な氷塊の砕けた飛沫が白く覆う。
「ちょ、おま、弾幕濃いぜ濃いぜ！！」
「これで終い！！「季節外れのバタフライストーム」！！」
「わた、あったたった！？！？……ったぁ……。」
「スペルブレイク！！　おわったな。しょせん、くずはくずなのだぁ！　あたいったら最強ね！！」
「……何これ……全員使うスペルおかしくね……ちょっとひどいぜ？　勝てるわけないよ！」
「何処へ逃げても同じ。私たちを倒さない限り……もう終わってるけどね。」
　墜落させられ、砕けた氷が溶けた水で全身ずぶ濡れの魔理沙は、ぶるっと震えた。流石に寒そうだ。
「焚火の所に行こうか。流石に風邪ひくよ。」
　かく言う私、そしてみすちーも、チルノのおかげでびっしょりだ。……さっむ！
　今回は参戦しなかったルーミアが、三人分の毛布を神社から借りてきてくれた。優しいのか、こうなることを見越してちゃっかりしてたのか。
「う～ざぶい、秋の夜は冷えるぜ……。」
「くそーチルノめ……あたりかまわず氷まきちらしやがって……。久々に魔理沙に勝ったってのに……なんでこんな思いをするのよぅ……？」
「私も、虫だから寒いのは苦手……。」
　三人そろって鼻水をすする。背後の氷精の高笑いが小憎らしい。
　聞けば、人間だてらにこの魔理沙、弾幕ごっこにおいてはかなりの手練なのだという。今日の勝利はかなり低確率の出来事らしい。
「ヴヴざぶい、こーなったら、負けた魔理沙の罰ゲームで憂さを晴らすしかないねぇ。」
　みすちーが言うが早いか、先ほどまで離れた場所で放笑していたチルノとルーミアが、がしっと魔理沙を羽交い締めにした。ああ、既視感既視感。
「わわ、この上まだ乙女の貞操を傷つけるのか？？　おいミスティア、そのポケットから何を取り出す気だ？　黒くて長い棒……まて、ひゃめてぇえええぇ！？」

「……。」
神社の端の池。その水鏡に、魔理沙はその顔面を映していた。
『やーい、負け犬！　チルノ』
『次回は頑張るのかー　ルーミア』
『新しい魔法を完成させてね☆　ミスティア』
　そして、
『また遊ぼうね。　リグル』
　黒い文字列でしっちゃかめっちゃかな自分の顔を虹彩に映し、魔理沙はしばらく黙って

いた。始めは面食らった様子だったが、最後は異なる表情を浮かべていた。

「このまま、残りの宴会に出て、帰宅するのも罰ゲームかぁ？」

「もっちろん。」

チルノとみすちーが、ご名答とばかりに告げる。

気恥ずかしさとか、他にも色々複雑な感情の入り混じった表情だったが、彼女の顔は少し赤かった。

「まったく、これ油性かよ……乙女の顔にやってくれるぜ……。」

最後は、私たちから顔をそむけてしまった。

思えば魔理沙は、背丈こそ私たちより上だが、人間としてはまだまだ幼い部類に入る。私が見てきた外の世界の同年代の者達と比べれば、どういう訳か知らないが彼女は妖魔の跋扈する森に一人住む。普通の同年代の人間のように、傍に愛情を注いでくれるような家族はいない。気丈に振る舞ってはいるが、ずいぶん達者に生きている物だと思う。

そういう事も考えて、みすちーはこの罰ゲームを選んだのかもしれない。個人的に最良の出遭い方をしたとは言い難かったが、彼女ももう、私にとっても、森にすむ友人達のにとっても、立派な仲間だった。

「んじゃ、私は研究の続きもあることを言い訳にして、戻るとするぜ。誰かさん達のおかげで体はあちこちいたむし、ちょっと寒気もする事だしな……。」

そう言って、魔理沙は後ろを向いたまま私たちに手を振ると、箒にまたがった。

「お前らも、秋の宴会の後は、酒に酔った妖怪には注意しろよ。斧でバラバラにされて喰われない様にな～。」

捨て台詞だけ残して、凄いスピードで空へと消えていってしまった。残りの宴会とか、言ってたくせに。

『こっちは全員妖怪だよ！』と、口々に囃す私たち。

これは、今生の別れじゃない。ほんの何日かすればまた会って、その時はまた楽しく弾幕ごっこでもしたらいい。

「それじゃ……、私たちもこれにてお開きにしますか。なんだか、ホントに寒気するし……。」

なんだか、しんみりしてしまったのは、私だけではないようだ。それに、濡れたからだで寒気がするのは私も同感だった。そんな私もみすちーに同意し、その場はお開きとなった。

また明日。

その言葉だけを交わし合うと、私たちは魔法の森の方々へ散った。

また明日。

暗い森の中で、私はその言葉の優しい余韻を噛みしめる。案外、明日は皆二日酔いで出てこなかったりして。

そんな想像から、魔理沙の落書きだらけの顔が浮かんだ。そして……

『……斧でバラバラにされて喰われない様にな～。』

不意に、何かを感じて後ろを振り返った。

眼前には、吸い込まれるような漆黒の闇。

よくある感覚。

何も、居るはずない。

潜んでいるはずない。

それなのに、こんなにも後ろ髪がチリチリ灼けるのはなぜ。

こんなにも、心が不安に焦がされるのはなぜ。

体が、妙に熱い。

心臓は、早鐘のよう。

漆黒の森の中に響いた音は、自分がつばを飲み込む小さな音だけだった。

◇　◇　◇

……体が熱い。恐れていた事態だ。

どう考えても発熱。チルノめ……

頭がぼーっとする。思考を働かせようと意識を集中するが、すぐに途切れて統一した精神が霧散してしまう。だめだ。

医者……といっても妖怪に医者がいるとは聞かないし、いたとしても場所を知らない。

ずいぶん寝ていたらしい。既に日が高い。

皆には悪いが……今日の所は寝ておくか。

今宴の後の殺人鬼なんかに来られたら、ひとたまりもないな……は……は……

……トン、トン

私は、扉のノックの音で目を覚ました。

外はすでに暗い。

誰だろう。

……トン、トン

扉の向こうの訪問者は、名乗らない。

「どなたですか……？」

……トン、トン

「どなたですか……？？」

最初より心持大きな声を出してみたが、ただ単調なノックの音が返ってくるばかり。

ルーミアなら心配そうな声が返ってきそうなものだ。

みすちーなら、強引に乱入してきてもおかしくない。

こんなつつましい、しかもまどろっこしいノックは繰り返さない。

チルノや、家を教えていないが魔理沙も似たようなもんだろう。

では……扉の向こうの誰かって誰だ……？

私の知らない、得体の知れない誰かが、板きれ一枚挟んだ向こうに居る。

『……腕が一本、まだ見つかってないんだろ？』

宴の後の殺人鬼……は……まさか……は……はは……

……トン、トン

とたんに背筋が冷たくなってくる。それは、未だに頭をぼやかすこの風邪のせいだけじゃない。熱でかいた汗のせいだけでもない。

この、世界に一つ安心出来る私だけの空間に、今にもそいつは入ってくるかもしれない。いや、そいつは既にノックの音として、もう私の部屋に侵入してきている。真綿で首を絞めるように、じわじわと、私の……

「だ、誰！？」

ぐわんぐわんと、自分の頭に響くほどの大声。

勇気を出して叫んでみると、ノックの音は止んだ。

静寂。

あまりにも不気味な静寂。

じりじりと後ろ髪が逆立つ様な感覚。虫の知らせとはよく言った。私の中の何か得体の知れぬ勘とも言うべき感覚が、次に起こる何かを警告する。

0.1秒経つごとに、思考が沸騰していく。来るなら来い、早く来てくれ。でないと、私の思考が……世界が……歪曲する……

「こんばんわー。新聞記者なのですが、いま取材のお時間よろしいでしょうかー？」

……ウソみたいに間の抜けた女性の声が、私の思考を一気に覚ました。……そこは、何の変哲もない、いつもの私の部屋。

そうだ。

そんな恐ろしい事が、そうそう起こってたまるものか。私は一体何を舞い上がっていたのか。ばかばかしい。

「はいはいどうぞー。」

と、勢いで口走ってしまってから気付いたが、私は今体調がすこぶる悪い。

「では失礼いたしまーす。」

と扉をあけて入ってきたのは、白いシャツと黒いスカートというややフォーマルな印象の、普通の少女だった。こんな時間にこんなところに来るのだから妖怪だろう。……そとは、風が強く結構木立のそよぐ音がしていた。小さな返事では、聞こえなかったのも頷ける。

「あやや、なにやら体調がすぐれなさそうですね。」

断ればよかったと後悔したが、一旦入れてしまった以上もう遅い。

「いえ、簡単な事なら。」

「そうですか、ご協力ありがとうございます。」

そんな社交辞令もほどほどに、彼女は私の返事を待たずに手帖を取り出し始めていた。

「突然で恐縮ですが、この写真の方について、ご存じの事は御座いませんか？」

その言葉と共に、記者は一枚の紙片を取り出した。外の世界にもあった、写真である。それは、割烹着を着た背中に翼のある……、

「あ、みすちー。」

「やはり御存知でしたか。」
この記者、先ほどの手帖を取り出す仕草の速さもそうだが、私の先の行動をいちいち読んでいる事をアピールする様な言動、行動が若干癇に触る。意図的かそうでないかはわからないが、意図的だとしたらそれが私に与える印象すらも計算している事だろう。私は、彼女の頭の回転の速さを、認めるとともに警戒せざるを得なかった。
「私の友達ですよ。で、そのみすち……ミスティアがどうしましたか？」
友人の愛称を、会話の相手の呼称に合わせて言い直し、今度は逆にこちらが質問した。この記者のもったいぶった話の進め方にも、このセリフを言わされた気がして少々不快だった。
「彼女の家に、ここの場所を示したメモが有りましてね。彼女、忘れっぽい所が有るようで、忘れちゃいけない事やら日々の出来事、日記帳的なもんですが、なんでもメモして残すようにしてらっしゃったんですね。で、ヤツメウナギの串焼き屋台をやっていらっしゃいましてねぇ。わたしがそこにお邪魔した時撮った写真がこれなんですよ。」
そんな私が知ってるような知らないようなことまで知っているなら、もっとさくさく話を進める方法が有るだろう。大体、後半の一文は取材に不要じゃないか？　体調の悪さが、記者の会話の進め方の私にとっての非合理性によるいらつきを、一層煽ってはいるのだろうが。
「彼女のヤツメウナギはなかなか絶品でして。食べた事あります？」
「……で、結局何が聴きたいんです？」
いい加減痺れを切らし、無礼を承知で相手の話を遮って話題の核心を要求した。
記者は、少し残念そうな微笑みを『作って』、では……と前置きして話題を進めた。
「ミスティアさんに最後に会われたのはいつになりますか？」
「え……昨日の夜の深夜、神社の宴会の帰りで別れた時が最後だと思います。」
ふむふむ。と、記者は手帖にペンを走らせる。
「何か、普段と違う様子とか、雰囲気とかありましたか？」
……どうやら、相変わらず核心とは少し違う話をしているようである。だが、今度は私の中にはいら立ちに代わって、妙な違和感が生まれてきた。
何か、核心を話すのにこんなまどろっこしい前置きが要るような話のか……？　しかし、私にとってこの前置きが、相手の話を理解するのに何か意味を持っているとは思い難い。『無意味な』前置きが『必要』とされる話題。なんだろう。頭の回転は自信が無い。しかし、私は背中にじっとりと、嫌な汗が浮き出てくるのを感じた。
「特にないですけど……あの……、体調もすぐれないもので、出来れば早めに本題に入っていただきたいんですが……？」
しかし、恐怖感より早くこの場を切り上げたい面倒臭さが勝った。後は、僅かな好奇心もあっただろうか。
「……ミスティアさん、本当に何か変わった様子とかありませんでした？　何か相談されたりとか。例えば……誰かに追われているとか、狙われているとか。」
「……？」
狙われている？
あの明朗快活にして天衣無縫のみすちーに似合わぬ物騒な単語に、一瞬思考が止まってしまった。なんじゃそりゃ。
「はぁ、特にないですね。全く翳りなく天真爛漫に暴れまわってましたが……」
そこまで言って、唐突に心臓が高鳴るのを感じた。
狙われている？　追われている？　何のために？
追ったり狙ったりする理由って何だ？　そりゃあ、＊したり、＊するために決まってるじゃないか。＊す？　＊すって何だ？
自分で思考を明文化できない。だから、答えを外部に求めた。安易に。安直に。不用意に。それを、その疑問を、私はいくらでもやり直せる妄想から残機０の外界へと放逐してしまった。
「……ミスティアに、何かあったんですか？」
……沈黙。

沈黙は雄弁だ。私はもっと躊躇すべきだった。いや、そんな物は未来の私のいいわけにすぎない。今の私が、＊す事が何なのかなんて、想像できたはずがない。目の前の記者の唇が、ゆっくりと動き出す。未来の私は知っている。今の私は夢想だにしていない。この全身の毛が逆立つ様な、そこから冷水が湧き出してくるような、この……

「……ミスティアさんは、昨晩お亡くなりになった様です。」

真っ白だ。

頭の中が、真っ白になった。

……え？　みすちーが……どうしたって？

「いえ、それがどうも昨日の晩から今日にかけての様なんですね。なんというか、お気の毒です。」

……？

「あの……」

一体、何がどうなってるんですか？

そう聞きたかったが、その言葉を紡ぎ出せるほど私の脳は機能を果たしていなかった。

それを察してかどうか記者は、いや、それがですね。と、相変わらず一々もったいを付けながら話しだした。

「彼女の家のメモにあったわけなんですよ。その、狙われてるとかって言う内容が。で、それがどうも……恐ろしい話なんですが……」

そこで、また記者はもったいをつける。どうせ、全て話してしまう気なのに。どうもこの記者は自分の知能を鼻にかけるいけすかないタイプ、それも、それを直接態度に出さない慇懃無礼タイプのナルシストなのではないかと私は疑った。そんな、どうでもいい事に思考を割く事で、あれほど知りたがった本題の持つ意味を拒否しようと、私の小さな脳は頑張っていた。

「どうも……肉……食料として狙われていらっしゃったらしくて……、お分かりになると思いますが、彼女の家は私の知る限り今朝から御留守です。今日のお昼に偶然取材のお約束があったのですが、朝うかがっても御留守でしたし、昼下がりまで待ってもお戻りになりません。なので、暇つぶしにお宅の周囲を色々調べたんですね。で、玄関先をよく見ると……」

血が、三滴。そして、薄茶色の羽根が、三枚。

この記者の、はぐらかしにはぐらかした表現から、しっかり具体的な情報を読み取れるのだから、これまでの話もきっちり理解できているはずだ。

……理解したくもなかった。

「それを見て、慌ててもう一度お宅の扉を叩きました。お返事が無いので、無礼を承知ではいらせていただきました。カギは……かかっていませんでした。そこで、見つけたのがそのメモと、あなたのお宅の場所が描かれたメモです。」

周囲に誰もおらず、そのメモを頼りに手掛かりを求め、私の所に来たのだと言う。

こいつを、この家に入れるべきではなかったのかもしれない。話を聞くべきではなかったのかもしれない。先の催促をすべきではなかったのかもしれない。今すぐ家から追い出すべきなのかもしれない。ずっと感じていた、しかし信じられなかった。理論でねじふせてきた感情、第六感とも言うべき感覚が、ますますの不吉さを警告する。しかし、もう戻れない。ずるずると、引きずり込まれていく。

「羽根の他に、木の扉に爪痕がありました。弱い引っ掻き傷だったので、爪の間隔や角度からも多分ミスティアさん自身が右手で付けた物だと思います。思うに、彼女は自宅の前で何者かに」

それ以上聞きたくなかった。こんなふざけた妄想で私の親友をこれ以上汚されたくない。しかし、拒否しても、拒否しても、それは私の中に流れ込んでくる。起こってしまった事はもうどうしようもない。私にできるのは、これがすべて熱にうなされて見た白昼夢であると信じる事だけだ。

「あの……、他には……チルノやルーミアや、魔理沙は……？」

記者は、ようやくいましていた話を止め、うーんと首をひねった。

「実は、ルーミアさんにはミスティアさんのお宅を出てから割とすぐに見かけました。チルノさんはいつも通り、その近くの湖に居

ましたよ。魔理沙さんは、見てませんね。」

ひとまず、みすちー以外の仲間たちの安否はそれなりに分かった。その分だとルーミアは、チルノに会いに行くお決まりのコースを移動していたのだろう。

そして、記者は私の質問に何やらうむむと唸っている。

「皆さんお知り合いだったのですか。ルーミアさんやチルノさんにお話を聞かなかったのは痛かったですね。しかし、魔理沙さんは人間ですが、お知り合いなのですか？それとも、彼女に何か変わった事でも？」

ん？そこに喰いつくのか。

「はい、知り合いですが、魔理沙がどうにか？」

「いえ、近いなぁと思いまして。」

？

「食料ですよ。人間は、妖怪の食料になります。むしろ、そういう襲われ方をするならそっちの方のほうが自然かなぁと。」

……何を、とぼけた顔で言っているんだこいつは。

物騒というにはあまりある。妖怪が人間を襲う。外の世界ではとうに滅びた文化だ。それで無くても、弾幕ごっこ全盛のこの幻想郷で、そんな事が、ここでは未だに日常なのか？

狙う？襲う？食べる？みすちー？食べるったら、どうする？＊す。＊して、解体する。死体を、バラバラ、バラバラ……

……唐突に、私の視界には記者の背景となっていた紙片が目に入った。

あの新聞。

記者。新聞。バラバラ。右手。バラバラ。

殺人。殺……

みすちーが、殺された……？

＊の正体にようやく気付いた私は、しばらく放心するしかなかった。記者は、依然しゃべり続けている。

……と思ったら、いつの間にか居ない。ふと我に返ると何故か記者の姿が無くなっている。しかし、考える暇もなく屋内にもかかわらず強い風が吹きつけた。思わず私が目を閉じると、それを明けるころには再び記者が立っていた。

「ちょっと魔理沙さんの所へ行ってきました。……お留守でした。」

ドキンッ！

胸が、締め付けられる。何だ。ただ、留守だって言っただけじゃないか。彼女はいかにも行動派だ。出掛けているだけだろう、常識的に考えて。こんな夜中に？いや、どこかに泊まっているんだろう、常識的に考えて。では、この感覚はなんだ。この、胸を圧迫する、心臓を握られる様な痛みは。恐怖感は。

「で、あなた自身は何かそういう、狙われている様な事は感じませんでした？」

え……？

なんで、そこで私につながる？私が何をした？

「いえ、特に……なんで、私なんですか？」

「いや、ここに来る時にもうすうす考えてたんです。ひょっとして、万一お会いできない事もあるんじゃないかなぁって。」

そりゃあ、留守かもしれないしね。でも、この記者が言うのは、そういうたぐいの不運の事ではない事は明白だった。もっと、生々しく、残酷な、必然。

「私は、ミスティアさんやあなたの仲間達と魔理沙さんが知り合いだと知りませんでしたし、ミスティアさんと鳥仲間なので、鳥の目線でしか見ていませんでした。だから、あなたに言われるまで魔理沙さんの事も調べようと思いませんでした。なので、あなたの所へ先ず来たんです。」

「だから、なんで私なんですか……？」

「まだ、魔理沙さんがそうと決まったわけではないです。むしろ可能性は低い。しかし、もし狙われているのがミスティアさんだけじゃないとしたら。食料として狙われる可能性を考えたら、私が思うに次に危ないのは……あなたなんですよ。」

……私？

「そうです。鳥目線ばかりじゃありませんよ？世界的に見れば昆虫というのは、ごく一般的かつ非常に美味な食料として普通に利用されます。」

そんな……私……？

「何かあったら……あ、申し遅れましたが私、射命丸文と申します。妖怪の山に住んでおりますので、ミスティアさんの事で何かあ

りましたら、どうかお知らせください。それ以上に、気をつけてお過ごしください……。もし、魔理沙さんの安否がわかるまで……あなたのお仲間さん達に注意した方がいいかもしれません。」

「なっ……どういう事ですか!?」

　私は、頭痛も忘れてガッと身を乗り出した。途端、ぐわんっと波打つような痛みが頭を襲った。

「いぇ、お気を悪くされないでください。私たちの記録は古い物で、最近はわかりませんが……ルーミアさんは……」

　ただでさえよくないのに、発熱と頭痛で益々弱った頭に、色々な情報が一度に入りすぎた。その後の話は、よく覚えていない。そのうち適当に挨拶をすませ、射命丸と名乗った記者は帰って行った。

………しばし、ぼーっと閉じられた扉の前に立っていた。みすちーが……魔理沙は……そして……私が……私?

………………ッ!!

　私は扉に駆け寄り、『ガチリッ』と、素早く戸の鍵を閉めた。

　視線を落とした先には、あの新聞記事の切れ端が有った。繋がったのか……? あの記事が……私に……? そんな……まさか……そんな……

◇◇◇◇

朝。ぐわんぐわんと頭の痛みは続く。しかし、確かめずにはいられなかった。この目で確かめずにはいられなかった。さっきまで、私の目の前にあった、事実を。それは、デジャヴとさえ呼んでいい。こんなにも衝撃的で、私の頭を灼くように熱くする光景なのに。

　それは、嘘みたいにそっくりだった。昨日記者に説明されて私が思い浮かべた状況に。

　主を失った家の玄関前に、三滴。扉の傷。無人の屋内。カギは、確かにかけられていなかった。

　しばらく茫然とした後、私は我に返るとはじかれるようにその場を去った。

　そして今、かつて一度だけ教えられ訪れた霧雨魔理沙の家の前に居る。何度も戸を叩いたが、留守らしかった。日が傾くまで待ったが、彼女は戻らない。

　いい加減体力の限界だ。これ以上この風邪をこじらせるのは色々な方向からまずいだろう。

　『かえったら、れんらくください。__リグル』

　私は、彼女の家のドアノブにメッセージをぶら下げた。内容などどうでもよかった。要は、『そのメッセージが無くなったら、魔理沙は帰宅した』というサインなわけだ。誰も、自分の家のドアノブに異物が付着したまま放置したりしない。

　彼女の健在を確かめるのに、24時間家の前に張り込むのの次、いや体力的な事を考えればそれ以上に見逃しの少ない妙案と言える。

　私は、風などで飛ばないようしっかりとくっつけ、その場を後にした。ああ、頭が痛い。この頭痛が、私をイラつかせる。そういえば、頭痛が酷くてよく思いだせないが、昨日の記者は最後にも不快な事を言っていたな。ルーミアが? ルーミアが何だっていうんだ。

◇◇◇◇

あれから、五日たった。

　端的な事実だけを言うなら、メモは、今も私の仕掛けた魔理沙の家のノブに付けられている。

　毎日、私は夕刻に魔理沙の家のメモを確認していた。それ以外の外出は控えた。勿論、一向に治らない風邪の症状がキツイというのもある。それ以外に、私は記者に言われた万一存在するかもしれない私を狙う何者かを警戒していたのだ。必要以上に自宅から出ず、外出時も周囲に細心の注意を払う。

　こうして、恋人の様に魔理沙の家に通い続けたが、想い人は帰らない。日に日に増す焦燥感。

……ぺたり。

……背後に、足音。魔理沙？と安直な計算で後ろを振り向こうとした私を、本能の反射が光速で引き留めた。おかしい。さっきの私の計算では……これからとても安心出来る事態が起こるはずだ。なのに、なんなんだ……この悪寒……この寒気は。

　後ろに立っているのが慈悲を与える聖人だと思っていた。だが、今背後に感じられるそれは明らかに違う。もっと、禍々しく、どす黒い……黒くうねる蛇蠍の様な……何かが……いる！

「……だ、誰？」

　きいた。私の本能は、ひとまずそれを直視する事を拒否した。

　本能が、直視することを拒否する何か。

　いっそ、足音が聴き間違いであってくれたらいい。本能は現実を否定したがっている。しかし、この質問の答えがいか様であっても、例え返答がなかったとしても、本能が、内なる私の望んだ答えは得られない。

　本能の結論を受け、理性も現実に叛旗を翻した。だって、風に髪の流れる音がした。そんな音が聞こえる物か、それはただの気配だ。だって、まばたきをする音がした。そんな音がある物か。冷静になれ私。じゃあ、振り向いてみたらいい。だが、もし誰もいなかったとしたら、お前はそれを受け入れられるのか？『いる』はずなのに居ない。そのありえない現実を。じゃあ、もし誰かが居て、そしてそいつが私の質問に答える意思の無い者だとしたら……そいつは誰だ？足音を忍ばせ、私の背後に立ち、どうするつもりだと言うのだ？後ろから、飛びかかられ、殴られ、羽根を散らかし、血を滴らせながら昏倒し目の前の扉に引っ掻き傷を……と、

　すぅっ、

　確かに聞こえた。

　背後の何かが、私の質問に答えようと、息を吸い込む音が……聞こえ……

　ぅ、

「わぁあああああ！！！」

「きゃぁ！？」

「……ルーミア？」

　背後には、いた。ルーミアが。あの宴会以来、直接会ったのは初めてだ。それも、今日までの私を行動を考えれば当然か。

　ああ、久々に知っている顔に会った。記者に言われた事も忘れてはいないが、私は少しの安堵感を得た。

　私が振り返った時の叫び声でルーミアは一歩後ずさり、おびえたような表情でこちらを見上げている。早く、早く何か話しかけなきゃ。思えば、こうして振り向きざまに脅かしてしまうのは二度目だ。

「……あの、さ……」

　話題は思いつかないまま、焦りからついついさわりの言葉だけを発してしまう。その後に続いた沈黙は、先ほどにも増して気まずい空気。

「みすちー？……可哀そうにね。」

「え……」

　知ってたんだ。

　そう、言葉が漏れた。相手が沈黙を破ってくれた事で私は安堵した。しかし、妙な察しの良さを見せるルーミアに、私の鈍った思考は少し遅れをとった。そのまま、再び少しの間両者沈黙する。

「みすちー……どうしてこんな……。」

「うん……ちょっと酷い事になっちゃったけど……大丈夫だよ。きっとすぐに……」

「大丈夫！？大丈夫って何だよ！？みすちーは……」

　……つい大声を出してしまった。ルーミアのビクついた様子を見て、自分がやってしまった事を後悔する。

　彼女は、私の体調の事は知らずとも、憔悴した様子の私を心配してくれているに違いない。そして、元気づけようとしてわざと明るく振る舞ってくれているに違いないのだ。表現に対する価値観の些細な相違は、言葉の表づらでしかない。私は、それが発せられた内なる意味を汲み取らなくてはならない。それが、私への気遣いだと気付いた今、私はその優しい言葉への自分の浅慮な拒否を、謝罪しなくてはならない。

「……ごめん、こんなこと言っても、なんにもならないのに……。」
「うん……。」
　頭痛と発熱が、私をイラつかせる。その苛々のはけ口を、友人に向けてしまった事。彼女の優しさを、片時とはいえ疑った自分が恥ずかしい。
「……リグルの方は、大丈夫？」
「え……」
　私？……また、私か。なんでみんな、そこで私に振る。みすちーがどうしたからと言って、私がどうだっていうんだ？
「別に……何ともないよ。大丈夫。」
「そう……そうだといいけど……。」
　ひとまず、当たり障りなくはぐらかした。
　何だ……？　まるで、私に何かあった方が自然とでも言わんばかりの口ぶりじゃないか。いや、それは勘繰りすぎか？　そうだ、あの記者、ルーミアが、どうだと言ったんだっけ。
　何となく気まずくなってしまい、その後2~3言ことばを交わして、私は帰途についた。例の記者の話は、内緒にした。別に、彼女を強く疑っているわけじゃない。かつて、あの新聞記事の事を、ルーミアは私に内緒にした。それが、新しい仲間を不要におびえさせないための配慮だとしたら、私も同じ。こんな不愉快な言い分を、私も友に伝える理由はなかった。

◇◇◇◇

　10日目。目の前にある魔理沙の家の戸は、相変わらず私の意匠で僅かばかりのリフォームがなされたままである。
　……もはや、認めざるを得ない。魔理沙は……行方不明だ。今は、その表現にとどめておかないと、私の頭がどうにかなりそうだった。毎日ここに通わねばならぬせいが有るかは分からないが、私の風邪は一向に良くならない。よっぽどタチの悪いのをやったらしい。インフルエンザなのか？
「ちょっと！」
　!?
　魔理沙邸の玄関先を立ち去ろうとしたところを、強い口調で呼び止められた。
　私は、驚いて呼びかけられた方を振り向いた。そこには、
「あんた妖怪でしょ？なんでこんなところに居るの？この家に何か用？」
　歩を詰められ、質問で捲し立てられ、私は思わず右足一歩後ろに下がった。
　そこに居たのは、紅と白の二色の服に身を包む少女。右手には、御幣のついた祓い棒を構えている。
『妖怪でしょ？』という口ぶりには覚えがあった。魔理沙に初対面で聴かれたのと同じフレーズ。つまり、このひとは人間だ。こんなところに居る、紅白の、人間の、少女。このキーワードには、聞き覚えがあった。
「……あなたは、博麗の巫女？」
「お見知り置き感謝するわ。で、私の質問に答えてほしいんだけど。それとも、これがいる？」
　と、彼女は何処からか護符を取り出した。この体調で弾幕ごっこは勘弁していただきたい。
「まってまって、私は怪しくないよ。」
「怪しい奴はみんなそう言う。」
「焦ってるやつもたまに言うんだよ。私は魔理沙とは知り合いで……」
　私は、巫女が求めるままに自分の身分と周囲の状況を説明した。魔理沙の事、みすちーのこと。
　話しているうちに、段々頭が冷えてきた。みすちーたちの話では、巫女は妖怪が起こす異変解決の専門家で、とても強い。しかし、大きな異変の時以外は滅多に神社以外で姿を見かける事はないと言っていた。
「ふーん、大体わかったわ。あの魔理沙がしばらく来ないからおかしいと思ったら、やっぱり行方不明か……どこいっちゃったのよ……もぅ。」
　深刻そうな表情を見せる彼女に、私の思考もネガティヴな方向へ傾いていく。
「なら、あんたの友達は？」
「え？」
「あんたはともかく、あんたの友達。あんたこの辺に住んでるんでしょ？疑うならま

ず近しい所からよ。」
　疑うという言葉に若干の反発を覚えたが、逆らえる相手ではなさそうだ。私は、ルーミアやチルノとよく遊ぶ事を話した。
「んんん、⑨ねぇ。どっちも、この前の異変の時私を襲ってくれた覚えが有るわ。」
　え？
「しかも、金髪の方は私を食べようとしやがって。まぁ、軽くぶっ飛ばしてあげたけど。」
　え……食べ……え……？
「うーん、二人つるんで何かやってるのかなぁ……とりあえず、見つけたらぶっとばして事情聴取ね。」
「え、あの……ルーミアって……」
「ああ、あの人食い食いしん坊妖怪、あんた見つけたら教えてよ。神社に来てくれたらいるか、そのうち帰ってくると思うわ。ただ、夜雀がそう言う事ならあんたも喰われない様に気をつけなさいな。」
　え、私も……ちょ……。
「あんたを懲らしめるのは勘弁してあげる。でも、隠し立てすると為にならないわよ？じゃあね～」
　勝手に勢いで捲し立て、話を終わらせ、そのまま飛んで行ってしまった。……記者の言っていた言葉、今思い出した。というより、今もう一度、同じ言葉を別方向の者から告げられたのだ……。ルーミア……そんな……。もしそうだとしたなら、あの数日前に話した君は……。
　疑いたくない。考えれば考える程疑いたくなってしまうから考えたくない。それでも考えてしまう自分が、とてもけがらわしい者のように思えてくる。ひとまず、私はその場を離れ、自宅へと向かった。
　私は、これまで以上に周囲を警戒していた……。

◇　◇　◇　◇

　起床。昨日の事が、まだ頭の中をぐるぐる回っている。頭痛も微熱も、取れてはいない。しかし、昨日よりは少しましなように感じられた。
　今日はその体調も踏まえ、意図的にお米を硬めに炊いた。もちろん、ここ１０日あまり続いているおかゆ状態と比較しての事である。普通のご飯にくらべればまだまだ水っぽい。そんな朝食を軽く済ませ、再びベッドに入った。食べた直後だから、背にもたれ、足を伸ばして座ったような状態で布団をかぶった。食事に固形成分を増やしたことで発熱が有るかどうかでも、現在の体調を把握できるだろう。上がらなかったらお慰みだ。
　そんなことを、微熱で浮かされた頭の中でぐるぐるとかき混ぜながら宙を眺めている。
　トンッ　トンッ
と、ノックの音。
　なんぞ……体調の悪い時に……
と、私はベッドから片脚をおろした瞬間我に返った。
　……誰だ？
　今までここを訪ねてきたのは、ルーミア、みすちー、チルノ、新聞記者の四人だけだ。
　メモを見て魔理沙が来た？いや、彼女は私の家がこの辺りとは知っているが、正確な位置を知らない。それは淡い期待だった。
　どうする、新聞記者ならまあよし。巫女という事もあるまい。ルーミア達だったら？いやいや、何を迷うことが有る。彼女らは友人だ。初対面の新聞記者や巫女に吹きこまれた情報で、彼女たちを疑うのか？だが、警戒するに越したことはない。こちらは体調が万全でないのだ。……なんて失礼なことを。一週間ぐらい前、ルーミアはあんなに私の事を気遣ってくれたじゃないか。でも……ひとまず、相手を確認するか。
「……どなたですか？」
　返事がなければ、最悪あけなければいい。
「私だよ、ルーミアだよ。」
　身構えた緊張が拍子抜けするほど素早い返答があった。しかし、ルーミアか。どうする？どうするもこうするも無い。でも、だけど……
　内なる自分との二人議論を闘わせながら、は～いと適当な返事で場を持たせつつ私は玄関の戸を半開きにして応対すると言う、極力

当たり障りないもしくは日和った対応を選択した。

「おはよう。」

にっこり笑うルーミア。病に疲れた体。この笑顔はいつもに増して私の癒しになる。

「やぁしょーねん。元気かな?」

お、扉をもう少し開くと、そこにはチルノもいた。どうりで少し冷えると思った。

「なんか、あんまり元気なさそうだね……。ちょっとやせた?」

心配をかけないようにと、努めて元気に振る舞ったつもりだった。相手の様子など意にも介さずからから笑うチルノと、鋭い観察で相手の体調を察し、心配そうな顔をするルーミア。……その表情に、特に裏は感じなかった。

こうして話をしていると、先日まで自分が考え込んでいた事は、全てくだらないことだったのではないかと思えてくる……。だが、そう思うと同時に、それでもなお払拭できない引っかかりがあることも否定できなかった。

「ちょっとね、風邪気味であんまり食べれてないんだ。」

これは、事実だった。何も、隠してはいない。

「なーんだ。ひさびさに弾幕ごっこ誘おうかと思ったのに、それじゃあこのチルノさんとは勝負にならないなー。」

「そ、そう? そりゃ残念……。」

隠していた。私が彼女たちに抱いている疑念。その表情の翳りを、見とがめられた様に思えた。後ろめたい物を持つ者だけが抱く、特有の感情。

「……じゃあ、おみやげ。湖のみんなの為にチルノの友達の大ちゃんが作った、特製おはぎだよ。大ちゃん、じょうずなんだよ?」

ルーミアが、新聞紙で包んだそれを差し出した。

大妖精は、チルノ達と湖で遊ぶ時何度も会った。いくつ入っているだろうか。流石に水を多く含む和菓子だけあって、多少重みがあった。

「わぁありがと。大ちゃんによろしく。」

「その中、ルーミアが作ったのが混じってるんだよ? リグルの昆虫脳でわかるかなぁ?」

いやらしく笑いながら、チルノが挑発的な目線で私の目を見上げてくる。

「これ、今日の弾幕ごっこを欠席するリグルの宿題にしようかなー。おはぎにアルファベットがついてるから、明日答えてね?」

「できたら、すぐ食べてくれるかな? 大ちゃんの作りたてをたんのうしてほしいし。罰ゲームが今から楽しみだよ。」

「ちょっと……」

まったく、気遣ってるのか苛めてるのかどっちなんだか。思わず、クスリと笑みが漏れた。

「あ、リグル笑ってくれたね。」

「なんだ、結構元気そうじゃん!」

……そうか、私は笑顔さえ忘れていたのか。本当に、こんなに気さくに話してくれる仲間に対して、何を考えていたのか……。

「あ、おはぎなんだけど……できたら……どっちがおいしかったかも、教えてくれたらいいな。いいな。」

ほんのりと頬を朱に染め、恥ずかしがりながらそう頼むルーミア。

うん、わかったよ。と、出来うる限りの笑顔で返事をしてやると、ルーミアもぱぁっと笑顔を咲かせる。

最後に2、3言会話を交わして、ルーミアとチルノは飛び去って行った。

パタン。と、扉を閉める。久々に感じたにぎやかさが嘘のように、部屋は静まり返った。

さて……二人に元気ももらったことだし……。

私は、ルーミアたちにもらった包みを開けて見た。新聞の中には、広い竹の皮で包まれた少し小ぶりなおはぎが、4個。手の大きさに合わせたのか、四つの中から当てねばならない事を考慮してのことか。病気の身としてはボリュームが抑えられている事はラッキーだ。

大ちゃんは、妖精の例にもれず悪戯好きではあるが、どちらかといえばチルノのお姉さん的な立ち位置であり、やや几帳面で世話やきな性格をしている。若干ルーミアと性格が

被る様だが、特に奇癖があったりはしない。ルーミアの可愛らしさや甲斐甲斐しさも、二人の性格を微妙に分けるポイントだろう。
　そんなことを考えながら、私は火をおこしやかんをそれにかけた。おはぎにはお茶がいるだろう。
　さて、チルノの言う通り、乾いてしまう前に頂きたいところだ。風邪で舌の機能が怪しい自分が憎い。
　お湯が沸くまでの間、私はA、B、C、D、四つのおはぎをしかと観察した。
　チルノ達の口ぶりでは、ルーミアは大妖精の材料をわけてもらって隣で作っていた光景が思い浮かぶ。材料は、同じ。違うのは握った人物。つまり、舌が弱っていることも加味すればこの見た目こそ最重要な情報。一見同じ紫の塊。だが、よく観察すれば違いは見えてくるはず。
　……あった。四つをまとめて俯瞰すると、一つだけ輪郭が異なる。残り三つはまるっこく均等に作られ、指の形は殆ど残っていない。そいつだけは、丁寧に握られた指の形が残っている。それは、決していびつではない。表面はむしろ他の三つより均されており、その指の交差する紋様がむしろ様式美にさえ到達している。丁寧に握り込んだ証しだ。
　他の証拠も注意深く観察する。大ちゃんは、不特定の仲間達に多数を作ったためやはり作業の均一化が生まれる。対してルーミアは、おそらくこれ一個。よく観察しろ。核となるもち米の量、それを包む餡子の量も微妙に少なく小ぶりに見える。他の三つにも残る微妙な指の跡。その太さ、角度、全てが微妙に異なっている。逆にトラップかとも考えたが、自信満々にふっかけてきたチルノだが、彼女にここまで手の込んだ偽装は出来まい。
……ほぼ決まりだ
　それでは、こうなれば食べ比べは余興に近いが、お湯の沸くのを待つうちにまず、大ちゃんの作を一ついただくとしよう。
　……ふむ、悪くない。まず、こしあんには無い味の深みと食感を持つ粒あん。それでいて、しつこくならないこの味を出すのは並みの事ではない。もち米の潰れ具合もそれに見事に応える。形が残りすぎず、もっちりとナイスな食べ応えだ。いい仕事をしている！
　……お湯はまだわかない。さて、ルーミアの方はどうだろうか。高級和菓子さえ思わせる繊細な作。……んむむ、どちらが上かというと難しいジャッジになりそうだ。それも当然、材料は同じなのだ。違うのは握りの部分だけ。芸術点と、食べ応えが勝敗を分けそうだ。ルーミアの方はまだ一口。判断は、全部食べてからでいいだろう。握りの力の込め方。あんの層の厚さ。それらのセンスの違いで、それが口に与える印象は全く異なった物となる。それに、ひょっとすると何か逆転の秘策が仕掛けられているかもしれない……。
　……ん！
　予想は的中したようだ。大きくかぶり付いた口の中に、何かが触った。それは硬く、食べる物とは少し違う様だった。とりあえず小さくなったおはぎを中指以下三本で支え、自由になった人差し指と親指で、それをつまんで取り出してみた。
　………これは、……何だ？
　ビュッ！　ビタンッ！！！
　それが何かを理解する前に、私は食べかけのおはぎごとそれを力いっぱい壁に投げつけていた。壁に叩きつけられ、餡が放射状に飛び散り、そして一呼吸おいてから、ボロリ。と、剥がれて床に落ちる。
　自分で、何が起こったのか理解できなかった。
　……何をやってるんだ私！？　せっかくのルーミアの手作りに、なんて事をッ！？
　呆然と、凶行に及んだ自分の手を見つめながら、口から取り出したそれが何だったのかを思い出す。
　はじめ、それはなんだか分からなかった。食べ物というには、ちょっと硬かった。舌の上で、ちょっと転がすだけの大きさが有った。味は、無かった。見た目は透明で少し光っており……うん、ガラスによく似ていた。先端が尖っている……そうだ、ガラス片にそっくりだった。
　ん……？　あれ……？　さっきのあれは……
『ガラス片によく似た』……何だったんだ？
　…………答え何て出ない。だが、私の中に居るもう一人の私にはわかったらしく、それ

を奥歯をカチカチと鳴らして教えてくれた。
……湧き上がってくる、未体験の恐怖を打ち消せない。急に、舌の、口の天井がピリッと刺激を思い出す。……指を口の奥へ入れ、ぺたぺたと触ってみた。……思い出す。味は無い。いや、あった。冷たく……鋭利な……切るような……刺すような……

急激にこみ上げる嘔吐感。両手で喉を抑え、その場にしゃがみ込む。胃液だけではない、全身が燃えるように熱くなり、全身の血液が顔面と頭のてっぺんに向けて絞り上げられていく。しばし悶え苦しむと……嘔吐感は何とか治まった。

ようやく呼吸を取り戻すと、今度は心臓が早鐘の様にばくばくと胸を叩き始める。……そして、ようやくこちら側の私も理解する。おはぎに何が入っていたのかを。

その単語、姿を脳裏に思い浮かべるより、手が動く方が早かった。

ガラッ、バサッ！！

私は、残ったおはぎを包み紙ごとまるめて手近な窓から外へと放り投げた。落下音がする前にバシンッ！と勢いよく窓を閉じた。

そのまま、ぼすっとベッドに飛び込み布団をかぶった。

震える自分の肩を抱き、恐怖と……悲しさと……怒りと……ぐちゃぐちゃだった。

これは、悪戯とかわるふざけとかそんな生易しい物じゃない……ッ！！

こんなにも、いきなり……疑いようのない……突きつけられるのか……。

こんな……ガラス片なんかを間違って呑みこんだらどうなるか……。怪我なんてもんじゃすまされない。どうして、一体……何処で、何がどうなってこんな事になってしまったのだろうか。

涙が……零れ落ちた。悔しかった。二人の、それぞれ個性的な笑顔が懐かしい。それこそが……真実だと思いたい。つい数分前の事なのに、遠い昔の事のように感じられた。これまで、ずっと続いてきた事なのに、永遠に失われてしまったように感じられた。……もう、戻れないのか。チルノ……すぐに食べろと言ったな……。すぐにでも死んでしまえって事か……！

私は、跳ね起きた。腫れてぐちゃぐちゃの顔のままガラッと窓を開けた。周囲を見回し気配を探る。私は虫だ。気配には敏感にできている。…………、特に誰もいない様だ。すぐに襲われる事は無いらしい。敵は、二人だけとは限らない。新聞記者が全てを話していたとしたら、ミスティアは自分を狙う相手を誰だとは書き記していなかった。顔見知りではない者が含まれている可能性が有る。

ちくしょう……ちくしょう……そう簡単に殺されてたまるか。こんな、わけもわからないまま……。

◇ ◇ ◇ ◇

部屋を満たすのは、明け方の薄く柔らかな日差し。泣きはらした朝にしては……意外に体が動く。風邪は、小康状態といった所なのだろうか。

目をこすって、壁を見る。何もない。そりゃそうだ。飛び散ったモノがどうにも不吉な物を予感させて気分が悪く、私が丹念に掃除したのだから。

……そう言えば、ガラス片は見つからなかった。あんな物を室内の床に放置していては危なっかしい事この上ないが、見つからないならそれでいい。勢いでどこかに転がりこんでしまったのだろう。踏みつけないよう注意は払うが。

こんな早朝に起床したのにはわけが有る。それは、武器を手に入れるためだ。相手が強硬手段に出てきた以上、ミスティアの時の様な実力行使を受ける可能性を考慮しなくてはならない。それに、対抗する手段を手に入れておきたい。弾幕ごっこなどと、悠長なことは言っていられない。私たちの中では、弾幕ごっこで一番力のあったミスティアさえやられたのだ。三人以上で襲いかかられる可能性も有る。

普段の集合時間にはまだかなり時間がある。ルーミア達が行動を開始する時間まで、時間が有ると言う事だ。しかし、ぐずぐずはできない。

私は、腫れた顔を洗い、朝餉も歯ブラシもヘアブラシもほっぽらかして、ごく適当に身支度を整えただけで家を飛び出した。武器になるものには、アテが有った。

……これだ。

私は、魔理沙の家に来ていた。確かめたが相変わらず不在。ドアのメモもそのままだ。その魔理沙の家の周りも、実は色々ながらくたが散乱している。あの、ゴミ山の様にはなっていないが。庭木の代わりにオブジェが立っている程度のものだ。

　私が拾ったのは……、少しへこんだ金属バット。

　ブンッ！と、振ると勢いよく風を切る音が鳴った。うん、重すぎず軽すぎない、グリップもばっちり。変化球や厳しいコースにも対応し、上手くバットコントロールができそうだ。僅かなへこみと、その部分に赤茶けたサビが少々付いているが、実際に球を打つわけではないので問題ないだろう。そのサビの色に、少し不吉な印象を持たざるを得ないが……。

　いずれ、既に主を失ったそれを持って行っても、今や文句も言われまい。万一魔理沙が帰れば、喜んで返却するさ。私は、帰途についた。

「あ、おっはよ〜う。」

　私は、その聞きなれた声にびくんと振り返った。ルーミアだ。爽やかな挨拶。嬉々として手を振りこちらに近づいてくる彼女に、おかしな所は無い。

「リグル、ずいぶん早起きだね。……風邪、大丈夫なの？」

「う、うん。まぁね。今日は、多少調子いいみたい。」

　真っ先に相手を気遣う様子は、これまでの彼女と何も変わりない。可愛らしく、優しいルーミア。昨日の悪い出来事は全て、高熱で見た私の幻なのだと思いたかった。既に、昨日何度それを願っただろう。

　もし、このまま彼女が微笑み続けてくれたなら、それもかなうような気がしてしまう。ずっと……このまま……

「ねぇ、リグル？」

「ん？」

「おはぎ、ちゃんと食べてくれた？」

　……そんな私の願いは、あっさりと打ち砕かれた。いや、むしろこれは彼女から直接示された初めての敵対宣言なのではないか。いや、待て慌てるな。彼女はまだ笑っているではないか。いつもの優しい瞳で。でもこの言葉が、文字どおりの意味とは思えない。

「…………リグル？」

　ルーミアは、返事に躊躇した私の顔を、キョトンとした様子で首をかしげ、大きな赤い瞳で覗きこんだ。

「あ、」

躊躇するな。まだ危険な様子は感じ取れない。今は、普通の調子で返すんだ。下手に状況を悪化させる必要はない。

「お、おいしかったよ。」

　必死に絞り出した言葉。しかし、質問はこれで終わってはくれなかった。

「そーなのかー。で、全部食べてくれた？」

　私の作り笑顔が、端から少しずつ凍りついていくのがわかる。あのガラス片、呑まずにすんだのかという意味だろうか。

「い、いや、全部は食べきれなくてさ、まだ残ってるんだ……。」

「あれれ、宿題はどうなっちゃったのかなぁ？」

「あ、はは、あの宿題、今日までだっけ……？」

「うん、宿題忘れのリグルは、きっと罰ゲームだよ……だよ？」

　そうして、二人又笑う。ありふれた、朝の友人同士の会話。愛おしい友人。そんな彼女らに、私は本当に命を狙われているのか？ひょっとしたら、ガラス片なんてただの偶然、事故かもしれないじゃないか……。

　そんな、疑ったり、庇ったり、煮え切らない思考を私の中のもう一人の私が一喝する。

　⑨かよリグル！！どう間違ったらガラス片なんかおはぎに混ざるんだ！？お人よしも大概にしろ！！

　……そうだ。この期に及んで、そんな躊躇は命取りになるんだ。だけど、急に信じられ

る？　先週まで楽しく笑い合っていた仲間達が、自分に殺意を抱いているなんて。
……甘えるなよリグル。私は甘かった。ルーミア達がどんな恐ろしい存在かを理解していない。いや、しようとしていない。あの新聞記者の心遣いありありの言動を、巫女の歯に衣着せぬ物言いで言い直されるまで信じられなかった。落胆し、悲劇的状況に打ちひしがれる事で逃げていたのだ。信じられない、理解できない、だから状況に好転の余地が有る。そんな甘い考えは、もう捨てるんだ。
「……リグル……やっぱり具合悪いんじゃない？」
　私の表情の翳りを、ルーミアは察したようだった。
「……ごめん、やっぱり帰ろうかな。」
「うん……あのさ、長引くようなら……一回お医者さんに……」
　医者……そんなものがあったのか。だが、今更彼女の勧めに乗ってどこかへ行く事は考え難かった。
「いや、自分で何とかなるよ……ありがと。」
「でも……」
「うるさいな、ほっといてって言ってるんだよッ！」
　びくっ！　と、おびえた様子で後ずさりするルーミア。これまでも、何度かあった光景。ころころ変わるルーミアの表情が、思い出される。胸が痛い。
「リグル……。」
　彼女の表情は、心底心配そうで……今の私には、かえって悔しかった。
「ごめんね、ルーミア。じゃあ。」
　それだけ言うのが精いっぱいだった。私は、分かれ道を私の家へ行く。悲しそうに表情を曇らせるルーミアを、その場に残して……。

◇　◇　◇　◇

　帰って、私は自分の体調の悪化に気付く。やはり、無理をしたか。ひとまず適当に水洗いし、拭いたバットを枕元に置く。多少鉄くさいのは仕方ない。
　施錠を確認し、窓とドアにはそれぞれ箒と椅子を立てかけた。強引に窓を開けば音が鳴り、目を覚ませるようにだ。椅子は、ドアノブを殺した。何らかの方法で解錠されてもノブがおりない仕組みだ。
　ひとまず、今は体調の回復だ。色々な事が有りすぎた。私は、すぐに眠りに吸い込まれていった。

◇　◇　◇　◇

　目覚めは、最悪だった。別に誰かに叩き起こされ危機的状況に陥っているわけではない。静かな物だ。ただ、体調がすこぶる悪い。腹痛こそない物の、全身のだるさは痛みに変わり始め、頭痛もおさまらない。体を浮かす発熱も昨日よりひどくなっているようだった。
　昨日の外出は失敗だったか？　いや、今はそんな過ぎた事を蒸し返しても仕方ない。今は、頭痛の酷さの割にはかなりの名案を思いついたのだ。
　それは、博麗の巫女に保護してもらう事。
　何故今まで思いつかなかったのかと不思議に思うほどだ。何かあったら教えろと、約束さえ取り付けていたではないか！　あの日魔理沙の家で巫女に会えたのは、今思えば幸いだった。彼女なら、私に降りかかる災厄の撃退もたやすいはず。妖怪だからと無碍にされる懸念もあったが、私は貴重な情報源。そう悪い様にはされまい。最悪神社に居座れれば、そこで蛮行に及ぶ者も少なかろう。少なくとも、妖怪の山の新聞記者よりボディーガードとして色々な方向から当てになるだろう。
　それに、彼女が動いていたことと異変の発生が結びつくなら……できるなら……できるなら、……悪い夢は醒めてほしいと願わずには居られなかった。ようやく手に入れた理想郷の仲間たちを……、手放さずに済む可能性を、私は模索したかった。

身支度を整え、バットを握り、家を出た。施錠。しばらく、ここには戻れない可能性が高い。
私は、長い道中見つかり易く体力霊力を消耗する空より、地上を選択した。
少し歩いたところで、
「やー、少年！風邪はもういいのか？」
……チルノッ！
だが、相手は一人。何とか、接近をけん制しつついなしたいところだ。
「ん……まだ完璧じゃないけど、体力落ちてるから。ちょっとは体を慣らさないとね。」
私は、取ってつけた様に素振りを始めた。心持大きなスイングで、チルノの接近をささやかにけん制した。しかし、筋肉が痛い。演技も楽ではないな。早めに切り上げたい。
「うん、元気でいい事！ただ、ちょっと話を……」
「素振りだって神経は使うんだ……気が散るんだけどな……。」
つっけんどんな対応。怒るか呆れて帰ってくれる当たりが、私の望む方程式の解だ。特に殺気は感じないし、回復と武器の所持をアピールした。一対一で突然襲われる事はあるまい。……甘いか？
だが、チルノは立ち去らない。なんだろう。今更、何か話があるのか？もう、いっそ追い返してしまうか。
「なんだよ、話が無いならもう行ってくれない？」
「え、えっと？……あの……話ってわけじゃないけどさ……その、」
珍しい。柄にもなくチルノがうろたえている。心を痛めるべきか、私はまだ躊躇していた。
「あ、あの、おはぎ……」
………私の中の、何かが切れた。
……そうかい、そっちがその気なら、こっちだってやりようがある。もういい。十分だ。こっちは十分待った。そろそろ反撃してもいい頃合いだろう。相手は一人。状況はこっちが優位なんだ。威嚇で追い返してやる。
「ああ？おはぎ！？おいしかったよ！美味すぎて死ぬかと思ったさ！！やったのはどっち？ルーミアか、お前か！！」
「ひっ、え、あ、や、やったのはあたい……」
あっさり認めた！！その淡白さ加減には驚かされる。ガラス片だぞ！そんなもの、大変な結果になるかもしれないって⑨でもわかるだろ！？それをさも、ちょっとした悪戯を認めるような感じで……こんなにあっさり……！！
「し、死ぬかもしれないんだよ！？友達に、あんな真似するのかよ！？」
「しっ、そ、そんな……ちょっとしたいたずらじゃん……。魔理沙とか……特にみすちーは、その、悪いと思ったけど……」
おろおろと、狼狽する仕草をしながら苦笑いすら浮かべるチルノ。魔理沙や、ミスティアの事まで、犯行を自供した！？それでもってまだ、そんな顔で取り繕おうってのか？
益々怒りがこみ上げる。……いや、その表現は正しくないかもしれない。向こうが弱気なので、強気に出てもいいとわかったから。おびえ続けてきた私のストレスが、一気に解放されたのかもしれない。
「アレがいたずらで済むかッ！！！」
私の一喝に、チルノはびくっと震えて俯いてしまった。
「おはぎに唐辛子やら氷やら混ぜるのとはレベルが違うだろっ！？もし呑みこんで、もし喉に刺さって、もし破片が血管に入って……どうなると思ってるんだよッ！！」
チルノは体を強張らせ、口を真一文字に結びカタカタ震えている。それはもう、私の知る天衣無縫な氷精チルノではなくなっていた。
「お前なんて、仲間じゃない。そんな奴と、喋るつもりもなければ話を聞くつもりもない。私の事は、当分放っておいてよ。いいね！？」
もう、チルノは何も喋れない様だった。
「あんた達が私をどうこうしようと思っても、簡単にはいかないからね。ミスティアや魔理沙の様に、簡単に行くと思わない事ね！」
相手が直接いうなら、こちらも直接宣戦布告してやる。同時にこれは威嚇でもある。私

には、お前達にさんざ話を聞かされた博麗の巫女がついてる。手出しできるのならやってみろ。

「前にあった人食いやゴミ山のバラバラ事件だって、お前達じゃないのか？新聞記者や巫女がかぎまわってるよ。内緒にしてたみたいだけど、隠しきれてると思わない事ね！」

「え、何……どうしてそんな……」

チルノは、もう表情を失い、呆然と立ち尽くすのみであった。

「私行くよ、さよなら。」

歩き始めて、警戒しながらすれちがい、ちらと横顔を見た時始めて、彼女が、嗚咽混じりに涙をこぼしている事を知った。

「……………ぅ……ひどいよ……………リグル………、」

「…………チ、」

思わず慰めの言葉を口にしそうになるが、唇を閉ざす。私が、罪の意識を感じる必要などもはや無いのだ。

私は、震えるチルノを残し神社の方角へ向かう。道中は、短い方がいいだろう。

その背後、一応警戒していた背後から、ぼそりと。……本当にぼそりと……その独り言は聞こえた。

「…………そっかぁ……。」

「ぇ？」

私に行ったのではない。間違いなくチルノの独り言だ。

だが、嗚咽を交えながらも、笑うような、呪うような声で。私は思わず足を止め、チルノを振り返った。

「リグルにぺらぺら喋ったの……あの野郎かぁ……。」

細い肩を震わせ、両拳をぐっと握り締め、泣きながら彼女は呪詛を吐いていた。

「あの時、殺しとくんだったなぁ。あたいがさいきょうだからって……容赦してやった恩もわすれやがってぇ……。」

誰の事だ……新聞記者か……巫女か……？

「ちくしょう……ちくしょう……、……絶対に殺してやる……ぅぅ……ッ！！」

普段の、おちゃらけた彼女とは、全く違う存在。何か、別の恐ろしい妖怪がそこには居た。視界が、彼女を中心にひずんでいく様。

それは……初めて知る……いや、体感する恐怖だった。

◇◇◇◇

チルノから離れてしばらく歩いた様に思う。神社まで、もう半分以上来ただろうか。普段なら飛んでいけばそう遠くはない距離も、この体調でしかも地上を行くのはかなりしんどい。体の筋肉は痛いし、頭痛、発熱もけっこう酷い。風邪がうつるとか言って追い返されない様、巫女に話しかける時のイメージトレーニングが必要だろうか。

この先には、あのゴミ山へと続く分かれ道が有る。複雑に道が入り組む魔法の森だが、その隣が神社への道だ。

どうして、あの平和で穏やかだったこの小さな世界は、こうも歪んでしまったのか。既に、かなり高く上った太陽も、ひんやりと澄んだ空気も、答えてはくれない。

……それとも、昼なおチロチロと鳴き続ける虫たちの声を借りて、私に何かを伝えようとしてくれているのか。

もしかしたら、虫たちに混じりミスティアや魔理沙も、私に訴えかけているのかもしれない。

そして私はまだ、それに気づけない……。

いくら耳をそばだてても、蟲を操る力が有る私でも、何を言っているのかは分からない。それでも、私は努力しなければならない。伝えようとしているこの声を、聞く努力をしなくてはならないのだ……。

その時、虫達が一斉に鳴くのをやめた。

まるで、自分たちを恐ろしい目に合わせた本人の登場に、一斉に縮こまるかのように。

間違いなかった。……それは、気配の接近。足音は最小限だ。虫達が鳴きやむことで教えてくれなければ、気付けなかったかもしれない。

疲労感は一気に引き、頭痛と恐怖感を抑えつけ、代わりに五感を研ぎ澄ませる脳内物質が分泌され始める。いずれも、そう長く抑え

きれるわけではないだろうが。
　私は、追跡者の姿が見えない内に、冷静に木陰に身を隠した。
　やり過ごせるだろうか……？　いや、私に足音が聴き取れた様に、相手も私の足音を聞き取っているだろう。身を隠している事は、見抜かれているかもしれない。
　尾行者は……チルノかルーミアだろうか？　チルノだったら容赦はしない。先ほどと同じように怒鳴り付け、先でも歩かせてやるさ。ルーミアだって、そう変わりはしない。
　そうでなかったら？……相手の出方次第……だろう。
　誰であろうと、油断はしない。誰であろうと……、誰であろうと……。
　足音が、ひたひたと近付いてくる。
　喉の奥からこみ上げる何かを、生唾を飲み込んで押し戻し、汗ばんだ手をズボンの裾で拭い、バットを握り直した。
　一度は抑えた恐怖心が、ぶり返そうと私の隙を窺っているのがわかる。
　一体……誰なんだ？　木陰から、尾行者を覗きこむ……。

……それは、想像の範疇。ルーミアだった。
未知の相手で無かった事による安堵感。
……それは、一瞬で吹き飛んだ。

　光を失った、丸くのっぺりとした色で宙を見つめる瞳は死者のそれの様。なのに、唇は弧を描いて切れこみ、そう、まるで薄笑いを浮かべているように見えた。そして……何よりその右手に引きずられているのは……『斧』。
　再び木陰に身を寄せ、今見た信じられない光景を思い出す。
　今のは……何だッ！？　あまりにも露骨な、恐怖の具現！！
　私のバットは、まだリハビリとか体力作りとかスポーツとか、いくらでもごまかしの利く大義名分が有る。だが、あれはなんだよ！？　あまりにも露骨。ごまかしも何もない！！　そのまんま……斧だ！！！
「リグル……かくれんぼ、なのかー？」
　心臓が肺を押しつぶし、胸を突き破らんばかりに跳ねあがる。
　かろうじて保っていた理性は、粉々になって吹っ飛び、代わりに全身から噴き出す冷たい汗が、今自分がどんな感情に支配されてるかを教えてくれる。
　だめだだめだ。隠れきれてない。バレてるバレてる！
「私を……驚かせようとしたのかな……かな……？」
　これ以上の接近を許すよりは、間合いが有る内に姿を現した方がましだろう。
　もう一度バットを握り直し、……覚悟を決め、隠れていた木陰から飛び出した。
「わはぁ、リグルみーつけた。」
　奇怪な笑いを上げるルーミア。顔こそ笑っているが、私が姿を隠した事を不快に思う様子が、その目の翳りが語っている。
　あぁ……おなかの底から、熱くて……冷たくて……どろどろとしたモノが滲み出てくる……。そのどろどろは、少しずつ私の体を浸食し、やがて私が気を許した瞬間、一気に全身のありとあらゆる器官を麻痺させてしまうに違いないのだ！
　このまま飲み込まれてはいけない！　切り返すんだ！！　負けるなリグル！！
「な、何の用ッ！」
　虚勢を隠す為、精一杯声を張り上げた。しかし、今のルーミアはその程度で臆したりしない。
「リグルと同じ。私も行く所が有ったんだよ。」
「じ、じゃあ、その斧はなんだよ！？」
「私は、宝探し。」
「た、宝探しぃ？」
「あのゴミ山でね、また新しいかぁいいのを見つけたの。だからね、それを発掘する為に、また持ってきたの。」
「し、……信じるか、そんなのッ！！」
「信じないよね。わは、あはははははははははは。」
　なんだ。今日のルーミアは明らかにおかしい。前の様な、思わせぶりとか、そう言うのとは違う。何と言うのか……露骨だ！！
「まってよリグル。わは、あはは、あははは

ははははは。」
　ルーミアは、奇怪に笑いながらも決して足を止めない。
　いつしか歩き、いや小走りに移動し始めていた私に、ゆっくりとしかし確実についてくる。もはや、客観的には私がルーミアに追われて逃げているようにしか見えなかった。
「つ、ついてこないでよ！」
「それは、出来ない相談。……私の目的地、こっちだもん。わは、あはあはあは。」
　レナは宝探し？　なら、道を変えてやる。それでいいだろ！？
　私は、ついにたどり着いた分岐点で神社への道を選ぶ。ゴミ山への道は隣だ。ざまあみろ。
　だが、ルーミアは私のその様子をけたけたと笑いながら、ついてくるのだ。
　どうして？　どうして！？　宝探しでしょう！？　道が違うじゃないか！！　どうして追ってくるんだよ！？
　そんな私の叫びださんばかりの思考は、そのまま口からこぼれた。
「ど、どど、どうしてついてくるのよッ！？」
　私の声は、既に焦りさえ通りこし、恐怖に染まりきっていた。
「……リグルと、お話したいから。だめかな……？」
　いつもの、小首を傾げて眉根を寄せ、唇に指をあてるあの仕草。もう、可愛らしいとさえ思えない。
「わ、私は、何も話したい事なんか……」
「聴きたい事が……あるんじゃないかな……？」
「ないよ、何にもない！」
「話したい事、あるんじゃないかな……？」
「無い！　仲間を手にかける奴なんかに話す事なんかない！　私聴いたよね、あのゴミ山で何かあったのかって。あったじゃない！　事件がバラバラ事件！！　隠し事ばっかり、お前なんか仲間じゃない！！　話す事なんてあるもんかッ！！！」
「……じゃあ、リグルはどうかな？　天狗の新聞屋さんや、巫女さんとお話してたんでしょ？」
「え……な、なんで知ってるのそんな事！？」
「何の話をしてたのかな？　教えてほしいなぁ……。」
「君たちには、関係ない話だよ。」
「嘘だッ！！！！　あはははははははははは。」
　その叫びは、笑い声は、鳥たちを驚かせ飛び立たせていく。
　私はすくみあがり、歩みをさらに速めることしかできない。
「ほぅら、リグルにだってあるように、私たちにだってあるんだよ。隠し事ぐらい。あはははは。だから、お話しようよリグル。隠し事、なくすためにも、おはなしおはなし。あはは、わは、あははははははは。」
　私は、もう走っている。ルーミアは、歩いている。なのに、なんで距離が開かない。
「わかるよ、ルーミアは分かる。怖いんだよねリグル？」
「こ、怖くなんかない……なにも、怖い事なんか、」
「嘘だッ！！！　あはははははははははは。」
　ぜぇぜぇと息が切れる。肺も頭も爆発しそうなぐらい熱い。心臓もバクバクと痛いぐらいに内側から胸を叩いている。
「相談したい事があるはずだよ。私はリグルの味方。さあ、話してリグル。あは、あはははははは。」
　もうルーミアが何の事を話しているかもよくわからない。ダクダクと頭が脈を打つ。脳漿が沸騰しそうだ。
「悩みが無くなれば、リグルも皆も元通り、きっと仲良しに戻れる。また楽しく弾幕ごっこができるよ。今度は一緒に考えて、みすちーをやっつけようね。わはは、あははは、あはははははは。」
　ああ、そうだったらどんなに楽しいだろう。この何日か、どれほど時間を撒き戻したいと願ったか。あなたにわかるのかルーミア。
　私の足は、疲労と恐怖でがくがくと震え、パタンパタンと情けない足音を立てる。必死で逃げているつもりだが、少しでも気を抜け

ば崩れ落ちてしまいそうなほど情けない。対するルーミアの足音は鋭い。小枝をバリバリ踏み割りながら、その音で私を威圧するのだ。

私は、ルーミアに追われて逃げている。

捕まったら、終わる。本能が、そう告げている。……何がどう終わるのか、よくは分からない。だが、終わる。それだけは理解る。

もうちょっとだ、森を抜け、原を抜け、山道を登れば神社だ。

そんな、一瞬の心の隙だった。あろうことか、膝がかくんと抜け、そのまま崩れ落ち転んでしまう。

慌てて立ち上がろうと、言う事を聞かない足に必死に神経を集中する。動け！　だが、熱のせいか興奮のせいか、もう平衡感覚すら怪しい。

バットを杖に何とか立ち上がろうとする私の眼前に、もう……ルーミアはいた。

疲労困憊の私に対し、ルーミアの立ち姿は凍える様に冷え込んで……息を乱さぬどころか心臓の鼓動さえ感じなかった。

「何が怖いのかな。おびえるなんて、リグルらしくないよ。あはははははははははははは。」

その、薄い薄い笑顔は、慈愛の表情にも見えた。……瞳に生気の宿らない、能面の慈愛だった。

おびえるなと諭しながら、ルーミアの両手はすぅーと、頭上に差し上げられる。

その両手は、ゆっくりと、幾重もの残像を残しながら……まるで千手観音の様な神々しさを見せた。

そして、頭上で両手が組まれた時、……そこには斧の柄が握られていた。

それを、尻もちをついたまま呆然と見ていることしかできない……私。

「……ルーミア……お願……教えて。私は……どうなるの……！？」

……ルーミアは、斧を振り上げたまま厳かに口を開いた。それはまるで、二度と逢うことのない友人に別れを告げるような……そんな残酷さが宿っていた。

「……大丈夫だよ、わたしが助けてあげるから。あはははははははははははははははは。」

威圧音とも言える恐ろしい笑い声を響かせ、斧を振り上げたまま、さらに一歩を踏みこんでくる。

「……さぁ、」

さらに一歩。ルーミアの顔が、私の眼前いっぱいにまで広がる。

「……話して。」

さらに一歩。

ルーミアの鼻が私の鼻にかするぐらい、間近に迫る。

「私が……聞いてあげる……助けてあげるから……話して。ね……？」

私は、何とか動こうと両手で持ち上げていた尻を、またぺたんと地面に落した。……それは、情けない事じゃない。すこしでも、彼女から離れるための、精一杯の……努力。

「わ、あはははははははははははははははははははははははははははははははははははは」

直感した。この笑いを終わらせてはいけない。この笑いが終わった時、……！！

それを感じ取った瞬間に、反射的に体が動いた。

自分でも信じられないぐらいの素早さで、弾け飛ぶように起き上がり、ルーミアを両手で突きとばす！

ルーミアは、まるで羽根で出来ているかのような軽さだった。背中に振り上げた不釣り合いな斧の重さに大きく振られ、軽々と後ろに飛ばされ尻もちをついた。それを視界の隅で確認すると、あとは一目算だった。

脱兎のごとくという言葉がこれ以上似合う事もあるまい。ルーミアから離れよう。逃げよう！　生き延びよう！！　それ以外の事は、何一つ思いつかなかった。

走りながら、自分がずっとバットを握りしめていた事に気付いた。ああ……、なんて役に立たない武器なんだ。肝心な時に武器であること、武器が有ることすら忘れていたなんて……！！

曲がりくねった道を駆け抜ける！　駆け抜ける！！

息苦しさも、足の重さも、一切を感じなかった。私の体も理解しているのだ。ここで走ら

なかったら……命がない事をッ！！
　後ろから、あのわははあははという、笑い声を模したルーミアの威嚇音が響いてくる。
　木々と私の頭に反響し、少しでも私の正気を失わせようと響いてくる。
　木立がまばらになり、視界が一気に開けた。
　ここは……？　覚えのない場所に、一瞬困惑する。いや、いいのだ。魔法の森を抜けた。滅茶苦茶に疾走を続けたが、ひとまず目的地に近づいているのだ。
　私は、博麗神社を探した。開けた平地の向こう、小高い緑の丘の中に赤い鳥居が見える。間違いないだろう。
　早く向かいたい。ここは、見通しはいいが人気がない。逃げる者にはあまりに辛く、追う者にとってこれほど都合のいい場所も無い。心臓は爆発寸前。頭はぐわんぐわんと渦を巻き、全身の筋肉が悲鳴を上げている。だが、構わない。ここで休んだら、もう悲鳴を上げることとさえできなくなってしまうのだ。
　それでも、一休みする口実が欲しくて後ろを振り返り見回した。……ルーミアの姿は無い。
　かわりに、見知らぬ誰かが二人歩いてくるのが見えた。頭に大きな長い耳が見える。妖怪兎だろうか。中背の淡い髪色のロングヘアーと、小さな短髪の黒髪。
　ルーミアで無く、かつ、第三者が登場したことに、胸をなでおろそうとした……。
　が、私の中のもう一人の私が、再び警鐘を鳴らした。
　人が歩いている事に不信は無い。人間だろうと妖怪だろうと。散歩か何か……。
　……それより、目だ。散歩？　散歩にしては、二人で談笑……というわけではなく、二人とも押し黙り、まっすぐこっちを見据えて歩いてくるのだ。
　……走って逃げよう。多分、最善の選択だ。無関係な奴らなら、走れば簡単に振り切れるだろう。……もし、万一私を狙うルーミア達の一味なら、同じ様に走って追ってくるはずだ。
　どちらにせよ、もたもたしていればルーミアも追い付く。そうだ、走ろうッ！！！
　そう思い、踵を返そうとした瞬間、そんな私の考えを見透かしたかのように、二人がこちらへ駆けだしたッ！！
　何てことだ、やはり、ミスティアや魔理沙を襲ったのはルーミアとチルノだけではなかった。
　後ろを振り返らなくてもわかる。二人は私に追いついてくる。荒々しい二組の足音がどんどん迫る。
　ルーミアの様に、振りきれず追いつかれずの間合いで、真綿で締められるように追われるのも恐ろしいが、そんな雰囲気的な恐怖の比ではない。あまりにも暴力的に迫る、この直接的恐怖に勝るもの等あるものかッ！！
　それは、居るかどうかもわからない不可視の悪霊の気配と、牙をむき出し涎を散らし足音を踏みならし追ってくる、巨大な野獣の違いに似ていた。
　追跡者の腕が、ひゅっと左肩をかすった。足音だけじゃない、既にその呼吸音、いや呼吸さえ、吐息さえうなじに感じる程、すぐそばまで迫っているッ！！！
　……クールになれ、リグル。
　私は、全力疾走のまま、時間が制止するかのような感覚を味わっていた。
　その静止した世界で、私は少しだけ振り返り、追跡者がいかに間近に迫っているかを改めて知った。武器を持つ利き手と逆を狙う余裕さえ見せる追跡者。このままでは振りきれない。それをまず認識しろ。なら、あとは決断するだけだ。
　……よし、まず今の右足はそのまま、そして次の左足で行こう。いいか、やるぞ、やるぞやるぞ、武器なら持ってる！　行くぞリグルッ！！！
　右、左ッ！！　右腕のバットを大きく振り、その遠心力で急停止急旋回！！
　二人は、私の突然の攻撃に明らかに驚いた。一瞬体制を崩し、私に伸ばした手は皆空を切る。
　背の小さい一人は私が反撃に転じた事に気付き、慌てて対応しようとしたが遅いっ！！
　遠心力のままに今の軌道を延長！　軽い当たりだったが、バランスを崩し相手は転倒。

だが、それぐらいでひるみはしない。相手はすぐに起き上がった。
二人と私は対峙した。ルーミアより気楽だった。心の中で苦笑した。私の命を狙っている奴らが、どこの馬の骨ともわからん連中であることがどれほど気楽なことか。親しい仲間達の顔をしていないことがどれほど気楽なことか！！
「私に何か用！？　次は眉間にお見舞いするよ！！」
強がりでいい。闘争心を、爆発力を呼び覚ませ！
二人の兎の少女は、物も言わず、信じられないぐらい冷静に私の左右に散った。
一人がバットを封じ、もう一人が私自身を組みふせる。そう言う算段か。体を押さえる左が中背の薄藤色の長髪。右が小柄な黒髪。なるほど。
……冷静に分析したが、二対一はどうにもならぬ。体中から、どっと汗が噴き出てきた。
なら、先手必勝！！　先に右に踏む込み、小柄な一人を打ち崩すッ！！
相手は素手だ。金属バットでの渾身の一撃は、どう防いでも貰えば致命傷！！　が、相手もその選択肢を理解していたようだった。私の踏みこみと同時に間合いの更に内側に飛び込み、肘が腹部を狙う！！　この体勢……回避……不能！
世界がでんぐり返り、体が木の葉のように吹っ飛ばされるのがわかった。
音もなく、柔らかに地面に打ち付けられ、顔面で砂利の味をなめさせられる。……痛みは無かった……と、思ったのも束の間。すぐに皮膚の擦り剥けたあの熱い痛みと、内臓が潰され胃の内容物がこみ上げる苦味が口とのどを焼く。
そんな痛みを堪能する時間も与えられていないことを、今の私は理解していた。
すぐに立ちあがったが、既にもう一人が眼前に迫っていた。……回避できないと、冷静に理解できるのが返って悔しい。もう一撃をみぞおちに入れ、動きを止めた所でぐるりとそいつは体を入れ替えて私の背後に回った。長い腕でがっちりと私の首を締めあげる。
…ぐ…ぇ……喉が……潰れる……
窒息とか、昏倒とか、そんな音読みの理屈は思いつかなかった。ただ、視界が赤黒く閉ざされ、頭の奥でジーーーンという音が鳴っているだけ。意識が途切れない様に保つことだけに、意識を集中させられる。
こうしてもがく間にも、無防備になっている私の正面にもう一人の少女が立っている事は、目は見えなくとも気配で感じた。
どうする事も出来ない。足が半分浮いて、腕もほどけず、逃げることも、反撃する事ももう出来ない。
絶体絶命……四文字熟語を脳裏によぎらせる時間すら、もうあたえられてはいなかった……。

………見慣れた天井だった。かけられた布団の匂いも……とても馴染んだ物。ここは……私のベッド？

私の部屋……が、意識のもやが晴れるにつれ、私以外の気配を感じてばっと飛び起きた。……その途端、全身に痛みが走った。

私は、いつからここで横になっていたんだろう……。

「大丈夫？ もうすこし、横になってた方がいいと思うよ？」

そこには……ルーミアがいた。そして……その奥には、チルノも！

なぜ私がここに居てルーミア達がここに！？ 全身の血管と筋肉が一気に緊張する！！

……だが、そのルーミアの微笑みは、私のよく知る彼女の物だった。

気を許してはいけない。……と思いつつも、今のルーミアは大丈夫な様な気がする。そんな、いつもの優しい笑顔だった。

チルノは、遠くからいつになく神妙かつ心配そうな面持ちで、こちらを眺めている。不自然に一人遠くに居るのは、風邪で頭痛と熱が酷い私に自分の冷気が当たるのを配慮してのことだろうか……。

「……私……どうして……？」

「覚えてないの？」

「……意識が無くなってからの事は……全然……。」

体は、思った以上に重い。件の風邪の酷さに加えて、あの限界突破。全身、ボロボロでない方がおかしいぐらいか。せめて意識だけでも鮮明にしようともがくが、いかんせん疲労と熱で、ぼんやりと思考にかかるもやは、なかなか抜けない。

「お医者さんを呼んであるから、もうすぐ来ると思う。それまで……横になってた方がいいよ。」

医者か……。今は、ありがたいかも。病気やけがの事もあるが、公正な立場の者があらわれるのは、少し心強い……。

「私……どうしてここに？ 確か、森を出たあたりで……」

「ホントにおぼえてないのかな……。私が来た時には、リグルは失神してたんだよ。」

ようやく、意識を失う前の記憶が戻ってくる。その記憶が、恐怖としてよみがえるとともに頭の中のもやを少しずつ晴らしても行った。

私を昏倒させたであろうあの二人組はともかくとして、ルーミア達が私を介抱してくれたのか。……意外だった。私は、ルーミア達には命を狙われていると思っていた。だったら、私が意識を失っていたなら絶好のチャンスだったはず。にもかかわらず、どういうわけか私は生きてここで介抱されている。気付けば、頬の擦りキズにはガーゼまで張られているのだ。

「ホントに覚えてないの？ 私たちは、肩を貸しただけだよ。大丈夫、自分で歩けるって……で、ありがたいけど冷たかったっていうから、チルノは今離れてるし……ホントに覚えてない……？」

こくこくと、チルノが首を縦に振る。肩を竦め、おびえたような顔をしている。朝に威嚇してしまったのを、まだ引きずっているのか。

「……ごめん、気を失った後のことは、ほんとに……。……あれ、」

「んー？」

「ルーミアさ、私を運ぶ時……誰か邪魔が入ったり」

「なかったよ。」

ピシャリと言い切られた。

その切り方は、覚えが有る。しかも、今回はどこか不快な色を含んでいるようだった。

今の私はあまりに気弱だった。例えばルーミアに詰め寄ることで、この二人が私の仲間とは違う二人に変わってしまうかもしれない。先刻の、恐ろしいルーミアに変わってしまうかもしれない。それが怖くて……それ以上踏み込むことは避けた。

ルーミアは笑顔のままだった。瞳の輝きも暖かい。

……なのに、斜陽に照らされたその顔にさす影が、少しずつ暗くなっていく様な……奇妙な錯覚を感じる……。その僅かな予兆に……背筋がぞくりとした。

「よいしょ……」

　少しでも頭の眠りを覚ましたくて、私は半身を起した。いつしか打ちつけたらしいふくらはぎには、氷嚢が当たっていた。チルノの作に間違いない。

「リグル大丈夫？」

「うん、二人のおかげで大分具合も良くなってきたよ。ありがと。」

　私は、チルノに目線を合わせてその言葉を言った。チルノの顔が、ぱぁっとにわかに明るさを取り戻すのを見て、再び僅かな安心感を得る。感謝の言葉には、純粋な感情の他にその打算もあった。言葉を発した結果で自分が安心したい、打算が。

「二人とも、座るといいよ。椅子二つぐらいあるでしょ？」

「うん、ありがと。リグル、思ったよりは元気そうだよ。チルノ、よかったね。」

「あ……うん！」

　私の優しい言葉で、チルノの顔に持ち前の明るさが戻った。二人分の椅子を持ってきて、ルーミアの為にベッドのそばに一つ、少し離して自分の為に一つ置いた。私とのコミュニケーションを回復して尚離れているということは、やはり病気の私への配慮が有るのだろう。しばらく忘れていた、他人に身を案じられる幸せ。嬉しさを、感じざるを得なかった。

　その中で、チルノがごく自然に言葉を発した。

「そーだ、えいりんさんが来るまでに、すましとかない？」

　……？　聞きなれない単語が混じっていた。私にとって、意味を持たない語の羅列だ。

『えいりんさん』

　おそらくさんは敬称で、『えいりん』の部分がなにか固有の人物をさすのだろう。

　漢字に当てはめるとしたら……営林？　営林所があり、そこに勤める者がいるとすれば、ここは森林だ。納得いかなくもない。ただ、チルノの口ぶりではその営林さんが、近々ここに来る事になっている。

　……何故？　何のために？　何の必要性、必然性、正当性が有る？　その事象に。そんな人が、何の用が有るっていうんだ？

　しかし、面食らう私を置いてきぼりに、二人には合点がいっているのかからからを笑い合うだけだ。

　そんな二人と、怪訝に思う私の温度差は明らかだった。……徐々に、不快さと焦りが湧きあがってくる……。ルーミアとチルノが、何を言っているのか理解できない。

「……なに、営林さんって誰……？」

「あはは、知らないの？　えいりんさんはえいりんさんだよ。あはははははははははは」

「あはっ、リグル、おぼえてる？」

「覚えてる……なにを？　て言うか質問に答えて」

「あはははは、リグル、忘れちゃったのかな？　……おはぎの宿題。私が作ったのがどれか……あれ、確か宿題忘れだったよね？」

　……そんな宿題も……、確かにあった。

　あれは、ガラス片が出てきておはぎを全部投げてしまった。どれがルーミアが作ったのかは回答していない……。それの……罰ゲーム？　なぜ、今そんな話が出てくる……？

「あはははははははははははははははははははははははははははははははははは」

　私の疑問は、表情に出ていたに違いない。それに対する答えが、二人のこの乾いた笑いだった。

　何が何だか……わからなくなってくる。

　今日一日……思えば始めから何かがくるっている！　おかしい。理解できない！

　チルノは当たり前のように殺意を認め、泣き出したかと思ったら豹変し、ルーミアには追われ、わけのわからない兎達に襲われ、気付いたら自分のベッドに寝かされ、罰ゲーム。

「あはははははははははははははははははははははははははははははははは」

　こいつらは……何が可笑しいんだ……！？

　既に異常な空間に引きずり込まれている事に気付くのに、そんなに時間はかからなかった。

　そうだ……こいつらは一体誰だ。……誰なんだ！？

　私のよく知る、さっきまでそこに居た、ルーミアやチルノによく似た……誰なんだ

よッ！？！？
いつの間にか、ルーミアは私の後ろに座っていた。なぜ？と思う間もなく後ろから羽交い締めにされる！！
「な、何の真似ッ！？は、離してよッ！！」
「動かないでね……罰ゲームだから。あははははははははははははははは」
自分の体が体調が悪く鈍重とはいえ、ルーミアの羽交い締めはがっちりと極まり身動きできない。
そのあまりの力強さに、私は本気になって力を入れ抵抗したが、全くびくともしない。全身から焦りが噴出し、冗談の領域を超えている事を悟らされる。
こんな、万力のような力、私のよく知るルーミアに出せるとは思えない！じゃあ、今私をがっちり締めあげているこの細くて華奢そうな腕は……誰の腕なの！？！？
「……リグル～、抵抗しちゃだめだよ～。ルール……何番でもいいや。罰ゲームには従うんだよ～。」
チルノ、いや、チルノによく似たそいつは、まるでチルノの様に、悪戯っぽく口元を吊り上げて私に語りかける。
だが、間違いなくチルノじゃない。チルノじゃない何者かが、チルノのフリをしているのだ！！そうとしか思えない！！！
「ふっふっふ、えいりんさんが来るまでに済まさないとね。」
チルノがポケットをまさぐる。
「なに……どうする気だよ……？」
ルーミアは、さらに私を強く押さえつける。そして耳元で、『げてげてげて』もはや、笑い声にも聞こえない様な奇怪な声で大笑いをしている。
こんな奇怪な声が、絶対に私の知っているルーミアの喉から出せるはずがない。そうだ、ルーミアのフリをする、こいつの本当の声なのだ！
抵抗する事の出来ない私に、チルノがゆっくりとポケットをまさぐりながら近づいてくる。
全身から頭のてっぺんに向けて、血液が沸騰していく。視界が紅く、歪曲する。ボーーーーっと頭の中で低い機械音が鳴り響く。鼓膜が内側から膨張する。口の中が、からからに乾いていく。
「だいじょぶだいじょうぶ、痛くないよ！」
「な、何をする気？これは一体何の真似だよ！？」
「何いってんのリグル、わかってるくせに☆」
「何がよ！？私には何がなんだかさっぱり分からない！！わけのわからないこと言って煙に巻くのはやめてよッ！！！」
「………魔理沙と同じ目に遭ってもらう。」

「……え、………え？」
魔理沙と同じ目？え？それって……え？
だって、魔理沙は……
「んふふ……リグル、とぼけてる？薄々は気付いていたんでしょ☆」
ルーミアが口元に耳を寄せて、諭すように笑いかける。……だが、その口調にも、例えようのないおぞましさが含まれていた。
私が、どうなるって……？魔理沙と同じ目？？何？魔理沙が遭わされた目って……
「やめて……やめてえええええええ！！！！！」
「……観念しなよっ。んじゃ、」
チルノの仕草が、あまりにも呆気なくて、それが恐ろしい。
死刑執行の厳かさなどなく。それはまるで、日常のありふれた行為であるかのように、躊躇が無かったからだ。
チルノが手をポケットから取り出す。手に握られていたのは、ちょうど、手に握り易いサイズの……そして、もう片方の手で私の胸元に振れた瞬間
後頭部に電撃が走り、世界が暗転した。

……私は、どのくらいここにうずくまっていたのか。

……何分？　それとも何十分？　……見上げた時計の針は、まるで私が目を閉じていた間だけ、きっちりと待っていたのではないかと思うぐらい、進んでいなかった。

本当に？　今室内を覆う空気は、灰色の静寂だけだ。

羽交い締めにしていたはずのルーミアも、凶行に及ぼうとしたチルノもいない。さっきまでの歪み切った狂気は、失せている。

部屋には、私以外の気配が全くなくなっているのだ。

まさか……全部……何かの幻？

かつてない、異常な体験。自分の正気を一瞬疑うが、同時にある種の安堵感を感じていた。

は……は……やっぱり……あれは幻だったんだ。ルーミアやチルノが……あんな恐ろしい事をするわけが……無いんだ。

なのに、目頭が熱くなる。瞼の奥から、赤熱する感情がこみあげてくる……。

どうして……？　疑問は、涙がこみ上げる理由にではない。

どうして……？　それは、悲しみだった。

……どうして、悲しくなるんだろう。わからない。……わからない。

新参者で初対面の私に、気さくすぎる程の親しみをプレゼントして、私の緊張を解いてくれた……チルノ。

……そのチルノは、窓際に、腰を半分ひねったうつ伏せの不自然な格好で横たわっていた。

水色の髪は半分が黒く染まり、白いシャツはべっとりと赤黒い。すぐそばの壁一面を染めている真っ赤な物は、彼女がまきちらしたものに違いなかった。

いつも明るい笑顔を絶やさず、私がこの世界にやってきてすぐに親切に接してくれた、ルーミア。

……そのルーミアは、顔面を突っ伏してわたしの足もとにうずくまり、チルノと同じように赤黒いプールに浸かっていた。赤黒い汚れが染み込んだブロンドが痛々しい。

……………………………………。

何が有ったのか、理解できない。……だれかが、私を助けに来てくれたの？　そして、この二人を打ち倒したのか……？　この……金属バットで？

右腕の重さに、ようやく気付いた。

いつ握ったのか。……それは件の金属バットだ。

べっとりと赤い血が貼り付き、……凶行の主人公であることを疑わせようともしなかった。

その、明らかに凶器の金属バットを私が持っている。そして、家の中には私以外に誰もいない。

「え…………私？」

…………………そうだよ、リグル。私がやったんじゃないか。私は、私自身を諭すように……優しく告げた。

無理に思いだす必要はない。後悔する必要もない。……やらなきゃやられてたよ。わかってるでしょ……？

「だって、血が……血がこんなに……」

二人とも、ピクリとも動かない。額が割れてとか血が一筋とか、そんな甘いもんじゃない。あたり一面真っ赤な飛沫が飛び散り、べっとり血糊で覆われた頭は歪に形を変え……

「し……死んじゃったの……二人とも……？」

……落ち着けリグル……いつものクールな私はどうしたんだ……？

……ようやく景色に色が付き、空気に匂いが戻る。思い出す……そうだ……チルノが眼前に迫った時……私は、反撃したんだ。

無我夢中だった。羽交い締めにするルーミアを全身をひねって投げ飛ばし、そのままルーミアごとチルノに体当たり。ルーミアが再び飛びかかってきた……思い切り体当たりし……ベッドのわきに転がされたバットが視界に……

ぶつん

そこで、荒れたビデオの再生は止まった。いや、この先も写されてはいる。ただ、私の中のもう一人の私が、見るなと言ってテレビを消したのだ。私の中で暴走していく恐怖が、上がりすぎた電圧がブレーカーを落とす

ように。その間にも別電源のビデオは回り、ブラウン管の向こうで淡々とその恐ろしい光景を流し続けている。

そして、その過程を経たのがこの部屋の惨状だった。部屋中の壁という壁に血が飛び散り、気付いてしまえば吐き気を催さずにはいられない、むせ返る様な生臭い……鉄の臭い。

あ、ああ、あぁぁあぁあぁぁあああ……

どんな経緯があったにせよ……私は、友達を……仲間を……殴ってしまった。

殴ってしまった？　違う。はっきり言おう。殴り殺したのだ。醜くひしゃげた彼女たちを、壊してしまったとさえいえる。

でも、こうしなければ私がやられていた。過剰だったにせよ……そうでも思わなければ、ようやく狂気の空間を脱したと言うのに、この不条理をねじ伏せる事が出来なかった。

……待て。

思い出す。

ここには、営林さんなる人物が呼ばれている事を。二人の会話から、彼女らの一味である事は想像に難くない。

クールになれリグル。まだ……終わってない。終わっちゃいないんだ！

目の前の無残な現実に心を痛める余裕すらも、急速に失われていく。

……その時、扉の向こうからかすかに話声が聞えた。

会話という事は、二人以上がいると言うことだ。

正面向きの窓のカーテンを僅かにずらし、表を窺う。

……それは、異様な光景だった。4～5名の妖怪兎達が、私の家を臨む道に群がっているのだ。

この森でめったに見ない妖怪兎……いかにも今日襲ってきたあの二人を連想させる……いや、連想させるどころか、髪の長いあいつは、まさに襲ってきたあいつじゃないか！！

黒髪で小柄なの妖怪兎達の中で一際目立つ髪色といで立ち。そうだ、私は僅かの時間とはいえ対峙し戦ったのだ。顔を見間違えたりするものか！

それらを纏める様なしぐさで話す長身の女性は兎ではない。医師を思わせる白衣を羽織っていた。……だが、その服装はどう見ても医者には見えない！　医者のフリをした変装だと直感する。

白衣の女性がこちらを向き、玄関へと近づいてくる。他の兎達は、そろそろと姿勢を低く接近し、物陰に散って様子をうかがっている。

居留守は無駄だろう。あれだけ堂々と襲ってきたグループだ。どんな強硬な手段もいとわないだろう。

ここは、何とか脱出だ。そして、再び神社へ。捕まるなら、新聞記者でもなんでもいい。

トントン！

ドアがノックされる。もう時間がない。

まず、必要なのは武器。そして走る靴だ。

靴をはき、バットを握り、それから……横たわるチルノとルーミアを、もう一度だけ振り返った。

多分これが、二人との今生の別れになるのだろう。

「私、みんなの事……本当に友達だと思ってたんだよ……。」

なのに……どうして、こんなことになってしまったのだろう。

口に出して意識したら、たまらず涙がこみ上げて言葉がつまった。

外の世界で、灰色の日々を生きてきた。何をやっても、どれだけ生きても、楽しい事なんて何一つなかった。

そんな世界を、変えてくれたのがこの幻想郷と……みんなだった。

この一年、本当に楽しかった。

弾幕ごっこや、遊びで、悪戯で、宴会で、バカ騒ぎし……

思い出せば……もう止まらなかった。目から熱い物があふれ出る、ぼたぼたぼたぼた……涙だった。

こいつらのために、涙を流す義理なんかないはずだ。だけど、止められないよ……。

例え命を狙われたとしても、殺されそうに

なったとしても、……この一年の思い出は忘れられはしないし変わることも無い……。
　それとも、あの楽しかった日々は、私をたばかるための罠だったのか？
　……いや、そんなはずはない！
　ルーミアもチルノも……みすちーも！本当の私の仲間だ。きっと、彼女らは私を殺すよう何者かに強要されたか、でも脅迫で仲間を売る様な子たちじゃなかった……じゃあ何らかの方法で意識をのっとられて……そんな非現実的な……じゃあやっぱり……？
　私は、何を考えているんだ。真実は、目の前の結果だけ。あしもとに横たわる二つの結果。それだけが真実！
　言い逃れたいだけだ。どう捻じ曲げたって、私が仲間を殴り殺した事に何も変わりはないと言うのに……！！！
　抑えていた異常な感情のダムに亀裂が入るのを感じた。……虚勢という平常心がひび割れ、その隙間から狂気が溢れだしてくるのをひしひしと感じる。
　私が殺した。私が殺した。私がルーミアをチルノを殺した殺した殺した

　トントン！

　再びノックが響く。
　その容赦ない響きが、私にもう一度だけ冷静さを取り戻させてくれた。
　もう一刻の猶予もない！早く逃げなければ！！
　とにかく……死にたくない。もうおしまいだ。何もかも滅茶苦茶。あんなに楽しかった日々は粉々に、跡かたもなく粉砕された。ならば、だから知りたい。なんでこんな事になってしまったのか知りたい！
　生き残って、全てを知るのだ！私が生きるために殺された仲間達の為にも、絶対に生き伸びなければならない！！
　……足音を殺し、裏手の窓へと向かう。開け放つ前に、周囲の気配を窺う……気配はない？
　ゆっくりと窓を開き、静かに窓枠に足をかけた。
　うまく連中を出しぬけた……そう思いかけた時、鋭い声が空気を割いた。
「いたわ、裏の窓よ！！」
　怒声が体を貫き、戦慄が駆け抜けるッ！！
　相変わらず熱も頭痛も体の痛みも酷いが、走るしかないッ！！！逃げろリグルッ！！！！
　知性や理性など歩を進めるたびに頭骸骨から零れ落ちていく。
　私は窓から飛び出してすぐに家の裏の藪に突っ込んだ。少しでも妙な所に逃げ込めば追手を撒けるのではという本能だ。
　梢や棘付きのツタが腕や頬や足を引っ掻く。痛みは感じない。疲労も無い。体中の全細胞が、ただ生きたい。それ以外何も望まなかったから。いかな理由が有れど歩を止めれば、そこで殺されてしまうのだから。
　私は走る。追手の気配は消えていない。だが、例え誰も追っていなくても私は走り続けただろう。虫達が鳴いている。私も、やがてそれに加わるのだろうか。
　どうしてこうなってしまったのだろう。いつから世界は狂い始めたのだろう。新聞記者など招き入れたからか、あの宴会の夜か、それともあの新聞を盗み読みした時からか……。
　虫たちだけが……全部知っている。きっと知っている。だから、虫たちの声が聞こえる方向へと走った。だが、泣き声は走った分だけ遠のく。近づけない。
　私が悪いのか……どうしてみんないなくなってしまうの？遠くへ行ってしまうの？私が悪いのか、なら謝るから！！
　ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。
　ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。
　ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。
　ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい……。
　体中、いや、精神までもが、ぼぉっと熱い。脳が心臓の様に脈打っている。視界が、はじからポロポロと黒く抜け落ちていく。四肢の感覚が失われていく。自分が走っていることは、足の裏の衝撃と、顔で切る風だけで感

じられた。世界が……遠のいていく……私は……死ぬのだろうか……なんで……どうして……

全ては虫たちだけが……知っている気がした。

Name Wriggle Nightbug

Alter XX

Oberhaupt Klage　頭痛　発熱　倦怠感　軽い咳、喉の痛み　高熱に伴う全身の痛み

Gegenwartige Krankheit　宴会直後に発症？ 罹患は数日から一週間前か。発症前に夜間飲酒後冷水を被り帰宅。

Gesellschaftliche Geschichte　一年前に外界から移住。妖怪。昆虫。目立った特徴無し。よく遊びよく寝る。飲酒あり。喫煙無し。

Sichten　被害者らと交友関係良好。身体症状発症後、急速に距離を置く。挙動不審。言動粗暴。発言意味不明……

〈作者コメント〉
この糞長いお話を読んでくださった貴方、どうか真相を暴いて下さい。それだけが私の望みです。

◀ 黒ストスキー

▼ 小崎

特別掲載コーナー

「祭」fromリグル板

編集小崎が運営するリグル専用お絵描き掲示板「リグル板」（http://oekaki1.basso.to/user61/wriggle/）にて12月29日～1月1日に開催した第2回「祭」の投稿作品を特別収録しました。パロorエロ中心でとお題を出したところ、見事に9割の絵がエロで埋まる中、稀に見る混沌とした年越しの様子をお楽しみください。

◀「リグどもえ」mimidori

▼「魔法陣リグルリグル」mimidori

◀ 小崎

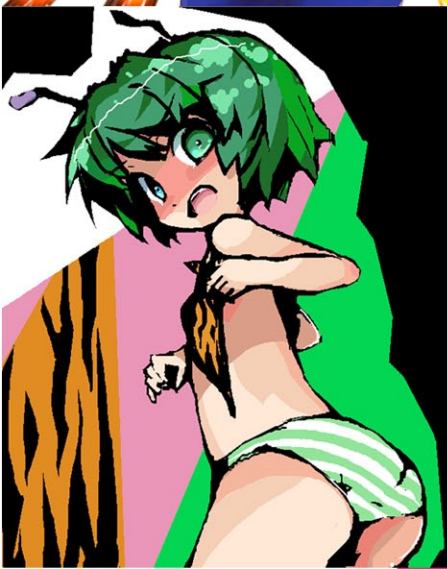
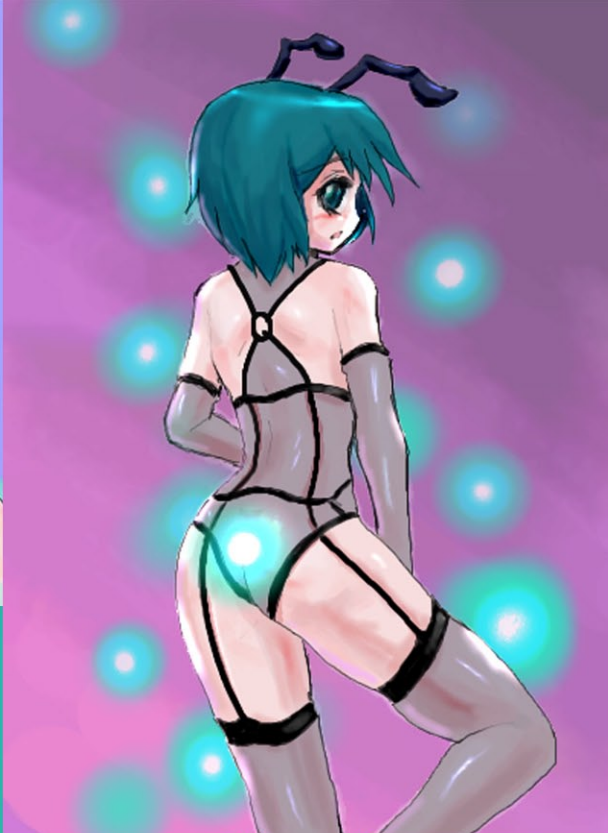
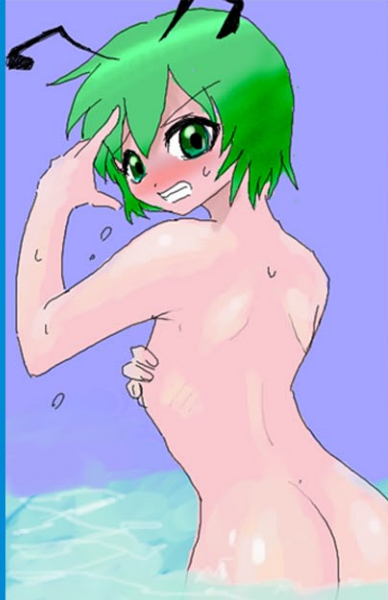
斑 ▶

斑 ▶

◀ 凡用人型兵器

ぽよ・ぽよ千歳飴 ▶

◀ 斑

このリグコンどもめ！
◀ 小崎
▼ 小崎 ▶
あー
ぐだ
もう年明けてますよ
ぐだ
片付けしましょう～
おめでとうございます
うぃ～～
おめでとう
ザッ
ドン
ドン
純米
じゃあ新年会開始～
おめでとう
?
ガバ
ん
▼黒ストスキー
▼「♀♂」角右衛門

ぽよ・ぽよ千歳飴
凡用人型兵器
!?
キッカ
斑
黒ストスキー

White Season

preludenano

p70～p73

三部作お付き合いいただきありがとうございました！

*その後サニーミルクはチョコを食べて機嫌を直しました。

月刊POMDEBUG SELECTION

月刊POMDEBUG・フレーバーセレクション

㈱リグル製菓

p75

ポン・デ・りぐるんをこよなく愛する社員たちによる合作です。

Romancing Bu・G

涼音 奏

p76

これも俺のサガか・・・　--http://rshk.uijin.com/

光魔法を極めた四人

preludenano

p77

コメントなし

無題

草加あおい

p78～p82

ベースは殆どセー○ームーンですが、小ネタが（特に最後に）いくつかございます。全部ピンときた貴方、結婚しましょうw

幻想郷デュエル大会

くらげん

p83～p87

なんかもうわかりづらくてすみません。ちなみに作品内のネタは実際の環境と異なる場合がございます。

古いのか新しいのか

キッカ

p88～p89

虫でヒーローと言えばビーファイターです。個人的には仮面ライダーより先に浮かびます。
微妙な学園キノネタはまさに誰得。
しかし、パロディ難しいですね。方々に喧嘩売っちゃいそうでw

リグル・ザ・サティスファクション

羅外

p90

前々から描きたかった、カブトボーグを描かせていただきました。

Darker than Green 緑の契約者

むつのかみ　よしゆき

p151

突発ネタですが、大好きDarker than Blackからネタを投下
RG201となったリグルを描いてみました。黒さんのコートとリグルのマントが妙に合うかなーと思ったんですが、難しいですねZzz。
リグルの特徴はやっぱりマントと触角なんで、マント好きな自分には最高ですよリグルは!!
そういえば、2期のターニャがリグルの能力ですね（"；

表紙

小崎

彩色した夜が満月だった為、右脳との悪魔会話に失敗しました。オレサマオマエメギドラオン。

漫画・自由作品、表1～表4　作者コメント

リグると！
ひどぅん
p2

チルノ→ハルヒ　リグル→キョン　ルーミア→長門さん
ミスティア→古泉　橙→みくる　藍→未来のみくる
美鈴→鶴屋さん　毛玉→あちゃくらりょうこ
さぁ、みんなで想像してみよう！

某少女小説のパロディのようなもの
長閑
p55

初投稿です。以前から描いてみたかった幽リグに挑戦してみました。これからも投稿していきたいです。pixiv338109

蠢々魔法図書館
Step
p4～p7

ベタに紅魔館ネタなどを、ってでもリグルがメインを食われてしまいました、すみません

蟲の手帖
HOUSE
p56～p60

夢落ちならぽっちゃりネタも許されるだろう…から、パロディならデブネタも許されるだろう…にクラスチェンジ。内心かなりビクビクしながら投下していたりします。こんなもの描いて石投げられたりしないかしら…

今年もよろしく。
言示弄
p21～p26

今日も元気にもう駄目だ。　中途半端でスマソ

月刊POMDEBUG
社長Salka@リグル製菓
p61

幻想郷一スイーツな月刊誌を目指して！

GOGO大ちゃん　その３
草葉
p27～p28

紅楼夢のコピ本から、これが最後になります。
つづきはまた何れ…

出張版ポン・デ・りぐるんの漫画
くらげん
p62, p74

いや、うん、正直使い回しはどうかと思うんだ。ごめんなさい。ごめんなさい。ポン・デ・りぐるんは食べてしまいたいくらい可愛いですね！

奇動戦士リグル　～逆襲の天子～
怒羅悪
p47～p54

引き続き投稿のどらおです、なんていうか、もう、
正直すまんかった
その…勢いで描いてたら、
こんなことになってしまいました。
大変失礼しました。

パチュリグな日々～ポン・デ・りぐるん編～
東
p63～p64

今回もテーマ投稿のネタがまとまらなかったため、Salkaさんの計画にのっかってみました。ポン・デ・りぐるんかわいいよ！

月刊ナイトバグ　2010年2月号

2010年1月23日発行
企画・編集：神楽丼／小崎
http://www8.plala.or.jp/denpa/indexdon.html

原作　上海アリス幻樂団
東方projectリグル・ナイトバグファン企画　web配布／自由投稿参加型月刊誌

編集後記

小崎でございます。まずは今回発行日が遅れてしまい、申し訳ございませんでした。
こういうことが癖にならないよう、次号以降気をつけていきたいと思います。

さて、そんな編集のやらかしはありましたが、なんと今月号は計152P！！
8月号以来の100P超に加えて、めでたく過去最大のページ数となりました。まさか更新するとは。
勿論掲載内容を見れば、crimson-angelさんの巨大SS＝47Pの存在がかなり大きいわけですが、しかし、それ以外でもすでに100Pを超えているわけで、漫画作品の充実などもとても目立った月だったと思います。

パロディ特集もお陰様で大変盛り上がりました。漫画やゲームなどの定番ネタの他、アニメや文章作品、あとパロディとはやや違ったかもしれませんが某ドーナツ屋さんのあれとか(まさかこれほど早く2度目があるとは)、好きなネタで自由にやっていただけたようで本当に良かったと思います。多分、バックナンバー見ても今月号が一番カオスでしょう。

ちなみに、イラストの掲載順は毎回ほとんど適当なんですが、今月のSalkaさんと貴キさんのイラストはあえて隣同士にさせていただきました。いや、すみません、他意はないんですがこのものすごい描き込みを是非同時に鑑賞したくてですね。静かな気分でぼうっと眺めていると、自然と幸せな気分になれます。あと、絵を描きながら眺めてるとすごいプレッシャーになりました。あぁぁ俺描き込み少なー…。

というわけで、今月もお付き合いいただきありがとうございました。
次号は今回に続き、どう転ぶかわからない「雛」特集です。お楽しみに！
くるくるひええっと。

2010 / 1/ 23　小崎　ひふみで2倍払い

次号3月号は2月22日（月）発行予定！

※次号の投稿締切は2月15日(月)です。皆様からの熱い投稿をお待ちしています。

「言ったろ…契約者は嘘つきだって」

DARKER THAN
GREEN
緑の契約者

月刊NIGHTBUG　2010年2月号

Touhou Project
Wriggle Nightbug
Fan book
Not for sale

豆板醤　亜斗
Step　銅おりは
言示弄　如月翔
草葉　くろと
壁々
夏樹 真
crimson-angel
越冬
社　蛍夜
壁々
IDEA(GAGRim)
Salka
㈱リグル製菓
ハシゴ
むつのかみ　よしゆき
貴キ
蛍光流動
触角幼女
涼音 奏
緑
キッカ
東
ひどぅん
草加あおい
長閑
くらげん
preludenano
HOUSE
羅外
怒羅悪
小崎